

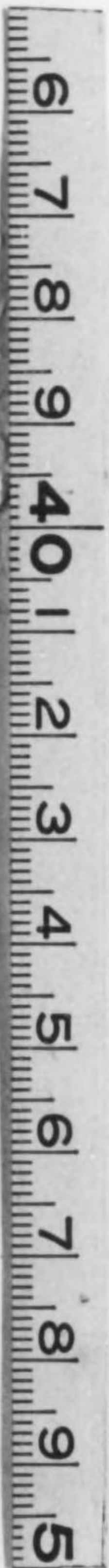
343-1



1200501401038

343

1.



始



卅 70 61

支那
事變



忠勇列傳

陸軍之部 第三卷

社團
法人

忠勇顯彰會編纂



343
14

本書第壹卷以下每卷刊行ノ都度

天皇

皇后

皇太后三陛下へ奉獻ノ儀願出デタル處御嘉

納ノ御沙汰ヲ賜ハリタルニ付茲ニ謹記ス

尚各宮殿下、王公族各殿下ニハ從來每卷台

覽ヲ賜ハリアリ

明治天皇 御製

世と共に譲りたりんば
人共を授けん

朕在位御東陽平八事御書



忠勇

守正王



元本會副總裁 侯爵 東郷平八郎閣下題字

忠誠

萬向

平八郎閣下

陸軍大臣 板垣征四郎閣下題字

流

芳

子

古

板垣征四郎

海軍大臣 米内光政閣下題字

忠

烈

光

政

五

序

皇徳ヲ六合ニ施シ徳化ヲ八紘ニ展ベ以テ普ク人類共存共榮ノ慶ヲ俱ニセントスルハ是レ我が皇道不磨ノ大精神ニシテ肇國以來不動ノ國是デアリ、我等大和民族ニ課セラレタル尊キ大使命デア
ル。過グル日清日露ノ兩戰役モ近クハ滿洲事變モ皆是レ此ノ使命ヲ果サンガ爲ノ聖戰ニ外ナラナカツタ。吾等ノ父祖先輩ハ克ク是等ノ國難時艱ヲ打開シテ國運ノ隆昌ヲ圖リ、又東亞諸民族ノ爲其安寧秩序ノ維持ニ大ナル貢獻ヲ致シ、漸次東亞黎明ノ曙光ヲ認ムルニ至ツタ。是レ固ヨリ大稜威ノ然ラシムル所、皇國軍民ノ血肉ニ祖先以來繼承セル忠君愛國ノ魂ガ躍動シ又光輝アル國史ニ依リ

刺戟鞭撻セラレシ賜デアツタ。

然ルニ世界ノ視目ハ日露戦争ノ終末ヲ以テ一轉機ヲ劃シタ。即チ列國ハ我が國力ノ眞價ヲ認ムルト共ニ列強中東亞ニ野望ヲ抱ク國々ハ新興日本ノ發展ヲ喜バズ其東洋ノ盟主タルヲ忌避シ、利害ノ相反スル所正義人道ヲ無視シテ事毎ニ壓迫的排日ノ行動ニ出デ遂ニ唇齒輔車ノ關係ニアルベキ隣邦支那ヲ使喉シテ抗日ノ舉ニ出デシメ、又頑迷ナル蔣政權ハ之ヲ奇貨トナシ夷ヲ以テ夷ヲ制スル陋策ヲ擅ニシ、敢テ我が帝國ノ既得權益ヲ蹂躪シテ遂ニ挑戰ノ暴舉ニ出デ、加之無辜ノ自國民衆ヲ塗炭ノ苦ミニ陷レ恬然タルガ如キハ神人共ニ赦サザル所、茲ニ我が帝國ハ敢然起チテ蔣政權膺懲ノ一大聖戰ヲ起スニ至ツタノデアアル。

今ヤ皇國ノ軍民ハ皇猷翼贊ノ一途ニ舉國必勝ノ信念ヲ以テ奮闘シ着々其成果ヲ收メツツアリ。就中忠勇無雙ノ皇軍ハ陸ニ海ニ空ニ偉大ナル戰果ヲ收メ蔣政權ヲシテ啞然タラシメタルハ勿論克ク武威ヲ中外ニ宣揚スル事ヲ得タ。其間赫々タル武勳ヲ奏シテ敵彈毒及ニ殛レ聖戰ノ尊キ犠牲トナリシ幾多將兵ノ忠勇義烈トソレ等肉親者ノ烈々タル忠誠ニ至リテハ正ニ鬼神ヲ哭カシムルモノガアリ眞ニ軍民ノ龜鑑ト謂フベキデアアル。吾人ハ前途尙遼遠多難ナル時局ニ鑑ミ之等尊キ犠牲者ノ心ヲ以テ心トナシ粉骨碎身飽クマデモ聖戰ノ目的貫徹ニ邁進スルト共ニ其遺勳ヲ千載ニ傳フベキ責務ヲ有スル。

明治天皇ノ御製ニ

世と共に語り傳へよ國のため

命をすてし人のいさをを

ト仰セラレテアル。

我が忠勇顯彰會ハ日露戰爭以來累次ノ聖戰ニ殉職セル勇將猛兵ノ忠勇列傳ヲ編纂刊行シ其忠烈ヲ顯彰シテ芳名偉勳ヲ千舌ニ傳ヘ一ハ以テ聖旨ニ副ヒ奉リ一ハ以テ英靈ヲ弔ヒ遺族ヲ慰藉スルト共ニ後昆修養ノ龜鑑タラシメン事ニ努メ來レルモノナルガ、今次事變ノ忠勇列傳タルヤ現代戰ノ特質、進歩セル各兵種ノ性能、而シテ戰歿者ノ偉大ナル精神力ヲ精察シテ實戰ノ真相ト其功績ノ眞價トヲ傳ヘンガ爲ニハ容易ナラザル努力ヲ要スル。加之戰歿將兵ノ

増加スルニ伴ヒ益々其容易ナラザル大事業タルヲ信ズレドモ幸ニ貴重ナル軍部資料ト戰地ニ於ケル上官戰友ノ信書等ニ基キ百折不撓献身的ノ努力ヲ捧ゲテ所期ノ目的ニ邁進セン事ヲ希フ次第デア
ル。

幸ニ吾人心血ノ結晶タル本列傳ガ幾萬戰死者ノ靈前ニ記念的家寶トシテ光彩ヲ添へ且遺族慰藉ノ一助トナリ、幽明一如雄魂忠靈ガ永久ニ遺族並ニ子孫ノ血肉ニ生き遺族並ニ子孫モ亦高邁崇高ナル護國ノ英靈ニ生き以テ皇猷ヲ扶翼シ奉リ又一家ノ前途ニ神靈ノ加護佑助ヲ具現スルニ至ラバ吾人ノ本懷之ニ過グルモノハナイ。

昭和十四年七月聖戰第二週年記念ノ日

六

社團
法人 忠勇顯彰會

會頭 樞密顧問官 清水 澄

凡 例

- 一、本書發行ノ目的並ニ本會ノ趣意概歴ハ序文及卷末ニ記載シ
アリ。
- 二、本卷ニハ昭和十三年四月二十三日第一回ニ行賞ヲ發表セラ
レタル陸軍戰歿殊勳者中ノ三百三十四名及同年七月二十八
日第二回發表者中ノ十六名計三百五十名ヲ掲載シアリ。
- 三、昭和十二年七月七日以降滿洲國ニ於テ匪賊討伐等ノ爲忠死
シタル者ハ支那事變忠死者トシテ取扱ハレアルヲ以テ本書
ニ掲載セリ。
- 四、本書傳記掲載順序ハ階級毎いろは順ニ依レリ。
- 五、傳記ニ多少精粗繁簡ノ別アルハ資料ノ多少ニ依ルモノニシ

テ資料ノ蒐集ニハ大ニ努力シタル所ナルモ遺憾ナカラ完キ
 テ得サルモノアルハ洵ニ已ムヲ得サル所ナリ。
 但シ本書中戰場ニ於ケル行動武勳ハ當局ノ特別許可ヲ得テ
 専ラ陸軍ノ調書ニ據リ記述セルモノナリ。
 六、肖像掲載ナキモノハ乍遺憾終ニ寫眞ヲ蒐集シ得サリシモノ
 ナリ。
 七、部隊番號其他港灣出發地、上陸日時、地點等軍ノ機秘密保持ニ
 關係アル事項ハ之ヲ省略シ又部隊ハ當時ノ部隊長姓ヲ冠シ
 テ表示セリ。
 八、本書ハ非賣品ニシテ本書掲載ノ戰歿者全遺族各位ニ寄贈ノ
 モノハ國民ノ熱誠ニ依ル陸海軍恤兵金ヲ以テ支辨セラレタ
 ルモノナリ茲ニ特記シ感謝ノ意ヲ表ス。

支那事變 **忠勇列傳** 陸軍之部 **第三卷目次**

明治天皇御製

御題字

本會總裁 大勳位 梨本宮守正王殿下

題字

元本會副總裁 故候爵 東郷平八郎閣下
 陸軍大臣 板垣征四郎閣下
 海軍大臣 米内光政閣下

會頭樞密顧問官 清水 澄

一、序……………一
 一、凡例……………一
 一、索引……………一
 一、將校准士官之部……………一

歩兵上等兵 岩本 巖 (鳥取縣) 忠實勇敢なる通信手、大次花激戦の華と散る(壯烈)……………三六四
 歩兵上等兵 石賀正吉 (鳥取縣) 忠孝兩全の勇士、傳令勤務を全うし大次花の華と散る……………三七七
 輜重兵一等兵 石田信太郎 (靜岡縣) 水路輸送中敵襲を受け孤軍奮闘職に殉ず……………七九五

歩兵上等兵 六本木清作 (群馬縣) 大隊傳令、敵の逆襲に對し寡兵奮戦大隊本部の危急を救ふ……………三九九

歩兵 中佐 原田 愛 (鳥取縣) 勇敢指揮適切にして戦勝の端を拓き死に臨み悲壯の遺書を遺す……………一
 軍醫 大尉 橋本武夫 (福井縣) 職責に忠實なる醫官竟に匪弾に玉碎す……………一九

歩兵 中尉 林 安男 (長野縣) 部下殆ど全滅に瀕するも自ら銃を執り敵重火器を制壓して戦勝の端を拓ける機銃小隊長……………三七
 歩兵 軍曹 橋詰正一 (長野縣) 重機銃分隊長黃村附近の戦闘に活躍して友軍の危急を救ふ……………一〇三

砲兵 軍曹 花園光雄 (鹿兒島縣) 沈着勇敢なる彈藥分隊長二十里舖の逆襲を粉碎す……………一〇四
 歩兵 伍長 橋本正一 (和歌山縣) 敵火を牽制して中隊突撃を作為せる分隊長……………一八七

歩兵 伍長 拮石徳重 (長野縣) 戦闘惨烈の極所に堅忍格闘敵を斃して彰徳城外に玉碎す……………一八九
 歩兵 伍長 原田 浩 (島根縣) 勇敢なる輕機銃手、積極的に任務を遂行して殲る……………一九三

歩兵 伍長 橋本正雄 (和歌山縣) 立哨中優勢なる敵と格闘して玉碎す……………一九四
 工兵 伍長 林 茂 (愛知縣) 決死軍橋を補修し友軍の渡河戦闘に協力す……………一九六
 歩兵上等兵 花淵福太郎 (宮城縣) 勇敢なる小銃手、敵の奇襲に應戦奮闘玉碎す……………三九二

輜重兵一等兵 濱田吉雄 (茨城縣) 小行李監視中敵の夜襲を受け之を撃退して斃る……………七九七

歩兵 伍長 新島 茂 (群馬縣) 挺身敵の機關銃を撲滅し飛行場の警備を完うす……………一九八
 歩兵 伍長 西村正雲 (兵庫縣) 適功勇敢なる指揮に依り突撃の動機を作れる火線分隊長……………二〇一

歩兵 伍長 西村順一 (兵庫縣) 敵彈雨下する泥海中に彈藥を補充し歩兵砲の威力を發揮せしむ……………二〇三
 歩兵 伍長 西川清太郎 (和歌山縣) 挺身上官の危急を救はんとして殲る……………二〇五

歩兵上等兵 西尾榮治 (鳥取縣) 勇敢なる機關銃彈藥手、猛火の下再度彈藥を補充して竟に斃る……………二〇九
 歩兵上等兵 西垣紀典 (兵庫縣) 志願して鐵條網破壊班に加はり其の重任を果たす……………二一六

歩兵上等兵 西川龍一 (兵庫縣) 中隊長と共に德州城に一番乗りして竟に玉碎す……………二一八
 輜重兵一等兵 西岡瀧夫 (三重縣) 大敵の奇襲を受け勇戦奮闘の後七亘村の華と散る……………七九

歩兵 曹長 堀内利置 (長野縣) 重傷に墮るゝも尙指揮を繼續せる分隊長……………八四
 歩兵 伍長 本莊光男 (岡山縣) 勇敢なる輕機銃彈藥手、大隊の敵前渡河掩護に力戦玉碎す……………二〇八

歩兵上等兵 星 長雄 (北海道) 小隊長に肉迫する頑敵を斃し其危急を救ふ……………四〇〇

歩兵 中尉 富岡 孝 (兵庫縣) 卓越なる指揮を以て難局を打開せる機關銃小隊長……………四〇
 歩兵 准尉 富永 猛 (鳥取縣) 險峻なる山岳地帯の戦闘に活躍して戦に殉す……………七一

歩兵 伍長	富井繁夫 (兵庫縣)	勇敢なる輕機關銃手、張辛庄の華と散る……………	二一〇
歩兵上等兵	飛澤義男 (秋田縣)	十數倍の敵より包圍せらるゝも尙死闘を續け靈邱郊外に玉碎す……………	四〇二
砲兵上等兵	外山喜一 (神奈川縣)	忠勇なる通信手、彈雨の下斷線を補修し江隈要塞の華と散る……………	四〇四
歩兵 軍曹	千代四郎松 (北海道)	勇敢なる戰車長小隊長の危急を救はんとして奮戦玉碎す(壯烈)……………	一〇七
歩兵上等兵	珍坂榮 (兵庫縣)	人合庄の激戦に彈藥補充の重任を果たし優勢なる敵の逆襲を撃退す……………	四〇七
歩兵上等兵	忽滑谷藤吉 (埼玉縣)	決死宛平縣城の城壁に一番乗りし突撃路を拓く……………	四〇九
歩兵 大尉	大谷貞雄 (岡山縣)	謹嚴剛膽の機關銃中隊長屢々難局を打開し戰勝の因を作つて玉碎す……………	三二
工兵 准尉	興津条藏 (靜岡縣)	優勢なる伏兵に襲はれ最後迄剛勇機敏奮戦して玉碎す……………	三三
歩兵 曹長	尾上進 (鹿兒島縣)	勇猛剛膽滿洲事變に拔群の功を樹て今事變に再び殊勳を奏す……………	六六
歩兵 曹長	大山正男 (鹿兒島縣)	獨斷重機分隊を指揮し重傷を負ひ尙指揮を續け突撃を誘起す……………	六九
砲兵 曹長	奥山泰三 (京都府)	敵彈下に部隊長を護り身代りの忠死……………	六八
歩兵 伍長	大橋作次 (新潟縣)	列兵として獨斷敵の側防機關銃を制壓す(兄弟戰死)……………	三二
歩兵 伍長	大西俊治 (兵庫縣)	勇敢なる機關銃手、彈雨を冒し前進中職に殉ず……………	二四
歩兵 伍長	大橋康治郎 (大阪市)	剛膽機敏の小隊連絡掛、部隊の危急を救ひ職に殉ず……………	二六

歩兵 伍長	大道敏雄 (兵庫縣)	負傷して尙敵陣に突入り丁莊の華と散る……………	三九
歩兵 伍長	大張初藏 (大阪府)	居常修養怠りなき勇士、偉勳を奏して娘子關の華と散る……………	三二
歩兵 伍長	奥田和二郎 (大阪府)	職責遂行の範、津沱河の華と散る……………	三四
工兵 伍長	大谷喜市 (兵庫縣)	勇敢なる工兵、東邊庄の攻撃に進んで決死隊に加はり玉碎す……………	三六
歩兵上等兵	大江時忠 (鳥取縣)	正莊の堅壁に突入直前重傷を負ふも尙奮闘し戰勝の途を拓く……………	四二
歩兵上等兵	大日方萬作 (長野縣)	彈雨の中に上官の危急を救ひ且第一線に奮闘中保定城外に玉碎す(兄弟三人出征)……………	四三
歩兵上等兵	小田部稔 (茨城縣)	重傷を負ひ尙射撃觀測をなさんとせる……………	四六
歩兵上等兵	小川又次 (栃木縣)	擲彈筒班員、兄に抱かれつゝ散華す……………	四八
歩兵上等兵	小川隆市 (兵庫縣)	兄は滿洲事變に戰死し弟は拒馬河畔に奮戦小隊長と共に玉碎す……………	四八
歩兵上等兵	小河原文助 (埼玉縣)	連絡勤務中逆襲を受け敵數名を斃し行宮の華と散る……………	四〇
歩兵上等兵	小澤章 (栃木縣)	優秀なる小銃手、外長城戰に奮闘し竟に壯烈地雷に爆死す……………	四三
歩兵上等兵	岡野徳治 (東京府)	中隊指揮班員として活躍惜しくも拒馬河畔に散る……………	四五
歩兵上等兵	大浦正雄 (兵庫縣)	機關銃陣地に突入匪賊と格闘竟に白刃に散華す……………	四七
歩兵上等兵	越智早夫 (愛媛縣)	輕機分隊邱莊攻撃に孤立奮闘分隊長以下相次いで斃るゝも尙克く小隊の支撐となる……………	四九
砲兵上等兵	小野寺辰藏 (宮城縣)	重傷に屈せず偵察の結果を報告して絶命す……………	四三
輜重兵一等兵	越智政雄 (愛媛縣)	娘子關の激戦に敵の包圍を受け勇戦奮闘職に殉ず……………	四三
		寡兵奮闘大敵を撃退して江南の華と散る……………	八〇

- 歩兵 軍曹 和田喜一 (兵庫縣) 金鶏勳章を拜受すること二回東花園夜襲に玉碎す…………… 一一〇
 - 歩兵上等兵 若槻伴太郎 (鳥根縣) 孝子、彈雨下に勇戦奮闘し獨流鎮の華と散る…………… 四三六
 - 歩兵上等兵 綿貫正治 (朽木縣) 大那河の激戦に勇戦奮闘して玉碎せる小銃手…………… 四三八
 - 輜重兵上等兵 渡邊秋夫 (千葉縣) 重圍の中に死闘數時間遂に敵を撃退し靈丘郊外の華と散る…………… 四〇〇
 - 輜重兵一等兵 渡邊鈴市 (岐阜縣) 泥濘彈雨を冒して糧秣輸送の重任を全うし大場鎮郊外に散華す…………… 八〇四
- か
- 歩兵 少佐 梶尾龜鶴 (岡山縣) 名中隊長積極意見を具申し獨力敵の要點を夜襲して戦勝の端を拓く…………… 八
 - 歩兵 大尉 加藤恒安 (宮城縣) 慧眼克く敵情を搜索し剛膽奮闘克く戦勝の途を拓く…………… 一四
 - 歩兵 大尉 片山國雄 (大分縣) 壯烈決死敵前上陸の先頭を切つて玉碎す…………… 二七
 - 歩兵 中尉 茅野幸一 (岡山縣) 温情部下に臨み剛膽機敏敵を壓倒し戦勝の途を拓く…………… 四三
 - 歩兵 少尉 笠原萬治 (兵庫縣) 指揮技能優秀にして克く戦捷の途を拓く…………… 五三
 - 工兵 軍曹 川村和夫 (静岡縣) 決死敵前架橋を完遂し且トーチカを爆破して人柱となる 壯烈…………… 一一三
 - 歩兵 伍長 影山祐二 (兵庫縣) 勇敢なる機關銃手、難局に傳令勤務を果たし職に殉ず…………… 三三八
 - 歩兵 伍長 加藤政英 (福島縣) 北滿匪賊討伐に重傷を負ふも闘志旺盛銃を離さず…………… 三三〇
 - 歩兵 伍長 勘田正刑 (徳島縣) 勇敢なる小銃兵、琉璃河畔に散華す…………… 三三三
 - 歩兵 伍長 加島安太郎 (徳島縣) 責任觀念旺盛の分隊長、團河村戦闘に敵數人を刺殺して玉碎す…………… 三三五
 - 歩兵上等兵 川上知一 (鳥取縣) 孝子、正莊の激戦に奮闘重傷を負ひ母を呼び求めて歿す…………… 四三三

- 歩兵上等兵 風間三郎 (群馬縣) 勇敢なる小銃兵負傷するも屈せず障碍物破壊を完うす「澤畔店」…………… 四四五
- 歩兵上等兵 勝山干美 (長野縣) 壯烈、大那河を渡河して黄村數線陣地を突破し竟に玉碎す…………… 四二七
- 歩兵上等兵 加藤鶴龜 (大分縣) 孝子、湯水鎮に奮戦し江南の華と散る…………… 四四九
- 歩兵上等兵 柏崎弘 (朽木縣) 敵機空襲に方り死を以て鞍馬の鎮靜に努力せる機關銃隊員…………… 四三二
- 歩兵上等兵 櫻村久光 (東京市) 勇敢なる小銃手、張家口の激戦に奮戦し迫撃砲弾に墮る…………… 四四四
- 歩兵上等兵 加瀬三造 (千葉縣) 蘆溝橋城内掃蕩に方り斥候長として奮闘玉碎す…………… 四五六

よ

- 歩兵 軍曹 吉田茂 (群馬縣) 屢々難局を打開して勇戦奮闘の後職に殉ず…………… 一一五
- 歩兵 伍長 吉田政雄 (兵庫縣) 猛火を冒し隣接隊との連絡を完うして墮る…………… 三三七
- 騎兵 伍長 吉森甫 (岡山縣) 數日間優秀なる敵を拒止中不幸砲弾に散華す…………… 三三九
- 歩兵上等兵 吉田助次郎 (東京市) 剛勇なる擲彈筒手、毎戦克く任務を完うし崑崙城外に玉碎す…………… 四五六

た

- 歩兵 少佐 高橋軍次郎 (朽木縣) 沈着剛膽なる中隊長、巧に獨斷行動して戦勝の端を拓く…………… 一一
- 歩兵 少尉 田伏精治 (和歌山縣) 敵逆襲部隊を引寄せ反撃して中隊突撃の動機を作る…………… 五
- 歩兵 少尉 武舎正利 (長野縣) 勇敢機を見るに敏なる機關銃小隊長…………… 七
- 歩兵 軍曹 高見芳隆 (兵庫縣) 模範的分隊長、豆店馬落坡に偉勳を奏して玉碎す…………… 一八
- 歩兵 軍曹 田中榮吉 (鳥取縣) 姚官屯夜襲に分隊殆ど全滅して敵陣地一角を奪取す…………… 一三

步兵 軍曹 谷 田 實 (茨城縣) 剛勇沈着にして優勢なる敵の逆襲を破砕す…………… 一三四

步兵 軍曹 高根澤時次 (栃木縣) 誠實勇敢なる分隊長、敵の側防機關を制壓して突撃を容易にす…………… 一三六

衛生兵 軍曹 武田亮吉 (京都市) 衛生兵、一身を犠牲として多數傷病者の危急を救ふ…………… 一三八

步兵 伍長 竹本一男 (鳥取縣) 精悍壯烈敵トチカに手榴彈を投げ…………… 一四二

步兵 伍長 田中賢二 (兵庫縣) 忠實勇敢の指揮班員、突撃に尙中隊長を庇護しつゝ奮戦玉碎す…………… 一四四

步兵 伍長 館 誠 (茨城縣) 攻撃精神旺盛なる機關銃手、猛烈なる敵の逆襲部隊を殲滅す…………… 一四七

步兵 伍長 高木武雄 (北海道) 勇敢なる機關銃手…………… 一四九

步兵 伍長 田中四郎 (兵庫縣) 敵の猛火と泥濘中に奮戦し潮宗橋攻撃の華と散る…………… 一五一

工兵 伍長 武井菊治 (千葉縣) 職責遂行の範。操舵轉把を握りたる儘職に殉ず…………… 一五三

衛生兵 伍長 高橋忠雄 (靜岡縣) 誠實勇敢の衛生兵其の職に瘞る…………… 一五五

步兵 上等兵 田 畑 清 (東京市) 一死報國の決意固く萬全の山岳戦に奮闘して玉碎す…………… 一五七

步兵 上等兵 谷川正一 (鳥取縣) 沈勇誠實なる小銃手、奮戦して平原城郊外の華と散る…………… 一五九

步兵 上等兵 田口義夫 (岡山縣) 立哨中優勢なる敵の夜襲を受くるも守地を離れず部隊の危急を救ふ…………… 一六一

步兵 上等兵 田部達郎 (鳥根縣) 負傷に屈せず敵の側防機關銃陣地を占…………… 一六三

步兵 上等兵 瀧 下 潔 (兵庫縣) 領し更に卒先壘上に突入して玉碎す…………… 一六五

步兵 上等兵 田村正四郎 (群馬縣) 勇猛剛膽の輕機關銃射手、屢々偉功を奏して滄縣に玉碎す…………… 一六七

步兵 上等兵 田村正四郎 (群馬縣) 輕機彈藥手、克く其の任を果たして更に黃村敵陣に突入して玉碎す…………… 一六九

步兵 上等兵 高木一郎 (栃木縣) 機關銃彈藥手積極活躍機關銃の威力…………… 一七一

步兵 上等兵 高木一郎 (栃木縣) 機を發揮せしめ惜しくも空爆に散る…………… 一七三

步兵 上等兵 高橋兼晴 (埼玉縣) 苦戦中傳令の任を果たして再び復歸奮戦張家口郊外に玉碎す…………… 一七六

步兵 上等兵 高塚清一 (東京市) 勇敢沈着小銃兵の本分を完うして外長城戦の華と散る…………… 一七八

步兵 上等兵 園田義雄 (鳥取縣) 模範的輕機彈藥手、竟に人合庄の敵陣に玉碎す…………… 一八一

步兵 上等兵 征矢四郎 (茨城縣) 篤實にして勇敢なる小銃手、望海庄に奮戦し主力の渡河を掩護す…………… 一八三

步兵 軍曹 坪倉茂男 (鳥取縣) 沈着剛膽克く戰機を明察し戦勝の端を拓きたる分隊長…………… 一三〇

步兵 上等兵 辻 秀 雄 (三重縣) 勇敢なる傳令、壯烈身を以て舊關鎮の大逆襲を阻止す…………… 一八五

步兵 上等兵 根岸弘次 (埼玉縣) 名速射砲手、毎戰偉勳を奏して葎縣城外の華と散る(精銳)…………… 一八七

步兵 上等兵 根本勝藏 (茨城縣) 重傷を秘し死闘を續け戦勝の端緒を作りたる機關銃手…………… 一八九

步兵 中佐 中道政治 (大阪府) 責任觀念旺盛なる停車場司部員萬難を排…………… 一五

步兵 中尉 中村徳治 (佐賀縣) 至誠一貫責任觀念旺盛なる擔架中隊長…………… 一三

步兵 軍曹 成瀬忠正 (茨城縣) 孝子、南京城外の激戦に上官の危急を救はんとして瘞る…………… 一三

步兵 伍長 成井正雄 (茨城縣) 責任觀念旺盛なる機關銃彈藥手、瘞れて尙彈藥箱を放さず…………… 一三六

步兵 伍長 中島弘美 (鳥取縣) 職責遂行傳令の龜鑑(壯烈)…………… 一三六

歩兵 伍長 中島健爾 (長野縣) 機關銃分隊長、獨斷敵の包圍行動を阻止し戦勝の端を拓く…………… 三六三
 歩兵 伍長 七井正久 (栃木縣) 勇敢剛膽常に分隊の中堅となり王谷莊堡夜襲に玉碎す…………… 三六四
 歩兵 伍長 中岸頼太郎 (岡山縣) 蔭蔽地且敵彈雨飛の下に部隊間の連絡を完うし職に履る…………… 三六六
 歩兵 伍長 中原勳武 (鳥取縣) 勇猛果敢屢々突撃に偉勳を樹て東辛莊小河の華と散る…………… 三六八
 騎兵 伍長 長屋靜一 (岐阜縣) 重圍を突破して爆創に倒れしも尙小隊長の戦死を詳報す…………… 三七一
 歩兵上等兵 七原利一郎 (栃木縣) 擲彈筒手、一發必中の射彈を浴びせ惜しくも拒馬河畔に散る…………… 四九三
 歩兵上等兵 長田勇三 (長野縣) 一旦占領したる地は寸尺と雖退かず寡兵敵の逆襲を撃退して斃る…………… 四九五
 歩兵上等兵 長田茂文 (千葉縣) 山西省下社村の戦鬪に重傷を負ふも尙奮闘し戦勝の途を拓く…………… 四九七
 歩兵上等兵 長尾志成 (東京市) 輕機彈藥手、積極挺身陽高城壁上に奮戦して玉碎す…………… 四九九
 歩兵上等兵 仲田正男 (埼玉縣) 暗夜險峻を冒し長城線のトーチカを奪取し集團地雷に玉碎す…………… 五〇三
 歩兵上等兵 中野福重 (群馬縣) 決死敵の占據せる工場圍壁に登り内部の敵情を偵察す…………… 五〇四
 歩兵上等兵 中世古福太郎 (東京市) 迫撃砲手、的確なる射撃により克く其の任務を完うす…………… 五〇七
 歩兵上等兵 中島與八 (大分縣) 砲彈幕中に展望臺の視界清掃に任じ羅店鎮の華と散る…………… 五〇八
 歩兵上等兵 中村利良 (京都市) 重傷を負ふも尙射撃を続け良郷の華と散る…………… 五一一
 歩兵上等兵 中野良市 (島根縣) 死闘十數時間數倍の敵を拒止し西子牙鎮の華と散る…………… 五二三
 砲兵上等兵 成瀬松市 (愛知縣) 石家莊の激戦に勇戦し重傷を負ふも尙奮闘せんとして散華す…………… 五二六
 砲兵上等兵 中村伊市 (新潟縣) 難局に決死彈藥補給に任じ竟に正太線の華と散る…………… 五二八

工兵上等兵 成瀬良雄 (愛知縣) 正太線渡禮村の敵機關銃を撲滅し戦勝の途を開く…………… 五三一
 輜重兵一等兵 中安一四 (兵庫縣) 勇敢なる小行李班員、危機に彈藥補給を完うして玉碎す…………… 八〇六

む

歩兵 中尉 村山太一 (新潟縣) 剛勇の將校斥候太原城角に一番乗して戦勝の端を拓く…………… 四七
 歩兵上等兵 向井一郎 (神奈川縣) 勇敢なる小銃手、急迫せる情況下に上官を救はんとして玉碎す(豊城線)…………… 五三三
 歩兵上等兵 室町文吉 (栃木縣) 擲彈筒手、每發必中の射撃を以て敵機關銃を制壓し竟に大冊河畔に玉碎す…………… 五三五
 歩兵上等兵 室賀明 (長野縣) 忠孝兩全の勇士、大冊河畔黃村攻撃に玉碎す…………… 五三七
 工兵上等兵 村松禮一 (静岡縣) 正太線渡禮村の敵機關銃を撲滅し戦勝の途を拓く…………… 五三〇
 輜重兵一等兵 村永利正 (石川縣) 敵彈下に架橋材料運搬の任務を果たし職に殉す…………… 八〇八

ろ

歩兵 大尉 植太一郎 (和歌山縣) 所屬隊に追及中敵に會し最後迄奮闘玉碎す…………… 九
 歩兵 軍曹 植月紀 (岡山縣) 沈着剛膽にして馬廠攻撃の準備に活躍せる指揮班員…………… 一三五
 歩兵 伍長 内田美治 (鳥取縣) 難局に處し進んで犠牲となり戦勝の端を拓く…………… 二七三
 歩兵上等兵 鶴川江司 (群馬縣) 夜襲に方り卒先突入敵の輕機を奪取す…………… 五三三
 歩兵上等兵 内村清 (埼玉縣) 優秀なる小銃手、外長城線に奮戦し竟に壯烈地雷に玉碎す…………… 五三五
 歩兵上等兵 碓水昇 (長野縣) 忠勇義烈寡言實行の勇士、娘々廟の一番乗りをなす…………… 五三七

歩兵 伍長 野澤茂平 (栃木縣) 堅忍不撓難局を打開したる機關銃彈藥手……………二七五
 歩兵 伍長 野坂一男 (鳥取縣) 戰機に投じ輕機關銃の威力を發揚し戰勝の途を拓く……………二七七
 歩兵 伍長 野津信松 (島根縣) 勇敢なる機關銃手、水中に至難なる彈藥補給を全うす……………二八〇
 歩兵上等兵 野中金五郎 (群馬縣) 輕機射手重傷を負ふも尙其の職責を完遂せんとす……………二四〇
 歩兵上等兵 野口辰之助 (埼玉縣) 勇敢なる歩兵砲手、克く其任を完うして水魁の華と散る……………二四三
 歩兵上等兵 野村光一 (愛知縣) 險難なる北滿山岳地帯に優秀なる匪賊と勇戦し戰勝の途を拓く……………二四四
 歩兵 伍長 栗山勇平 (北海道) 職責を重んじ其の職に斃る……………二八三
 歩兵 伍長 久保芳明 (愛媛縣) 剛膽機敏なる速射砲分隊長、配屬部隊の爲戰勝の途を拓く……………二八五
 歩兵上等兵 黒田安次 (東京市) 沈着勇敢なる小銃手、其の本分を全うし長城線の華と散る……………二四七
 歩兵上等兵 熊本小三太郎 (京都市) 軍民の龜鑑、大谷縣城に敵三人を刺殺し玉碎す……………二四九
 歩兵上等兵 久世節男 (京都市) 輕機彈藥手、寶店鎮に勇戦して三トーチカを占領せしむ……………二五一
 歩兵上等兵 桑野正助 (茨城縣) 元氏の掩蓋機關銃を撲滅し戰勝の途を拓きし輕機關銃手……………二五三
 歩兵上等兵 倉田一鹿 (長野縣) 所屬隊の危機に方り重要傳令の任を果たして西保障に玉碎す……………二五六
 輜重兵一等兵 黒川克己 (東京市) 重圍の中に死闘數時間途に敵を撃退し靈邱郊外の華と散る……………二八〇
 歩兵 伍長 山田正茂 (大分縣) 精銳なる後備役兵、克く難局に守備の任を完うし職に殉ず……………二八七

歩兵 伍長 山名正己 (鳥取縣) 滄州血戰の鬼分隊長壯烈鬼神を哭かしむ……………二八九
 歩兵 伍長 山地恒 (和歌山縣) 責任觀念旺盛なる歩兵砲手、重傷を負ふも射撃準備を完遂す……………二九三
 砲兵 伍長 山田作太 (靜岡縣) 瀕死の重傷を負ひ乍ら尙職責を顧念する高射砲手……………二九四
 輜重兵伍長 山村喜良 (奈良縣) 敵襲に決死奮闘所屬隊の危急を救ひたる輜重兵……………二九六
 歩兵上等兵 山崎林 (鳥取縣) 兄は滿洲事變に戦死し弟は王口嶺激戦に彈藥補充の任を完うして職に殉ず……………二九八
 歩兵上等兵 山本唯夫 (大分縣) 幹部を喪ふも尙奮戦大敵を撃破す……………三〇一
 歩兵上等兵 山本貞夫 (廣島縣) 突破戰線百数十里屢々殊勳を奏し正太戰線の華と散る(良民良兵の範)……………三〇三
 歩兵上等兵 山本新五郎 (大分縣) 忠孝兩全の勇士、湯水鎮附近の危機を救ひて玉碎す……………三〇七
 歩兵上等兵 山本半次 (兵庫縣) 津浦線邱莊の激戦に傳令の重任を果たし職に墮る……………三〇九
 歩兵上等兵 柳内宗三 (兵庫縣) 沈着寡黙の勇士、馬落城に奮戦し突撃の動機を作りて玉碎す……………三五二
 歩兵上等兵 安丸友治 (群馬縣) 臨終に尙支那軍の膺懲を叫んで德州郊外の華と散る……………三五三
 歩兵上等兵 安田保壽 (茨城縣) 良民良兵の範、保安攻撃に偉勳を樹て、散華す……………三五六
 工兵上等兵 八木爲一 (神奈川縣) 傳令の重任を果し瀕死の重傷を負ふも尙戰友を勵まし江南の華と散る……………三六九
 工兵上等兵 柳川重信 (兵庫縣) 折口鎮軍艦山敵の側防機關を爆破し戰勝の端を拓く……………三六一
 砲兵一等兵 山本清 (愛知縣) 雨下する敵弾下に彈藥補充に任じ大場嶺郊外に散華す……………三八三
 輜重兵一等兵 山邑傳治郎 (京都市) 大敵より奇襲を受け孤軍奮闘職に殉したる輜重兵……………三八五

歩兵 少尉	松岡 國三郎 (香川縣)	忠勇義烈の小隊長、死の直前重傷の血を以て 天皇陛下萬歳と謹書す	三〇六
歩兵 伍長	前田 隆 (鳥取縣)	滿洲事變の勇士、馬廠渣州戦闘に偉勳を樹て斃るゝも尙銃を離さず	三〇八
歩兵 伍長	正白 康兒 (和歌山縣)	孝子、滿洲匪賊討伐に活躍して職に墮る	三〇一
歩兵 伍長	牧野 喜一 (静岡縣)	誠實剛膽なる傳令、敵の空爆に玉碎す	三〇三
歩兵 上等兵	松本 秋信 (和歌山縣)	北滿匪賊討伐に奮戦中敵に突入して玉碎す	三〇三
歩兵 上等兵	松本 武平 (群馬縣)	敢然敵トイチカを奪取し壯烈敵機爆弾に墮る	三〇五
歩兵 上等兵	松本 善雪 (和歌山縣)	忠孝兩全の勇士、聖戦の初期に奮闘して南苑の華と散る	三〇七
歩兵 上等兵	松下 正一 (兵庫縣)	勇敢なる傳令克く其の任を果たし小隊長の戦闘指揮を容易にす	三〇九
歩兵 上等兵	松井 一雄 (兵庫縣)	勇敢なる小銃手、堅壘に奮闘して職に殉ず	三一一
歩兵 上等兵	牧 一雄 (長野縣)	致命傷を負ふも尙保彈飯を差しのべ新樂の激戦に散華す	三一二
歩兵 上等兵	萬 場 潔 (鳥取縣)	勇敢なる輕機彈藥手、決死隣中隊との連絡を完うし燒密盆の華と散る	三二四
歩兵 上等兵	丸山 東右衛門 (長野縣)	難局に彈藥補充の重任を果たし保定城外の華と散る(忠孝一如の母と子)	三二七
衛生兵 上等兵	松田 靜馬 (静岡縣)	敵の空襲中に敏活積極的に任務を完遂し大場鎮の華と散る	三二九
ふ			
歩兵 軍曹	藤田 嘉一郎 (兵庫縣)	獨斷擲彈筒射撃を以て敵を制壓し難局を打開す	三三七
歩兵 伍長	藤井 毅 (岡山縣)	猛火を冒し隱蔽地に大隊砲との連絡を全うし大隊戦勝の端を拓く	三三六
歩兵 伍長	船曳 修藏 (兵庫縣)	誠實勇敢なる小銃手、熾烈なる敵弾下に職に殉ず	三三八

歩兵 伍長	藤本 信一 (兵庫縣)	瀕死の重傷を負ひ尙戦況を案じ戦勝を耳にして靜に瞑す	三二〇
歩兵 伍長	藤戸 正二 (大阪府)	勇敢なる輕機關銃手、克く其の精銳を發揮して任に斃る	三二二
歩兵 上等兵	藤原 幸治郎 (京都府)	兵站自動車兵、敵襲に最後迄奮闘す	三〇一
歩兵 上等兵	藤原 八郎 (兵庫縣)	忠烈勇敢の連絡兵、至難の戦況下に克く其の任を果たして姚官屯に玉碎す	三〇三
歩兵 上等兵	福岡 正文 (奈良縣)	優秀なる運轉手、克く輸送を完うし敵襲に奮戦小隊の危機を脱す	三〇五
歩兵 上等兵	古 池 仁 (茨城縣)	忠實勇敢なる重機關銃手、難局に奮闘して墮る	三〇七
歩兵 上等兵	藤垣 英也 (兵庫縣)	此の父にして此の子あり、滄州攻撃に奮戦玉碎す	三一〇
歩兵 上等兵	藤本 利市 (兵庫縣)	難局に陣地占領掩護の重任を全うし黄河北岸の華と散る	三二二
歩兵 上等兵	藤井 藤吉 (新潟縣)	勇敢なる輕機關銃手、鎮邊攻撃の華と散る	三二四
歩兵 上等兵	深田 義助 (鳥取縣)	勇敢なる輕機關銃手、敵の猛火を浴びつゝ戦勝の途を拓く	三二六
歩兵 上等兵	福島 龍吉 (東京市)	壯烈敵の掩蔽部に突入し蘆溝橋の華と散る	三二八

歩兵 曹長	小坂 橋正義 (群馬縣)	優秀なる指揮班員獨斷側防機能撃退し戦勝の途を拓く	三二九
砲兵 軍曹	小山 保 (長崎縣)	瀕死の重傷を負ひ尙部下を叱咤して砲戦を繼續せしむ	三四〇
歩兵 伍長	小西 政一 (兵庫縣)	速射砲彈藥手猛火の中に彈藥を補充し玉碎す	三四四
歩兵 伍長	小松 捨夫 (兵庫縣)	姚官屯夜襲に特技の銃劍術を以て敵數人も刺殺して玉碎す	三四七
歩兵 伍長	小林 正三 (長野縣)	指揮適切勇敢なる擲彈筒分隊長	三四〇

歩兵 伍長 小山行壽 (岡山縣) 勇敢なる輕機關銃彈藥手、重傷を負ひ尙職責を顧念す……………三三
 歩兵 伍長 小松三郎 (兵庫縣) 孝子、萬難を排して夜間連絡の重任を果し一身を君國に捧げて敵陣に玉碎す……………三三
 歩兵 伍長 小森末吉 (兵庫縣) 堅忍不拔にして沈勇なる小銃手、難局を打開して瘞る……………三七
 歩兵 伍長 小杉正明 (鳥取縣) 慧敏剛膽なる分隊長屢々抜群の偉功を奏す……………三〇
 歩兵 伍長 小宮山四郎 (長野縣) 敵の猛火を牽制しつゝ中隊主力の渡河を容易にす……………三三
 歩兵 上等兵 小林侶章 (鳥根縣) 安仁街の激戦に死力を以て一角を死守し戰勝の途を拓く……………六〇
 歩兵 上等兵 小林正 (新潟縣) 壯烈敵の奇襲に會し分隊長代理として而も自ら輕機銃を執り激闘玉碎す……………六三
 歩兵 上等兵 小島竹治 (茨城縣) 孟村の激戦に奮闘して重傷を負ふも意氣昂然たる輕機關銃手……………六五
 歩兵 上等兵 後藤 勳 (愛知縣) 難局に所し犠牲的精神を發揮し上海市政府郊外に玉碎せる擔架兵……………六七
 歩兵 上等兵 後藤荒男 (北海道) 無錫鐵道の連絡兵、三十名の敵に襲はれて奮闘し竟に職に殉ず……………六九
 歩兵 上等兵 小高一郎 (東京市) 挺身頭敵を狙撃して難局を打開し竟に外長城線の華と散る……………六一
 歩兵 上等兵 後藤 正 (兵庫縣) 勇敢機敏克く本務を完うしたる中隊指揮班員……………六三
 歩兵 上等兵 小杉俊雄 (鳥取縣) 攻撃精神旺盛而かも武技俊秀にして偉勳を奏す……………六六
 歩兵 上等兵 小根山孝助 (長野縣) 瀕死の重傷に屈せず重圍を脱出し傳令勤務を全うす……………六八
 歩兵 上等兵 小平福次 (栃木縣) 負傷するも難局に自己の重責を完うし元氏渚龍河の華と散る……………六〇
 砲兵 上等兵 小關新平 (靜岡縣) 優秀なる高射砲手、守地を離れず勇戦爆死す……………六四

元

歩兵 伍長 海老原初一 (茨城縣)

慧敏勇敢なる擲彈筒手、敵の大逆襲を阻止し職に瘞る……………三五

あ

歩兵 中尉 安達正三 (茨城縣) 敵側防機關銃陣地を夜襲奪取し保定城攻略の端緒を拓く……………五〇
 歩兵 少尉 青山滋 (岡山縣) 積極勇敢模範的小隊長屢々難局を打開す……………六三
 歩兵 准尉 阿部文次 (長野縣) 苦戦中敵の迫撃砲を沈黙せしめ戦局を打開せる小隊長……………六六
 歩兵 曹長 相川留春 (長崎縣) 俊敏敵情監視の任を全うし突撃に方り上官の危急を救ふ……………六九
 工歩 軍曹 安藤久男 (岡山縣) 敵彈下に沈勇剛膽克く工兵の性能を發揚す……………一四三
 輜重兵 軍曹 天羽三郎 (兵庫縣) 輜重の模範太原戦に補給斥候に活躍して瘞る……………一四五
 歩兵 伍長 安倍清張 (長野縣) 精銳なる輕機關銃射手猛襲し來れる敵に突入して玉碎す……………三七
 歩兵 伍長 青江三代治 (岡山縣) 決死の機關銃分隊長兵團の爲渡河點の争奪戦に勇戦す……………三四
 歩兵 伍長 阿久津金之助 (栃木縣) 職責に忠實勇敢なる輕機關銃彈藥手……………三三
 歩兵 上等兵 新井政男 (埼玉縣) 勇敢機敏なる擲彈筒手陽高城城壁上に奮戦して玉碎す……………四四
 歩兵 上等兵 藤原悦二 (兵庫縣) 一旦占領せる地は尺土も退かず小隊攻撃の支撐となる……………四八
 歩兵 上等兵 雨貝米三郎 (茨城縣) 沈着豪膽、河川偵察の重任を完うして瘞る……………五〇
 歩兵 上等兵 朝倉利定 (長野縣) 大冊河黄村の血戦に敵の大逆襲を撃退して要點を確保す……………五三
 歩兵 上等兵 秋山藤吉 (兵庫縣) 模範孝子、津浦線清涼店の戦闘に膽勇克く衆敵を噓し戦捷の途を拓く……………五四
 歩兵 上等兵 綾部彌七 (栃木縣) 精勵恪勤の士、奮戦竟に大冊河畔に散る……………五六

歩兵上等兵 新井友吉 (栃木縣) 喇叭手兼中隊指揮班員として活躍傷つくも奮戦格闘す「大冊河」…………… 六五八
 工兵上等兵 浅尾實雄 (岡山縣) 折口鎮攻撃に敵の側防機關を爆破し戦勝の端を拓く…………… 六六〇
 歩兵上等兵 安藤仁 (島根縣) 決死戦機に投じて要點を占領し靜海縣劉莊に散華す…………… 六六三

さ

歩兵 少佐 酒井清三郎 (福岡縣) 禪修養を積みたる中隊長、苦戦に敵要衝を奪取して戦勝の因を作る…………… 一四
 歩兵 軍曹 佐藤秀雄 (島根縣) 悲壯萬死に敵情搜索を完了し報告終りて瞑目す…………… 一四八
 歩兵 伍長 才木愛之助 (兵庫縣) 滄州攻撃に鐵條網を破壊し戦勝の端を拓く…………… 三〇五
 歩兵 伍長 坂本清 (兵庫縣) 良兵良民としての龜鑑、小王莊東花園の夜襲に偉勳を奏して玉碎す…………… 四七
 歩兵 伍長 坂和利 (栃木縣) 擲彈筒分隊長としての北相攻撃に指揮適切難局を打開す…………… 三〇
 歩兵 伍長 齋藤武 (栃木縣) 忠實勇敢なる連絡兵死に臨み勸諭を奉唱す…………… 三三二
 歩兵 上等兵 齋藤金太郎 (栃木縣) 毎發必中の射撃を爲し死期迫るも自己の…………… 六五
 歩兵 上等兵 才原勝治 (島根縣) 掩護射撃下に速に渡河せよと戦友を促す…………… 六五
 歩兵 上等兵 才原勝治 (島根縣) 勇躍決死隊員となり堅壘に突入して玉碎す…………… 六六七
 歩兵 上等兵 佐間田三重 (栃木縣) 精銳なる擲彈筒手、敵機關銃を撲滅して職に燈る…………… 六九九
 歩兵 上等兵 佐々木順逸 (秋田縣) 勇敢なる自衛隊員、大敵奮闘し職に殉ず…………… 六七二
 歩兵 上等兵 坂野濱治 (愛知縣) 孤軍奮闘全員何妻村の華と散る…………… 六七三
 歩兵 上等兵 坂田岩治郎 (兵庫縣) 決死鐵條網を破壊し小隊突撃路を開設して斃る…………… 六七五
 歩兵 上等兵 佐藤正之 (廣島縣) 一文字山に苦戦中の騎兵隊に決死彈藥を補給して玉碎す(壯烈)…………… 六七七

歩兵上等兵 佐藤信一 (愛知縣) 砲煙彈雨下に傷者の搜索收容に任じ壯烈江北戦線に散華す…………… 六七九
 歩兵上等兵 先田巳之助 (兵庫縣) 責任觀念旺盛なる砲手、敵彈に燈るも尙彈藥箱を放さず…………… 六八一
 歩兵上等兵 坂田立年 (岡山縣) 決死、彈藥補充の重任を全うし陞官屯の華と散る…………… 六八四
 砲兵上等兵 佐藤龍夫 (宮城縣) 娘子關の激戦に敵の包圍を受け勇戦奮闘職に殉ず…………… 六八六
 衛生兵上等兵 佐藤好 (長野縣) 責任觀念旺盛悲慘なる戦況下に活躍せる衛生兵…………… 六八八

き

歩兵 准尉 岸高次郎 (群馬縣) 指揮班長、戦機に投じて敢然逆襲し突撃の動機を作る…………… 七九
 歩兵 伍長 北野政一 (兵庫縣) 勇敢積極的にして克く斥候の重任を完うす…………… 三五五
 歩兵 上等兵 菊池清七 (靜岡縣) 重傷を負ひつゝ奮闘を続け遂に頑匪を撃破して北滿の華と散る…………… 六九二
 歩兵 上等兵 北澤五十一 (長野縣) 大冊河畔黃村の敵陣に突入忽ち敵數人を刺殺して散華す…………… 六九三
 歩兵 上等兵 北林弘 (三重縣) 勇猛なる小銃手、敵の逆襲を阻止し奮闘奪取の端を拓く…………… 六九六
 歩兵 上等兵 岸本貞治 (兵庫縣) 障礙物破壊班員、胸部に一弾を受け尙奮闘す…………… 六九八
 歩兵 上等兵 岸博 (鳥取縣) 燒容盆の激戦に獨斷敵の側防を制壓し戦勝の途を拓く…………… 七〇〇
 歩兵 上等兵 岸本信一 (島根縣) 精悍なる小銃手勇戦奮闘して安仁衛の華と散る(壯烈)…………… 七〇三
 歩兵 上等兵 北岡忠文 (京都市) 挺身猛火を冒して手榴彈を投擲し小隊の苦戦を打開す…………… 七〇五
 歩兵 上等兵 北中政晴 (島根縣) 勇敢なる連絡兵、困難なる戦況下に任務を遂行し職に殉ず…………… 七〇七
 歩兵 上等兵 木村清次郎 (東京市) 孝子、克く勇戦して張家口攻略の華と散る…………… 七二〇

歩兵上等兵 木村喜作 (宮城縣) 猛火を冒して傳令の重任を全うし砲隊の危急を脱す……………七二二
 歩兵上等兵 菊地代三郎 (群馬縣) 彰徳城西門一番乗りの決死隊員竟に地雷に墮る……………七二四
 歩兵上等兵 木名瀬長久 (茨城縣) 剛勇敵機關銃を撲滅して戦捷の基を作り元氏郊外の華と散る……………七二七
 歩兵上等兵 北脇光治 (兵庫縣) 輕機彈藥手、彈雨の下勇敢活躍克く其任を完うして斃る……………七二九
 輜重兵一等兵 木部恒雄 (群馬縣) 剛膽不撓の特務兵、率先敵中に突入し自衛を全うす……………八二七

み

歩兵軍曹 裴毛政光 (宮崎縣) 居常盡忠の修養怠らず行宮攻撃に勇敢玉碎す……………一五〇
 歩兵軍曹 宮澤幸喜 (長野縣) 勇敢機敏なる分隊長戰機に投じて偉功を奏す……………一五二
 歩兵伍長 三村平吉 (新潟縣) 行宮南苑攻撃に堅忍不拔輕機の威力を發揚して苦境を打開す……………一五七
 砲兵伍長 宮本勝太郎 (兵庫縣) 悲壯優秀なる敵襲を受け死を以て火砲を護る……………一六〇
 歩兵上等兵 美藤勳 (兵庫縣) 勇敢なる小銃手、李家妻の激戦に連射砲隊を護衛し職に斃る……………一六一
 歩兵上等兵 水田義數 (廣島縣) 瀕死の重傷を負ひ尙彈藥補充を叫ぶ彈藥手「通州」……………一七三
 歩兵上等兵 水石武雄 (群馬縣) 機關銃隊員、拒馬河畔の激戦に彈藥を補充し敵機爆彈に墮る(空爆)……………一七六
 歩兵上等兵 水川榮吉 (栃木縣) 責任觀念旺盛なる彈藥手、小南留の激戦に其の任に墮る……………一七八
 歩兵上等兵 三浦雅美 (廣島縣) 十數倍の敵夜襲を撃退し天津東驛の守備を全うす……………一七〇
 歩兵上等兵 三舛義夫 (兵庫縣) 一身を君國に捧げて母の恩に酬むんとす……………一七三
 歩兵上等兵 宮川恒吉 (群馬縣) 剛勇快活一隊の志氣を鼓舞し掩蓋機關銃を撲滅す……………一七四

歩兵上等兵 宮本芳雄 (和歌山縣) 優勢なる匪賊に包圍せられ奮戦力闘の後玉碎す……………一七六
 歩兵上等兵 宮田信二 (岡山縣) 熾烈なる側防火を受けて奮戦し敵の包圍運動を破碎せる砲手……………一七九
 歩兵上等兵 南俊次郎 (和歌山縣) 病を押して討匪に参加し決死傳令の任を果たし四合堂の華と散る(愛馬筆談)……………一八二
 歩兵上等兵 見澤徳一 (埼玉縣) 勇敢なる機關銃彈藥手、張家口の激戦に奮闘し集團地雷に玉碎す……………一八四

し

歩兵伍長 清永長七 (群馬縣) 職責遂行の示範、輕機關銃と運命を偕にす……………一八六
 歩兵伍長 鹽見勇 (岡山縣) 歩兵砲目標偵察斥候として剛膽敵陣近く潛行有利の報告を齎して墮る……………一八四
 歩兵上等兵 椎名太一 (茨城縣) 沈着剛膽なる傳令任務を完遂して墮る……………一八六
 歩兵上等兵 重松政夫 (愛媛縣) 孝悌且勇敢なる擲彈筒手、揚子崗に奮闘して職に殉ず……………一八八
 歩兵上等兵 白澤喜一 (栃木縣) 忠勇なる傳令其の任務を完遂し敵前渡河に玉碎す……………一九一
 歩兵上等兵 島谷八三 (兵庫縣) 傳令勤務中敵の逆襲を急報し單身敵中に突入して行宮の華と散る……………一九三
 歩兵上等兵 笏本鐵彌 (岡山縣) 輕機關銃の全威を振ひ琉璃河々畔に戦勝の礎石となる……………一九五
 騎兵上等兵 島田清 (福岡縣) 大行李掩護中優勢なる敵襲に遭ひ奮戦す……………一九七
 砲兵上等兵 鹽野谷秀吉 (東京市) 靈邱附近に寡兵克く數十倍の敵を撃退し友軍の危急を救ふ……………一九九
 砲兵上等兵 清水好男 (埼玉縣) 孤軍奮戦傷つくも屈せず竟に北京郊外の華と散る(壯烈)……………二〇一
 輜重兵一等兵 下田壯太 (群馬縣) 特務兵、有らゆる困難を克服して其の任を果たし竟に敵襲に奮戦して散華す……………二〇九

え

歩兵上等兵 海老沼芳雄 (東京市) 輕機射手、小隊の義務を双肩に荷ふて外長城戦線に玉碎す……………七六三

ひ

歩兵 少尉 姫野龜太郎 (大分縣) 立志傳中の老少尉中支戦線に奮戦玉碎す……………六六
歩兵 軍曹 樋口 武市 (岡山縣) 膽勇難局に奮闘して所屬隊の苦境を救ひたる分隊長……………一五五
歩兵 軍曹 平田 年幸 (長野縣) 機關銃分隊長敵の側防機關を制壓して戦勝の途を拓く……………一六八
歩兵 伍長 廣田 幸一 (兵庫縣) 勇敢なる通信手重傷を負ひ尙保護を完うして噎る……………三六六
歩兵上等兵 平田 忠夫 (岡山縣) 沈着豪膽なる小銃手、東邊庄の苦戦に奮闘して職に殉ず(兄弟出征)……………七六八
歩兵上等兵 平野 辰雄 (鳥取縣) 勇敢なる小銃手、負傷に屈せず手榴彈を投……………七七一
歩兵上等兵 樋口 徳太郎 (新潟縣) 擲しつゝ敵主陣地攻略に玉碎す「安仁街」……………七三三
歩兵上等兵 樋口 徳太郎 (新潟縣) 敵火の中に傳令の重任を完うして斃る……………七三三
輜重兵一等兵 比 樂 清 (愛知縣) 至誠一貫の模範青年、上海戦線に活躍して職に殉ず……………八三

も

歩兵 少佐 森澤傳三郎 (高知縣) 責任觀念旺盛にして勇敢なる聯隊砲隊長……………一七
歩兵 軍曹 本 谷 實 (茨城縣) 輕機銃分隊長、沈勇克く北相の大逆襲を撃退す……………一六〇
歩兵 軍曹 茂木 正夫 (群馬縣) 孝子、克く奮戦君國に身を捧ぐ……………一六三
歩兵 軍曹 森川儀三郎 (東京市) 自動車輜重、突如大敵襲を受け最後迄奮闘す……………一六五
歩兵 伍長 森山 利明 (長野縣) 剛膽慧敏の擲彈筒手、所屬分隊の危急を救つて玉碎す……………三六九

歩兵上等兵 森 金太郎 (栃木縣) 忠孝一途の士、克く奮戦して惜しくも大冊河畔に散る……………七五
歩兵上等兵 森本 伍一 (兵庫縣) 忠孝一途の模範機關銃手、屢々戦勝の端を拓く……………七七
歩兵上等兵 森 山 武 (長野縣) 模範的擲彈筒彈藥手、大冊河畔黃村攻撃に玉碎す……………七〇
歩兵上等兵 茂木 幸平 (群馬縣) 寡黙高潔の勇士、決死彰徳城に突入奮闘して玉碎す……………七三
工兵上等兵 森 下行吉 (兵庫縣) 忻口鎮軍艦山敵の側防機關を爆破し戦勝の端を拓く……………七四
歩兵 軍曹 仙波熊一郎 (栃木縣) 慧敏剛膽にして屢々偉功を奏し且決死突撃路を拓く……………一六七

す

輜重兵軍曹 鈴木 茂 (愛知縣) 彈雨下に砲兵彈藥を補給中重傷を受け尙職責に邁進す……………一六九
歩兵 伍長 鈴木 傳 (神奈川縣) 困難なる戦況下に傳令の任務を果し且奮戦中上官の身代となる……………七〇
歩兵 伍長 杉下 淺一 (兵庫縣) 壯烈勇敢再度鐵條網を破壊して東花園陣頭に玉碎す……………七四
歩兵 伍長 末 藤 重 (岡山縣) 職責遂行の範南苑攻撃に偉功を奏して噎る……………七六
工兵 伍長 菅原 才助 (鹿児島縣) 沈勇寡黙の精手、敵前漕渡に成功せる後職に殉ず……………七九
歩兵上等兵 鈴木 傳一郎 (栃木縣) 至孝誠忠の士、元氏攻撃に奮戦して院家村の華と散る(孝子美談)……………七七
歩兵上等兵 杉井 高太郎 (岡山縣) 馬廠水門附近の血戦に偉功を奏せる名擲彈筒手……………七九
歩兵上等兵 末 盛 榮 (岡山縣) 優秀なる軍犬兵、南苑の激戦に偉功を奏し愛犬と共に噎る(悲痛なる軍犬美談)……………七九

支那事變

忠勇列傳

陸軍之部

第參卷

忠勇顯彰會編纂

將校准士官之部

陸軍歩兵中佐從五位勳四等功四級

原田

愛

勇敢指揮適切にして戦勝の端を拓き死に臨み悲壯の遺書を遺す



氏は鳥取縣鳥取市江崎町の人にして亡父を豊母をきみへと云ひ明治二十五年一月八日生で妻光子との間に久美子、美恵子及廣實の二女一男がある。資性温厚勤勉事を處する周到熱心にして所謂實行の人殊に研究心旺盛にして平素毎日午前三時に起床する程の勉學努力振り又其部下に對しては温情心頗る厚く將兵一同の敬慕措かざる所であつた。今事變に重傷を負ひ死期迫るも難に戦死せる馬取扱兵の遺族に思を致せし如きは部下を思ふ至情の一端であつた。又學校服務中は訓育指導に専らなるべく生徒其徳を慕ひ氏の官舎に踵を接して來集するといふ有様であつた。日頃一死奉公の念強く中隊長の頃中隊事務室には常に笑而就死と書し掲げしめ或は古閑大尉に「最も適切なる死所を選べ」と記して與へし如き其片鱗とも謂ふべきである。明治四十二年三月鳥取第一中學校を卒業次で陸軍士官候補生となり大正三年陸軍士官學校を卒業して歩

將校准士官之部

兵少尉に任官歩兵第四十聯隊附となり爾後累進して昭和七年歩兵少佐に進級した。此間主なる職務は師團司令部附二ヶ年太田中學校服務四ヶ年歩兵第八十聯隊大隊長二ヶ年であつた。又昭和七年九月勳五等に叙し瑞寶章を賜はつた。支那事變起るや南雲部隊第二大隊長として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後七月十八日より二十一日に亘る間は唐山の警備に任じありしが愈々南苑攻撃の命令下るや將兵の喜び一方ならず七月二十六日天津出發敵第十六日に亘る間は唐山の警備に任じありしが愈々南苑攻撃の命令下るや將兵の喜び一方ならず七月二十六日天津出發敵



三十八師の本據たる南苑兵營攻撃の爲黃村驛に向ひ二十七日正午同驛に着した。當日炎熱灼くが如く刺さへ朝晝共食ふに食なき状態であつた。然し將兵一同勇躍午後三時十分同地出發南苑に向ひ前進した。此時騎兵將校斥候より團河村に小數の敵兵陣地を占領しある報告を受くるや氏は單に「蹴飛ばせ」と云ひたるのみ元氣頗る旺盛宛も演習の如くであつた。總て先きに下車せる鯉登部隊が團河村行宮に據れる敵と衝突激戦中の砲聲を聞くと同時に氏の第二大隊（二中隊缺）は該部隊の最左翼に増加を命ぜられ勇躍直ちに展開午後四時行宮西側に向つて攻撃を開始した。敵は既設陣地に據り掩蓋機關銃を以て側防を完備し其十字火は丈餘に繁茂せる高粱と共に著しく大隊重火器の行動並に其火力發揚を困難ならしめた。茲に於て氏は自ら第一線に進出して親しく敵情を偵察し終に敵の弱點は行宮西北角方面にあることを確かめ直に大隊砲小隊を左前方に推進せしむると共に鯉登部隊と連繫しつゝ逐次左に重點を移し敵の側背に向ひ攻撃し以て該方面に於ける敵潰走の端緒を作りたると同時に部隊長をして其の目標たる三春莊附近の敵陣地占領を極めて容易ならしめ加之敵の退却行動を

著しく束縛せしめ以て戦闘を極めて有利に導いた。而して氏は常に第一線に近く位置して部下の志氣を鼓舞し戦闘頗る順調に進捗しつゝありしが第一線將に突撃に移らんとする際行宮方面よりの猛射の爲竟に腹部に首貫銃創を受け其場に倒るゝに至つた。併し剛氣の氏は毅然として指揮を續けること暫し終に心身の自由を失ふに及び後送せられ途中八月三日豊台編帶所に於て戦死するに至つた。之れより先き氏負傷するや瀕死の重態にも不拘殘兵逆襲し來るとの情報を聞き悲壯にも意を決する所あり從容迫らず衛生兵を呼び軍刀を左手に拳銃を右手に取り口述して次の如き遺書を書き取らせた。

南雲部隊長宛

七月二十七日午後五時二十分下腹部に傷を受けて倒れた。残念ながら敵に一刃をも交はず倒れた。天皇陛下に對し奉り相濟まぬ、部隊長に對し相濟まぬ、兄も日露戦争で旅順で斃れた。恨みある露國に對して仇を討たずして第二の日露戦争を目前に控へて支那兵如きの流れ弾に中つて倒れたことは返へすゝも残念である。しかしながら戰場で倒るゝは軍人の本望である。平素鍛へた大隊は敵を殲滅して呉れるであらう。大元帥陛下萬歳」

部下將兵に對する遺書

「願みれば大隊長が隊長の職に補せられたのは一昨年の明日であつて丁度今日で不思議にも滿二年である。其間大隊長として必勝の大隊を作る爲に大變皆に御苦勞をかけた。皆もよく勉強して呉れて嬉しい、今日初陣に勇躍前進中に負傷したのは残念であるが皆は新しい大隊長の教へで十分勉強して呉れ、誠に有難う、戦死せる大上一等兵の家族に對して呉々もよろしく云ふて欲しい」

家族に宛て

「前段南雲部隊長宛遺書と同文にして其の末尾（戰場で斃るゝは軍人の本望である）に續けて」かねて遺言して居る通り

であるから少しも悔むことはない喜んで呉れ。三人の子供をよく育て三人共御國の爲に役立つ立派な人間にして呉れ。(中略)俺がピストルで死ぬるのは敵の捕虜となつてはいけなからだ。又御前達を戦場へやりたいからだ。見苦しい様子を
見せたくないからだ」

三人の子供へ宛て

「廣實よ御父さんは残念ながら戦死したぞ御母さんと。二人の姉の教をよくきいて日本精神大和魂に満ち／＼たる立派な日本男兒となつて御父さんの遺志をうけ繼いでどうぞ御國の爲に盡して呉れ」其他二人の女兒にも夫れ／＼諭すところがあつた。

右の外軍用行李中にも長男及長女宛自筆の遺訓があつた。

噫天氏に時を借さず猛烈に練りたる必勝の大隊を率ひて北支の曠野に雄腕を揮ふの期に恵まれざりしは千秋の恨事と云ふべきである。然し死生命あり其名は盡くるなし。實に行宮の一戦而かも緒戦に於ける氏の勇敢なる動作は將兵の志氣を鼓舞し其の適切なる戦闘指揮は部隊の戦闘を有利に導き戦勝の因を爲す、其赫々の武勳と芳名とは不朽に青史を飾り殊に其最期に於ける態度の從容たる實に氏の面目躍如として顯はれ。其遺書たる年來の心境盡忠の至誠を吐露して餘蘊なく是れ悉く後世の範とし景仰措く能はざる所である。氏今や散りて亡しと雖も不滅の忠魂は護國の神となり神靈出では大陸に雄翔して以て皇軍の戦勝を守護し入りては愛兒の身邊に留まりて以て其遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵中佐に進級し次で從五位勳四等に叙し旭日小綬章並に功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中佐從五位勳四等功四級 中道 政治

責任觀念旺盛なる停車場司令部員萬難を排して輸送を完遂し
太原攻略の素因を作る

氏は大阪府三島郡味生村の人にして亡父を荒張恒次郎母をコトと云ひ明治二十三年三月十六日生れで養父徳次郎養母マスの養子となり其の後養父母共に死歿し妻次枝との間に一女信子がある。資性剛膽誠實責任觀念旺盛にして而かも温情に富み慈愛心深かつた。明治四十一年三月奈良縣立五條中學校を卒業し陸軍士官候補生となり明治四十四年五月陸軍士官學校を卒業し同年十二月歩兵少尉に任ぜられ歩兵第七十聯隊附となり五年四月歩兵中尉に進み爾後歩兵學校に派遣せられて通信術を修得し同十一年歩兵大尉となり大隊副官中隊長を歴任して大阪商業學校次いで兵庫縣立洲本中學校に配屬將校となり熱誠以て生徒の指導訓育に従事し昭和五年歩兵少佐に任じ昭和八年八月豫備役被仰付直ちに大阪府立生野中學校教授を囑託せられ専ら教練を擔任し多年配屬將校としての體験と氏が至誠一貫寬嚴要を得恩威並び行はるゝの指導は忽ち其成果を擧げ上下の信頼を一身に萃むるに至つた。之が爲今次氏戦死との報あるや校長以下職員生徒は哀悼欽慕措く能はず其英靈を大阪港に迎へたる時並に學校葬施行の際に於ける生徒悲嘆の狀は列席者をして涙に袖を絞らしめたとの事である。氏は支那事變起るや昭和十二年八月應召し停車場司令部員として勇躍北支方面への征途に上り九月二十三日迄は安奉線橋頭驛支部長として軍隊及軍需品の輸送給養業務に従事した。時恰も炎熱灼くが如く殊に當時該地方は殆ど連日の豪雨に各地出水し列車の事故頻發し豫定の輸送實施は頗る困難を極めたが氏は殆ど連日不眠不休にて隣接停車場司令部と連絡を密にし輸送の圓滑を圖ると共に警備防諜防疫給養等に遺憾なからしめた。

九月下旬氏は鐵道司令部張家口出張所長として同地に移り輸送業務に従事して居たが十月下旬氏の所屬停車場司令部は同地に其の本部を置く事となり氏は其の司令部高級部員として勤務する事になつた。時恰も太原攻略戦の重要時期にして人馬は勿論兵器彈藥被服糧秣等第一線へ急送を要するもの頗る多大にして其の輸送の如何は軍の勝敗に極めて重大なる關係を招來する狀況であつた。而かも平綏線鐵道諸機關は甚だ不完全にして輸送の延滞のみか動もすれば大失態を生じて第一線將兵をして沍寒飢饉に陥らしめ又軍の作戦は大障害を來さんか



を願ふ時司令官以下の心痛は蓋し容易ならざるものであつた。此の際氏は克く司令官を輔佐し部下を激勵し日夜殆ど不眠不休の努力を續け以て之等輸送給養を圓滑にし軍の作戦に寄與する所多大であつた。又當時我が作戦軍の進撃は急速なりし爲敗殘兵の掃蕩十分ならず平綏線に添ふ兵站線には之等敗殘兵出沒し我が後方諸機關の薄に乗じ輸送を妨害し糧食の掠奪を企圖し既に張家口の西方天鎮永嘉堡柴溝堡孔蒙莊、東は康莊境來等其の襲撃を受けたる狀況であつた。之が爲氏は鐵道警備隊を督勵し又司令部々員以下を指導して

日夜附近の搜索警戒に万全を期したるのみならず氏自身勞苦を顧みず深夜にも巡察すると謂ふ有様であつた。偶々十一月七日午後七時頃氏は部員野口少尉を伴ひ附近を巡察し軍需品整備、警備兵服務狀況を監察し驛の南方約二百米空車引込線附近に至るや突如數名の怪漢より狙撃せられ不幸氏は左肩胛骨と左乳部の間に貫通銃創を受けた。剛膽殊に日頃劍道の自信を有する氏は負傷しつゝも咄嗟に野口少尉と共に軍刀を振り翳して敵に向ひ突進した。敵は小銃を亂射し手榴彈を投じ

て逃走し氏は拳銃を連射した。然かし此の時既に氏は出血甚しく竟に打倒れた。此の銃聲爆音に司令部にありし部員以下直ちに馳せ附けたが暗夜の事とて敵は逃走し暗中中佐を搜索するや中佐は右手に尙堅く軍刀を握りたるまゝ身に數彈を受け野口少尉に介抱せられて居た。氏は馳せつけたる部員を見るや氣息奄々たる中に幽かに「思ふ様働けなかつた」とのみ他を語らず直ちに野戦病院に收容せられしが數分にして張家口の華と散つた。時に午後七時四十五分であつた。

氏多年青年生徒の指導訓育に従ひ至誠一貫上下の信頼敬慕の的となり出でゝ軍に従ふや殆ど不眠不休勞苦危険を忘れて唯々自己責務の及ばざらん事を憂慮す。正に之れ大和民族を代表し世の錨とするに足るものである。抑も戰場に於ける後方勤務は第一線の如く華々しきものではない。然かし其の勞苦殊に責務の重大なることは決して之に劣るものではない。同じ堅忍不拔の奮闘も敵彈雨下する恹惚の間より寧日平靜の間に連續日夜に亘り重責を全うすること寧ろ困難にして一層の勇氣を要する。偶然にも氏が戦死の十一月七日は我が軍が南太原を占領した日であつて其翌々日九日我が軍は太原城を完全に攻略したのであつた。實に氏が北支上陸以來平綏線上にあつて不眠不休の努力を續け幾多人馬兵器彈藥糧秣等の輸送を機を失せず圓滑に實施した事は太原攻略の一素因である。又氏が七日の夜巡視する事なかりせば敵は構内に潛入し軍需品鐵道を爆破し或は偵察を遂げて襲撃し來たかも知れない。之等を願ふ時氏は張家口の華と散り今や其の勇姿に接し難きを遺憾とするも其の赫々たる武勳は無窮に青史に輝き其の勇名は氏の至誠徳望と共に千古に轟はるゝであらう。亦其の忠魂は不滅に生き護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として特に愛子愛婦の將來に尊き佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵中佐に進められ勳四等旭日小綬章並に功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐從六位勳四等功五級 梶原龜鶴

名中隊長積極意見を具申し獨力敵の要點を夜襲して戦勝の端を拓く

氏は岡山縣御津郡芳田村の人にして亡父を善次郎母をキクと云ひ明治三十一年十一月十六日生れで妻八重子との間に毅、修、浩の三男兒がある。資性剛毅果敢下士官當時は専ら鬼軍曹と呼ばれ其峻嚴なる教育を受けたる部下が少くない。併しながら公私の別儼然其嚴格の反面私人としては温情心頗る豊かで宛も慈父の如く慕はれてゐた。氏の陣中日記の一節に「斥候が無事歸還するまで其待つ心、隊長でなければ味ひ難し」或は「遠く派遣する斥候に任務を與ふる心中眞に部下愛に泣かされた、遠く待たるる親達の心如何と一人泣く」云々の如き其片鱗である。

大正二年三月芦田尋常高等小學校を同三年三月實業補習學校を卒業其後農事に従事した。幼時は虛弱なりしも父の早世以來三人の弟妹を擁し一家を擔ふに至り勤勞甚だ努め身體強健意志強固となり積極活躍家運を漸次挽回するに至り一村の模範青年とまで村民より絶讃されたのであつた。生來向學心旺盛なりしも一家の事情は意に委せず竟に帝國軍人として將來身を立つるに決し現役兵を志願して大正五年十二月十九歳にして金化（後龍山に移轉）歩兵聯隊に入營し下士官候補者となり熱心精勵同七年十二月歩兵伍長に任官爾後累進して同十三年十二月歩兵曹長に進級し昭和二年少尉候補者に撰ばれて同十二月陸軍士官學校に入校修學一年の後卒業歸隊して十二月歩兵特務曹長に進級し同四年三月歩兵少尉に任官爾後累進して同十一年八月歩兵大尉に進級し中隊長に補せられた。此間大正八年二月より約二ヶ月間天安鐵道掩護隊にありて戰役關係事務に従事大正十四年十二月より約半ヶ月滿洲に臨時派遣せられ昭和七年六月より約一月半滿洲事變の爲出征し凱旋後同九年三月歩兵第二十七聯隊附として約一年間再び滿洲に出動し功により勳五等に叙し瑞寶章を次いで同十一年双

光旭日章を賜はつた。

支那事變起るや森本部隊に屬し第六中隊長として昭和十二年七月十六日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後天津良鄉等の各戰鬪を経て九月十五日より二十三日に亘る涿州保定の會戰には馬各庄、田各庄、凹世庄、夏村、双柳樹、新庄頭、沈家庄等の各戰鬪に第一線中隊長として參加し勇猛果敢敵を攻撃し之を敗退又は殲滅せしめた。就中田各庄附近の戰鬪に際



しては九月十五日午後零時三十分大隊が揚子崗附近琉璃河右岸の敵に對し攻撃を開始するや氏は中隊を提げ最も勇敢に行動し他部隊に先んじて琉璃河を渡河し先づ揚子崗東南端を確保し次で馬各庄、凹世庄を攻撃して午後五時凹世庄南端に進出し續て田各庄の敵を攻撃するや敵の掩蓋を有する陣地より猛射を受けしも率先々頭に立ちて敵前二百米にまで近迫し翌拂曉眞先に敵陣に突入敵を南方に撃退した。次いで十月二日より十三日に亘る石家莊及滄陽河附近の會戰に際しては北岡上、靈壽、王母村等の各戰鬪に参加して敵を撃滅し就中北岡上附近の戰鬪に於ては當初豫備隊となるや氏は自ら屋上に登りて敵情を視察し敵が逐次兵力を右翼に増加しつゝあるを發見し左翼より包圍攻撃するの有利なることを大隊長に意見具申し其意見採用せらるゝや中隊を提げて逐次敵の左翼に迫り正午頃突撃を敢行二倍の兵力を擁して頑強に抵抗せる北岡上の既設陣地を奪取し其據點を失はしめ敵をして全線退却の已むなきに至らしめた。

十月二十三日午前八時所屬大隊は旅團長の直轄となりて南漳城を出發し氏の中隊は大隊の先頭にありて前進中午後二時

頃南漳城西南方約六杆の高地に到着した。然るに突如前方千二、三百米附近より敵の射撃を受けしを以て大隊は一時停止して敵情を偵察せし所約五、六十名の敵兵あるを目撃した。大隊長は先づ山砲を以て射撃せしむると共に大隊主力の攻撃準備を整へつゝありしが氏は午後六時大隊長より拂曉攻撃の據點として側部西方高地を奪取すべき命令を受けた。依て氏は三笠小隊に機關銃一小隊を屬して敵の最前線たる陣地に對し薄暮を利用して攻撃せしめ午後七時同地を奪取之を確保せしめた。然れども其前方稜線上の敵は尙頑強に抵抗し且兵力を増加しつゝあるの状況であつた。氏は戰術上前方陣地の奪取をも必要と認め之を夜襲すべく意見具申し其意見の採用せらるゝや氏は此敵を側背より攻撃するに決し荒巻小隊を指揮して出發先づ三笠小隊の占領せる陣地に前進した。時に午後十時三十分にして此頃輕機關銃二を有する五、六十名の敵は既に百五十米の左稜線に進出し左側方より我に對し猛烈なる射撃を浴びせ來つた。茲に於て氏は配屬機關銃に之が射撃を命じ且擲彈筒手を集めて自ら之を指揮し射撃を續行せるも敵の射撃は益々熾烈にして容易に後退の色がなかつた。依て氏は第三小隊及擲彈筒手に掩護射撃を命じ第二小隊を率ひ率先陣頭に立ちて一意前進せしが附近一帶、岩石多く谷は深く一歩踏誤れば十數丈の谷底に落つるが如き非常の難路にして前進極めて困難なりしが克く部下を掌握して勇敢にも敵の右側に向ひ突撃し忽ち左右の敵兵三、四名を斬り斃した。此の猛突撃に敵は屍體及輕機關銃二を遺棄して敗走するに至つた。續いて左方の敵に向ひ突入せんとするや陣地突角にありし敵輕機關銃の射撃を蒙り胸部に貫通銃創を受け其場に倒るゝに至つた。時に午後十一時であつた。然れども氏は意識飽くまで明瞭にして再び突入せんとせしが剛氣の氏も既に身體の自由を失ひ如何ともする能はず「部隊は此處を占領したが負傷した者はないか」と部下の身の上を案じかすかに 陛下の萬歳を唱へて竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。氏敵彈に斃るゝや當番山口一等兵駈け寄り助けんとしたが山口一等兵も此の時敵彈を受け主從折重なつて戦死した。然し此夜襲は大に功を奏し敵は全面的に退却を開始し爾後の大隊戰鬪を最も有

利ならしめ戰勝の基因を爲した。氏の日記の一節に「(一)一身を國家に捧げいつも捨身である。(二)自分の後ろには大神がついてゐて下さるものと思ふて不安の心出さぬ。(三)如何なる時にもあわてぬ。(四)上官の命は事の如何を問はず心より喜んで従ふ」と記しあり出征以來非常に大膽に奮闘し鬼梟原部隊長の勇名を轟かせた。

實に勇將の下に弱卒なく部下の景仰と信頼とを一身に集め團結鞏固每戰戰鬪單位たる中隊の全戦力を發揮して餘す所なかつた。而して或は慧眼戰機の看破となり或は機宜の意見具申となり或は勇猛果敢の突入となり悉く一隊戰勝の誘因を爲した。噫聖戰の初期に得難き名中隊長を喪ふ痛恨限りなしと雖も其赫々の武勳と勇名とは千載の下青史に輝き不滅の神靈は出でゝは皇業を恢弘し入りては愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

因に戦死當夜夜襲の直前悠々迫らず月光を頼りに書きし句に「生と死の一瞬間に飛入りぬ」死んだならヒゲを残せと言ひ居りし」

氏は戦死の日歩兵少佐に進級し次で従六位勳四等に叙し旭日小綬章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐従六位勳四等功四級 高橋軍次郎

沈着剛膽なる中隊長、巧に獨斷行動して戦勝の端を拓く

氏は栃木縣河内郡大澤村の人にして父を長次郎母をタメと云ひ明治三十年七月二十八日生れで妻キタヨとの間に綾子、陽子、仲朗、幸子の一男三女がある。資性濃厚責任觀念旺盛にして上級より命ぜらるゝ事は如何なる難事も喜んで受諾し萬難を排して之を遂行する人であつた。従つて戰場に臨むも彈雨の下冷靜沈着而かも鬼をも挫く勇敢は平素部下に對する

靜かにして温情に富める性格と相俟つて部下一同景仰心服措かざる所であつた。明治四十四年四月縣立宇都宮中學校に入校大正三年三月第三學年を修業し同年十二月現役志願兵として宇都宮歩兵聯隊に入營同五年十二月歩兵伍長に任官同八年四月西伯利亞事變に出動し哈府着同地の守備に任じ同九年十月内地歸着同十年十月より宇都宮聯隊區司令部に六ヶ月間勤務再び聯隊附となつた。此間累進して同十四年八月歩兵特務曹長に進級し昭和二年四月滿洲駐劄の爲遼陽着同年十一月少尉候補者として陸軍士官學校に入校一年間修業の後同校卒業在滿の原隊に復歸し同四年三月歩兵少尉に任官同年四月内地に歸還し同七年三月上海事變に出征し吳淞に上陸赫々たる武勳を樹て五月滿洲に轉進哈爾濱に駐屯し同九年五月内地に歸還し功に依り勳五等に叙し雙光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。此の間累進して同十一年八月歩兵大尉に進級した。



支那事變起るや坂西部隊第一中隊長として昭和十二年八月二十六日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三日より十四日に亘る榆堡鎮南方永定河渡河戰鬪に際しては大隊の右第一線中隊として攻撃を命ぜられ愈々攻撃前進を開始するや敵は猛烈に射撃し殊に氏の中隊は右側方よりする敵自動火器の猛射の爲前進頗る困難であつたが氏は陣頭に部下を激勵して前進し勇敢に渡河を決行して直ちに對岸の敵陣地に突入して之を占領し更に敵陣奥深く敢爲突進し速かに敵情を看破し獨斷以て敵の右翼に廻り包圍的に攻撃を實施した。之が爲敵は抗戦するを得ずして竟に退却するの已むなきに至つた。斯くして我大隊の攻撃並に爾後の追撃戰鬪を有利に導きたる其の功績は頗る偉大なるものであつた。續いて翌十四日より十五日に亘る南公由附近の追撃戰鬪に際しては尖兵中隊長として前進し其の途中暗夜至近の距離より突如敵の猛射を受けたるも克く中隊を掌握して敵の出撃に備へ體て大隊が主力を以て右側方より包圍せんと企圖するや氏は剛膽にも敵前至近の距離に於て此行動を掩護し巧に敵を牽制し以て大隊主力をして敵の妨害を受くることなく深く敵の左翼側に進入し包圍の目的を達成せしめ其結果敵をして遂に側背の危険を感じて退却するの已むなきに至らしめた。

九月十五日揚家屯附近拒馬河の渡河戰鬪に當りては大隊長は第一中隊及機關銃隊の主力をして掩護射撃に任せしめ大隊主力は第一渡河點より強行渡河せんと企圖した。依て第一中隊は拒馬河左岸堤防の線に至るや此線にては敵線不明にして掩護し得ざる爲勇敢に堤防の線を越え河川近く進出し敵を猛射した。然かし敵は巧みに地形を利用して陣地を構築しある爲尙敵線を確認し得ず我歩兵火力に依る制壓は見込なく空しく敵の猛火に曝さるゝのみであつた。然るに午後六時三十分大隊は第二大隊の後方より第二渡河點を渡河すべき聯隊命令に接し氏の中隊は第一渡河點を引揚げ午後十時第二渡河點に到つて渡河を完了し大隊の豫備隊となりて河岸近く位置した。然るに北相東北方にありし我に數倍する敵は熾んに迫撃砲を射撃し其掩護下に大舉逆襲し來り我が第一線近く迫りて猛烈に手榴彈を投擲せしかば氏は機關銃中隊の一部と協力し此敵に對し突撃を敢行し自ら中隊の先頭に立ちて敵中に突入せる爲中隊の志氣大いに奮ひ敵に多大の損害を與へて之を撃退し以て大隊の左翼を掩護し大隊をして一意北相に向ひ夜襲せしめ遂に敵陣を奪取することを得せしめた。然るに午前三時頃再び敵の逆襲あり氏は再び率先陣頭に立ちて逆襲部隊に突入亂闘中惜しくも敵彈の爲腹部を貫通せられ竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戰陣に立つや常に率先陣頭に立ちて部下を率ひ沈着剛膽勇猛果敢所謂勇將の下弱卒なく中隊長を核心とし舉止一體

となり戦闘單位たる皇軍歩兵の戦力を發揮して遺憾なかつた。氏や龔に滿洲事變に偉功を樹て金鷄勳章を拜受し今次事變亦赫々の武勳を奏す。洵に東亞建設の礎石となりたる氏の功勳は千載の下五族景仰して措かざるべく又不滅の英魂は護國の神となり神靈出でゝは皇軍の戦勝を守護し入りては愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。氏は戦死の日歩兵少佐に進級し次で従六位勳四等に叙し旭日小綬章並に功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐従六位勳五等功五級 酒井清三郎

禪修養を積みたる中隊長、苦戦に敵要衝を奪取して戦勝の因を作る

氏は福岡縣遠賀郡香月村の人にして明治二十五年九月十六日生で妻タミとの間に一子登美子がある。資性快活崇皇の念厚く又禪宗の中學に學びし關係もあり常に禪的修養を怠らず葉がくれ武士の鼓吹の如き部下の之に感化せられし處蓋し少くなかつた。常に武士道の第一義は「死を知る」にありとの信念を有してゐた。又心頭滅却火亦涼、或は兩頤所截斷一劍仍天寒の如き常に好んで教へし所であつた。元氣潑刺壯者を凌ぐ感があり一面頗る多嗜味であつた。又部下に對しては非常に温情厚く部下は所謂己れを知る人の爲に死すと云ふ風であつた。山口縣多々羅中學校を卒業大正二年十二月徴兵として歩兵第十四聯隊へ入營同三年安東の守備に服し爾後下士官を志願し採用せられて熱心精勵累進して同十五年歩兵特務曹長に進級し撰ばれて少尉候補者となり昭和三年十二月陸軍士官學校に入校翌四年十一月同校卒業同五年三月歩兵少尉に任官し爾後累進して同十二年三月歩兵大尉に進級同年七月中隊長に補せられた。

支那事變起るや恰も氏は障礙物構築演習中師團より動員電話命令に接するや「おい往けるぞ北支の風雲急だ工事止め」

と命令し大喜びであつた。而して鈴木部隊第十中隊長として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戦線に到着するや七月二十日より二十五日に亘り張家灣に集結の爲連日連夜の難行軍に中隊は何等の事故なく之を突破し引續き七月二十六日には炎熱の苦惡路の難を排して行軍し二十七日所屬部隊は團河村附近の敵を攻撃した。此の時は氏の中隊は聯隊の豫備隊となり夜間は戦場掃除等に任じ克く其任務を達成した。



七月二十八日南苑攻撃の爲第十中隊は大隊の先頭となり午前四時三十分行動を起し攻撃準備の位置に向て前進し銃砲弾頻りに落下する中に於て目的地に到着し大隊長より展開命令を受け大隊の左第一線中隊として南苑東南角に向ひ午前八時氏の中隊は先づ獨立家屋附近の敵陣地に對し攻撃前進を開始した。敵は我が前進を開始するや霰の如く銃砲弾を浴びせて來たが之に屈せず逐次敵に近接し敵前約三百米の高梁畑に中隊を展開し爾後部下を激勵しつゝ率先第一線の中央前を或は疾驅し或は匍匐しつゝ一意敵に進迫した。當時中隊は幹部僅少の爲中隊長の股肱たる指揮班長近藤准尉を小隊長代理たらしめ爲に氏は自ら敵彈雨下する中に且は指揮行動困難なる高梁畑中を疾驅して指揮する状態なりしを以て其困難は想像に餘りあるものであつた。而かも正面獨立家屋よりする敵の銃眼射撃と左前方よりする敵の十字火は少からず我が死傷を生ぜしめ前進意の如くならず中隊は頗る苦境に陥つた。而して該獨立家屋は敵陣地前に突出しありし爲速かに之を奪取するにあらざれば之れよりする側斜射の爲大隊主力方面の前進は頗る困難なりしを以て氏は速かに之を奪取せんと極力中隊第

一線小隊の前進を督勵し一進一迫進して敵前約百五十米に迄近迫した。然るに敵は益々頑強に抵抗し氏は中隊獨力にては容易に之を奪取し難しと察し大隊長に重火器の射撃を要求し其の結果間もなく我歩兵砲の彈丸は獨立家屋に集中落達敵を制壓せし爲氏は此處ぞと一層部下を激勵して益々近迫し敵前百米附近に達し愈々突撃を命ぜんとして起ち上るや午前十時頃無念左前方の敵機關銃彈の爲に左手及左胸部に貫通銃創を蒙り竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然れども氏の適切勇敢なる指揮行動は中隊の志氣を振作し午前十時五十分頃中隊は大隊豫備隊と共に突撃を敢行してさしも頑強なりし獨立家屋の敵陣を奪取することを得延いて大敵主力の前進も容易となり敵陣深く突入し午前十一時三十分敵を潰走せしめて敵陣地北端に進出するに至つた。氏は平素教練に於て指揮刀を撫しつゝ「戰場に於ては決して御前達のみ殺すのではない。わしも共に死ぬのだ。わしが死んでも屍體を收容するのではない。わしの屍體を踏み越して突撃するのたぞ」と云ふてゐた。實戰に於て其通り行はしめたのである。

氏や平素不動心の修養鍛錬に意を用ひ有時に備ふる所があつた。果せる哉其戰陣に立つや彈雨の下率先陣頭に立ち泰然自若宛も平時演習の如く部下仰いて以て其核心に團結し戰鬪單位たる中隊の戦力を發揮して遺憾なかつた。噫天氏に時を借さず緒戦に於て早くも散華せしと雖も士の戰場に臨むや百戦功なき軀全を愧ぢ一戦玉碎名を遺すに如かず。實に南苑の一戦其の開戦勢頭傲慢不遜の敵の心膽を寒からしめ速かに戦勝の端緒を爲したる赫々の武勳は千載の下青史に輝き其芳名は萬古に流れて盡きざるべく其の英靈は不滅に生き護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守護し妻女に尊き佑助と加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵少佐に進級し次で従六位勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐正六位勳四等功五級

森澤傳三郎

責任觀念旺盛にして勇敢なる聯隊砲隊長

氏は高知縣高岡郡高岡町の人にして父を常次母を繁と謂ひ明治三十四年七月二十七日に生れ妻兎喜との間に章夫、允清の外二女がある。性豪放磊落にして而かも温情に富み上下の信頼厚かつた。大正五年四月郷里高知縣海南中學校に入学しが其年九月廣島幼年學校に入り軍人としての第一歩を印した。次で陸軍士官學校に進み大正十三年七月第三十六期生として同校を卒業同年十月歩兵少尉に任ぜられ歩兵第五十聯隊附となり昭和二年十月歩兵中尉に進み同五年三月には臺灣守備歩兵第二聯隊附に轉じ南門要關の守備に任じたが同八年八月歩兵大尉に進み再び歩兵第五十聯隊に復歸し中隊長及歩兵砲隊長の職に歴任し正七位勳五等に叙せられた。

昭和十二年支那事變起るや九月遼山部隊聯隊砲隊長とし勇躍征途に就き北支到着後は酷暑加ふるに未曾有の豪雨は同地方平野を一面の氾濫地帯と化し道路は泥濘にして馬脚車輪を没し車行動の困難は實に名狀すべからざるものがあつた。殊に砲隊は著しき障礙を蒙り行進遲滞してやゝもすれば他の歩兵部隊に追隨し得ざる状態であつたが氏は粉骨碎身將兵を激勵し克く部隊を掌握し故障を排除して以て聯隊の戦鬪に支障なからしめた。

斯くて九月二十一日所屬部隊は大冊河の線に達し茲に部隊主力は彼岸の敵を攻撃する爲め同河を徒渉前進した。然かし砲隊は土地柔軟にして前進不可能なる爲部隊長は氏に援護歩兵二小隊を屬し其砲隊並に他の砲隊及び大隊小行李を併せ指揮し良路を求めて迂回し以て部隊主力に追及すべき事を命じた。茲に於て氏は右部隊を指揮し二十二日早朝姥村を出發し大王莊を経て張莊に向ひ前進して主力に合せんとした。然るに午前七時頃夜借村に達するや敵は前方沿村々端を占領して

居た。此時氏は已に部隊主力方面に盛なる銃聲を聞き砲隊が部隊に追及する事は頗る急務なるを痛感し之れが爲めには一舉前面の敵を撃攘せざるべからずと判断して直ちに援護歩兵二個小隊を第一線に展開し砲隊に其掩護射撃を命じ氏は自ら第一線兩小隊を指揮して攻撃に前進した。然るに敵は村落の外圍に工事を施し要所に掩蓋機關銃座を構築し鐵條網を設け我が攻撃前進開始と同時に重輕機關銃を浴びせ來り其勢頗る猛烈にして我が方の困難は言語に絶する程であつたが氏は終始儼然たる態度を以て第一線を指揮し部下を激勵し且砲隊に適切な射撃を爲さしめ。正午頃には敵前百五十米突に迫つた。而して其の後の前進は愈々困難を極はめたが一進一止敵に肉薄し我が歩砲火力を最高調に發揚すると共に決然突撃を號令し自ら陣頭に軍刀を振翳して突進した。然るに其の途中惜しくも氏は頭部に貫通銃創を受け其の場に壯烈なる戦死を遂げた。然れ共氏の勇敢決死の指揮により兩小隊は遂に敵陣を突破し見事敵を撃攘して氏の企圖を完全に果す事が出來た。



氏は幼時より將校生徒として心身を鍛錬し爾來各種の環境と軍務の試練體驗とに依り益々天稟の性格を玉成し又熱誠研鑽息むことなくして指揮統御に通曉し以て一隊將兵の敬愛と信賴とを集めて居た。果然實戰場裡に臨むや泥濘馬脚を没し又車軸を埋むるの難行軍に際會するも堅忍不撓身を以て部下を激勵し以て主力部隊に追及せるが如き又已むなく主力と別れて接敵行動するの途上頑敵と遭遇し一面本隊方面に盛なる銃聲を聞くや速かに戰機を明察し一舉當面の頑敵を粉碎して本隊方面に參與せんと決意せしが如き共に是れ責任觀念の旺盛にして且企圖心の發到たる證左と謂ふべきであつた。あゝ聖戰の半ばにして斯かる優秀なる指揮官を喪ふ痛惜禁ずる能はずと雖氏の動功並に芳名は千載皇軍戰史に輝き其不滅の英靈は護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日歩兵少佐に進級し次で正六位勳四等に叙し旭日小綬章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍々醫大尉正七位勳六等功五級 橋本武夫

職責に忠實なる醫官竟に匪彈に玉碎す

氏は福井縣坂井郡高椋村の人にして父を岩太郎母をまきと云ひ大正元年八月五日生で未だ獨身であつた。資性明朗豁達事を爲す積極的にして頗る熱心親切従て上下の信賴極めて厚く一同の敬慕措かざる所であつた。又家庭に於ては親に對し孝心極めて深かつた。昭和六年三月福井中學校を卒業引續き昭和醫學專門學校に入校し同七年六月陸軍衛生部委託生徒を命ぜられ同十年三月同校を卒業四月見習醫官を命ぜられ東京麻布歩兵聯隊に入營し同月醫師免許證を下附せられ同年六月三等軍醫に任ぜられて正八位に叙し金澤衛戍病院附となり同年九月陸軍々醫學校乙種科に入校翌十一年七月優秀なる成績を以て同校を卒業した。

而して翌八月滿洲國三江省勃利縣林口獨立守備歩兵大隊附に補せられ渡滿し同十二年八月一日軍醫中尉に進級其後湖南營に駐屯した。氏の駐屯地たる四周非衛生極まりなく加ふるに對蘇對匪の訓練警備に伴ふ將兵激勞の對策と殊に大隊守備地亦高度に分散せる關係は第一線衛生勤務に任ずる者の辛勞眞に想察に餘ありと云ふべきであつた。然るに氏は渡滿以來

衛生官たる負托の重きに鑑み粹骨碎身席の暖まる暇もなく東奔西走將兵の保健防疫に努め地方衛生開發に盡し又屢々討伐に出動し只管駐屯部隊の重き使命達成に應ずべく人的戦力の培養に努め終始遺憾なきを期した。戦死直前隨時檢閲に際し衛生業務整然たるを認められ其努力に對し激賞を受けしも蓋し當然の事であつた。



八月二十五日湖南營に於て隨時檢閲中午後八時半同地西方六軒の梨樹園子満人部落を約二百の匪賊襲撃放火掠奪中との報告に接し湖南營守備隊長白井大尉は満軍一個營を併せ指揮し梨樹園附近の討伐を命ぜられた。此の時氏は討伐隊編成に加はり午後十時出動し星影暗き泥濘の道路を乗馬にて部隊に跟随した。午後十一時二十分頃部隊は梨樹園子東方部落(湖南營西方約六軒)に於て吳雅範匪約二百と遭遇直ちに之を攻撃した。敵は小銃輕機關銃迫撃砲を亂射し其の勢猛烈であつたが部隊は彈雨の中を勇敢に攻撃して逐次敵に近迫した。然るに右翼方面より攻撃中の満軍は敵前二十數米に於て敵輕機關銃の猛射を受け負傷者を續出し相當苦戦に陥つた。此時満軍と呼應して敵の正面に向ひ攻撃前進中の討伐隊々長白井大尉の傍にあつて行動しありし氏は満軍に負傷者續出の状況を知り且同軍には軍醫なきを思ふや決然之が救護に赴かんとし數十歩前進したる時敵の一彈は氏の左頸部を貫通し其場に倒るゝに至つた。討伐隊長は林衛生兵と共に駆け寄り應急手當を施したるに「中隊長は大丈夫か、兵には負傷者はいかしくかりやれよ林」と聲を落しつゝ人事不省に陥り二十六日午前一時四十九分從容莞爾として名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏や平素職務に極めて忠實衛生官の範たり其出でて討匪に加はるや敵前至近彈丸雨飛の下日滿不可分の博愛精神を發揮し尙且死期迫るも傷者の有無を氣遣ふて已まず、氏の心頭唯々衛生の一念徹せるのみ、かくの如きは是れ職責の存する所身命を君國に獻げて斃れて後已む忠誠の發露顯現と云ふべきである。氏惜くも匪彈に斃れしと雖も其赫々の功勳と職責に忠實なりし示範は千載の下青史に輝き王道樂土建設の礎石となりたる其芳名は萬世不朽五族齊しく景仰して措かざるべく又其の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙皇獻を扶翼し奉り遺族の將來に加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日軍醫大尉に進級し次で正七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級 大谷 貞雄

謹嚴剛膽の機關銃中隊長屢々難局を打開し戦勝の因を作つて玉碎す

氏は岡山縣上房郡上水田村の人にして亡父は惣右衛門母をもんと云ひ明治三十三年九月一日生で妻千代子との間に宜政博子祐子の三兒がある。資性謹嚴人格高潔にして不屈不撓の人であつた。又母に對しては孝養至らざるなく弟に對しては薄給より學資を割きて教育し、部下を率ゐる率先垂範寬嚴宜しきを得特に温情厚く爲に慈父の如く慕はれてゐた。大正五年三月上水田尋常高等小學校を卒業在校中は成績優秀なりし爲級長に推され。又郡長より模範生とし表彰せられた。同八年三月實業補習學校を卒業其後老いたる母と病弱なる兄を扶けて農に従事し模範青年として屢々表彰せられ又青年團長に推され團員の修養向上に貢獻せる所尠くなかつた。同九年十二月徵兵として龍山歩兵聯隊に入營下士官志願を爲し採用せられて熱心精勵し大正十一年十二月歩兵伍長に次で軍曹に進み同十四年學生として陸軍戸山學校に派遣同十五年推薦せら

れて東京陸軍幼年學校附となり四年間同校に勤務し選ばれて少尉候補者となり昭和五年陸軍士官學校に入校同七年二月歩兵少尉に任官正八位に叙せられ同九年十月歩兵中尉に進級し同十年には歩兵學校乙種機關銃學生として修業した。此間服務頗る熱心孜孜として倦まず有爲の將校として將來を囑望せられてゐた。而て同年六月勳六等に叙し瑞寶章を賜はつた。支那事變起るや森本部隊第三機關銃中隊長として昭和十二年七月十六日勇躍征途に就いた。北支敵線到着後七月十九日より八月二十二日に亘る間は唐山及天津附近の警備並に郎坊落堡及



天津附近の殘敵掃蕩に八月二十二日より九月十四日に至る間は長辛店附近集中掩護の爲蘆溝橋及良鄉附近に於て陣地を占領し該地附近守備に任じ、九月十二日午前十一時二十分開古庄及西炊附近に在りし我警戒部隊に對し約一團の敵兵馬各庄方向より攻撃し來るや氏は自ら中隊主力を指揮し第一線中隊の左に進出し第三大隊と協力し開古庄附近を包圍攻撃中なる敵の右側背を攻撃した。此附近一帯は高粱畑にして部隊の指揮掌握及敵情の視察困難なりしも近く第一線に進出して敵の側面に鐵槌的射撃を加へ以て第十一中隊の突撃を容易ならしめた。敵主力は之が爲側背の脅威を感じ竟に開右庄に對する攻撃を斷念して馬各庄方面に退却した。次いで九月十五日所屬大隊が午後二時より馬各庄の敵に對し攻撃を開始するや氏の機關銃中隊は第一線に進出し該村落西北端の敵を制壓し第一線中隊の攻撃を容易ならしめ午後四時三十分之を占領することを得た。引續き凹世庄の敵を攻撃するや機關銃中隊は凹世庄北方約四百米無名小流の線に進出し凹世庄部落の圍壁を利用し猛威を逞うせる敵に對し主力機關銃の火力を

集中して之を制壓し以て第一線部隊の前進を促進し敵前近く肉薄せしめ其夜氏の中隊は爾後に備ふる爲第二線に位置した。

明くれば十六日午前七時我が部隊は凹世庄の敵陣地を奪取し田各庄に進出し續いて夏村及東瓜田庄を攻撃することになつた。此日天氣晴朗氏は戰鬪開始に先ち小隊長を集めて激勵し以て決死奮闘を誓ひ曉て午前七時四十分田各庄南側の敵の監視部隊を撃退し東瓜田庄主陣地の前進陣地たる無名部落の攻撃に當り氏は部下中隊の一部を第十一中隊の右に主力を其左に位置せしめ第一線部隊に協力し遂に之を奪取した。此無名部落占領後續いて水濠を以て圍繞せる東瓜田庄の主陣地攻撃に協力せしが敵は高地上一連のトーチカ陣地を構築し之に對し我が攻撃地帯は凹地にして全然敵陣地より眼下に見下され頗る苦戦であつた。然し氏は自ら陣頭に立ちて猛火の下匍匐近迫して敵前百五十米の近距離に進出し沈着剛膽具さに敵情を視察して的確に其射撃を指揮し機關銃の全威力を最高度に發揮し以て敵を制壓し第一線の前進を容易ならしめた。特に敵の一部逆襲し來るや一兵となるまで死守せよと其主力を以て逆襲する敵を猛射して多大の損害を與へ竟に敵をして其の企圖を挫折せしめ爾後主力を以て本道方面の敵の制壓に努め第十一中隊主力の敵の左翼方面への迂回行動を容易ならしめた。かくの如く機關銃隊の全能力を各方面に發揮して奮戦克く努め偉大なる武功を樹てつゝあつたが午前十一時十分無念左胸部に穿透性盲貫銃創を受け其場に倒れた。氏は氣息奄々たる中に「保定、保定へ」とかすかに言ひつゝ竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し氏の機關銃中隊の活躍奮戦に依り大隊は遂に堅固なる敵陣地を奪取することを得た。

氏の中隊を指揮するや彈雨の下常に率先陣頭に立ち不屈勇敢第一線に陣地を進め協力緊密指揮的確。其部下に臨むや人格高潔温威併行爲に中隊は氏を核心とし舉止恰も一體となり皇軍機關銃隊の精銳を發揮し毎戦々勝の誘因を爲し餘す所なかつた。噫天時を借さず念願の保定陥落を見ずして華北の花と散りしは千秋の恨事なりと雖も氏の毎戦樹てたる赫々の武

勳は千載に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈出でゝは軍の戦勝を守護し入りては愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵大尉に進級し次で正七位勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳六等功五級 加藤 恒 安

慧眼克く敵情を搜索し剛膽奮闘克く戦勝の途を拓く

氏は宮城縣加美郡鳴瀬村の人にして亡父を治三郎亡母をマサキと云ひ明治四十三年九月二十八日に生れ妻さく江との間に恒悦及びひろ子の一男一女を挙げた資性剛毅果斷高潔にして責任觀念厚く且慈愛心に富んで居た。大正十四年三月鳴瀬小學校高等科を卒業後直に宮城縣立農蠶學校に入學し昭和三年三月同校を卒業し家庭に在りて農蠶業に従事し農事改善に貢献して居つた。昭和四年十二月幹部候補生とし歩兵第二十九聯隊へ入隊し翌五年十一月除隊同八年三月少尉に任官し同年九月特別志願士官として歩兵第三十聯隊へ入隊昭和十年には體操科學生として陸軍戸山學校へ分遣せられ在校間銃劍術一級を免許せられ翌十一年一月より約四ヶ月間陸軍歩兵學校に分遣し同年九月歩兵中尉に進級した。

昭和十二年四月篠原部隊儀我部隊に屬し滿洲警備の重任に就き其間劍道を勵み四段を免許された。支那事變勃發するや猪鹿倉部隊に屬し聖戰に参加し永嘉堡附近の戰闘に於ては八月三十一日植田大隊の將校斥候となり午前九時卅分所屬隊を出發し永嘉堡南方高地の敵情搜索に出かけた。折柄豪雨襲來進路の山岳亦峻峻であつたが氏は之を物ともせず重任を双肩に擔ひ勇躍前進し舊舖附近に達するや俄然敵の監視部隊より射撃を受けた。氏は巧に之を避け敵を側方より攻撃して之を

撃退し更に西南方高地脈に沿ひ敵の背後に進出して李信屯及其西方高地附近の敵陣地を詳細に偵知し特に陣地の翼及配備を明確にし以て所屬大隊の戰闘計畫に有力且確實なる資料を提供した。寔に是れ氏の豪膽熱心にして且つ着眼適切なりし賜であつた。



九月上旬所屬大隊が天鎮附近の敵陣地を攻撃するに方り氏は又九月三日將校斥候となり堡子灣西南方高地の敵情搜索に任じた。同高地中腹に達するや輕機を有する十四五名の敵を發見し齋藤斥候と協力して其背後に進出し機先を制して之を攻撃せるに敵は不意且神速なる攻撃に驚き死體と銃器を遺棄し遁走した。之に依り同高地附近の敵情を明かにするを得所屬大隊をして同日夕刻より標高二二五〇高地への進出を容易ならしめた。

翌四日敵の前進陣地に對する攻撃に於ては植田大隊の第一線中隊たりし第五中隊第一小隊長として部下を激勵し率先陣頭に立ちて壯烈なる突撃を敢行し手榴彈を以て必死に防戦せる敵に拳銃を以て渡り合ひ次で格闘之を噓し其勇猛果敢なる正に一隊の志氣を振作し

た。

九月十日所屬大隊は午後六時三十分より嶺邊近傍に在る黄土溝附近に於て長城線の敵を攻撃した。此時氏は第一線小隊長として最も頑強なる正面に向ひ午後七時三十分果敢なる突撃に依り之を占領した。此攻撃は嶺邊附近の敵に對し其背後を脅威したるものにして氏の勇敢なる攻撃は嶺邊方面の敵の退却を誘致するに至つた。其後大同方向の敵を攻撃する爲前

進中央兵長として克く困苦缺乏に堪へ山地の難路を踏破し進路の障碍を排除し所屬部隊の進出を容易ならしめた。斯くて九月廿七日には愈々天嶮短越口及鐵角嶺附近の敵陣地の正面に到着した。廿八日鐵角嶺に向ふ追撃戦に於ては尖兵長として兩側高地に敵尙殘存せるに拘らず谷地を勇敢に前進して所屬大隊の前進を容易ならしめ續いて鞍部の攻撃には第五中隊右第一線小隊長として適切勇敢なる指揮に依り他の小隊に先ち所命地點を奮取した。偶々所屬大隊右第一線たりし第七中隊正面の敵が高地に據り最も頑強に抵抗しあるを認むるや獨斷該敵の側面を攻撃して之を占領し同中隊の進出を容易にした。然るに敵約百名逆襲し來り高地の奪回を企てたが奮戦之を撃退して所屬大隊をして高地鞍部の占領を確實ならしめた。然るに敵は其右方二五三〇高地に在りて頑強に抵抗を續けありし爲大隊長は夜襲を以て之を奪取するに決した。廿九日午前三時月昇る頃前進を開始し岩石巍峨たる高地を攀登し第七中隊は先づ其一角を占領し氏の所屬中隊は之に續行したが大隊長より該高地の右に連接せる陣地の攻撃を命ぜられ氏は小隊の最先頭に在りて獅子奮迅の勢を以て突入し抵抗する敵を斬りまくり乍ら逐次敵陣地を奪取中であつたが此正面は敵兵群集し盛に手榴彈を投げつけて頑強に抵抗した。憎いかな敵の手榴彈は先頭に進める氏の顔面に命中し氏は鼻口部に致命傷を尙腹部にも破片創を受け軍刀を堅く握りしめたるまゝ從容として壯烈なる戦死を遂げた。天嶮鐵角嶺の占領に依り氏の所屬聯隊は感狀を授與せられたが氏の勇戦奮闘に俟つ所頗る大にして氏の尊き犠牲に對しては所屬隊將兵の齊しく痛惜する所であつた。

噫氏や難局に處して勇氣益々凜然戰機を捕へては猛鷲の如き奇襲必ず成功し。堅陣に向ひては率先陣頭に立ちて常に戦捷の端緒を開いた。是れ即ち氏が平素高邁なる軍人精神の鍛鍊と研鑽怠りなき部隊指揮に通曉して絶倫の體力を以て率先垂範せる結果であつて眞に皇軍將校の精銳であつた。今や風發叱咤の雄姿に接すべからずと雖も其功績は皇軍戦史に異彩を放ち其名は大和櫻と謳はれて千載に芳ばしく其英靈亦万世に生き皇國を守り又一家殊に子孫の守護神として尊き加護を垂るゝ事であらう。

垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵大尉に進級し次で正七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級 片山 國 雄

壯烈決死敵前上陸の先頭を切て玉碎す

氏は大分縣下毛郡深秣村大字上林の人にして亡父を幸造母をとりと稱し明治四十一年九月三十日を以て生れ妻貞子との間には愛兒光子を授けられた。資性謹直にして淡白事に當りて剛毅果斷幼時より軍人を志願し研究心極めて旺盛であつた。斯くて氏は郷里の小學校を卒業するや大正十年四月大分縣立中津中學校に入り同十五年三月同校を卒へ昭和三年四月陸軍士官學校豫科生徒に採用せられ同五年三月規定の課程を畢へ士官候補生として歩兵第四十四聯隊に入隊同年十月陸軍士官學校本科に入學同七年七月同科卒業の後十月二十五日を以て陸軍歩兵少尉に任ぜられ同年十二月正八位に叙し同八年十二月乙種通信學生として歩兵學校に入校同九年四月第十一師團歩砲兵無線通信手教官として普通寺に分遣せられ師團下各隊幾多の通信手教育に任じ十月陸軍歩兵中尉に進級十二月從七位に叙せられた。次で翌十一年三月更に選ばれて陸軍習志野學校に丙種學生として分遣せられ熱心研究を遂げて卒業歸隊し十二年七月中隊長職務心得を命ぜられたが間もなく黒岩部隊通信班長として勇躍中支方面へ向け征途に就いた。

斯くて八月二十二日未明我が軍が川沙鎮沿岸に敵前上陸を敢行するや氏の所屬黒岩部隊は左翼隊として上陸を敢行した。此の時氏は部隊長と第一線部隊間の連絡を命ぜられ戸田軍曹以下通信班員を率ゐ第一回上陸部隊に加はり其先頭に進

んだ。當時は文宅附近の水際並に川沙鎮堤防の線に陣地を占領し暗夜ながら我が舟艇目がけて盛に小銃機關銃火を浴びせて来たが我が舟艇は一意猛進し午前五時頃氏の搭乗せる舟艇川沙河口西側に著岸するや文宅西端附近及文宅東方堤防上に在りし敵重機關銃より猛射を受けた。時に天未だ明けず四面暗黒加ふるに水深大なりし爲め全員舟艇を離るゝに躊躇した。此の時剛毅果斷の氏は衆を激勵すると同時に率先胸を没する河中に跳込み篠つく如く敵機關銃彈の雨下する中を勇猛

果敢逸早く河岸に達し續いて来る部下を掌握し更に自ら敵情を確めんと二三の部下を率ゐる前方に進出せしに忽ち同行の熊澤上等兵は胸部に貫通銃創を受けて斃れ續いて左側方よりする敵重機關銃彈は同時に氏の頭部と胸部を貫通し竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。



將に其の雄腕を揮はんとするに方り兇彈の爲めに玉碎するに至つた。あゝ前途有爲の青年將校を早くも此一戦に喪ふ眞に痛悼愛惜の情に堪えへぬ。然れども氏が丹精せる部下通信員は爾後の戦闘に赫々たる勳功を奏し又上陸に方り躊躇逡巡せる部下を叱咤激勵率先垂範水中に飛入つて果敢なる上陸を成功せしめたるは機宜に適せる指揮にして正に身を殺して多數の部下を生かしたるものとも謂ふべく其の功績たるや不朽にして天晴れ皇軍戦史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ其

の神靈や尙も皇國を護り又一家殊に愛子の將來に限りなき加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵大尉に進級し正七位に昇叙せられ次で勳五等双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳六等功五級

植 太郎

所屬隊に追及中敵に會し最後迄奮闘玉碎す

氏は和歌山縣東牟婁郡敷屋村の人にして兩親健在父を幸吉と云ひ明治三十九年七月十日生れで妻喜美子との間に未だ子はなかつた。資性寡黙沈着剛毅にして果敢、不撓不屈積極進攻の氣概を有し眞摯熱心にして研究心に富み責任觀念旺盛義務心厚く諸般の服務着實嚴正人格高邁部下を率ゐるや率先垂範恩威併行信望頗る厚きものがあつた。大正十三年和歌山縣立新宮中學校を卒業柔道は初段の域に達してゐた。大正十五年十二月一年志願兵として和歌山歩兵聯隊に入營昭和二年十一月滿期除隊し昭和五年三月歩兵少尉に任官し翌四月正八位に叙せられた。昭和五年茨城縣支部日本國民高等學校に入校同六年三月同校を卒業した。其の在郷間は昭和四年より八年迄帝國在郷軍人會敷屋村分會長に推され又青年學校教練指導員となり分會の發展並に青年指導に盡瘁し貢獻する所尠くなかつたが同八年九月特別志願將校として龍山歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し服務着實眞摯にして上下の信望を一身に集め成績優秀將來有爲の將校として囑望されてゐた。而して同十一年九月歩兵中尉に進級し從七位に叙せられた。

支那事變起るや森本部隊に屬し昭和十二年十月十七日勇躍征途に就いた。戦地より家郷に宛てたる書面の一節に「生れて以來の御高恩の萬分ノ一に報ずる決心決して他に後れを取るやうなことは致さぬ覺悟故何卒御安心被下度」とあり。北

支戦線に到着し野戦中隊長要員として所屬部隊に追及中十月二十三日石家莊に於て傷痍全快退院の上部隊に追及せんとしてゐたる嘉久男少尉以下兵十數名を合し之と行を共にし十六日夜測魚嶺に達した。此地點に於て部隊大小行李指揮官より此前方七亘村附近には優勢なる敵兵存在し前進困難なる旨情報に接したるも氏は急遽赴任の必要もあり又本情況を偵察して所屬隊に報告せんと茲に意を決し自ら主力部隊に連絡すべく嘉久男少尉以下を率ひ二十七日午後四時頃測魚嶺を出發し午後九時七亘村西南方斷崖道路に差懸るや前方より突如敵の猛射を受くるに至つた。然れども氏は素より覺悟せる事とて聊かも動ずる色なく直ちに嘉久男少尉以下數名をして道路を避けて潜かに敵の警戒線を突破潜行せしめ以つて所屬部隊に連絡報告せしめ氏自らは兵數名を指揮し夜暗を利用して巧に敵と交戦せしが敵は我兵力僅少なるを察知せしか逐次右側高地方向より包圍近迫し來り危険刻々に迫りしかば氏は益々部下を激勵し自らも拳銃を執りて極力之が撃退に努めつゝありしが午後十時頃不幸胸部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し寡兵克く衆敵を支へ其間希望の如



く嘉久男少尉をして所屬部隊に連絡せしむることを得た。

氏や東亞に妖雲漲るの時軍旅に志を立て現役の班に列し技を磨くこと正に四年有時に際し第一線に勇躍すべく遺憾なきを期してゐた。偶々今次事變に際會し征途に上るや素より一死奉公の覺悟、念願到來を喜びしは宜なりと謂ふべきである。然るに天なる致命なる哉待望の中隊長として未だ雄腕を揮はざるに敵の一團と遭遇す千秋の恨事と謂ふべきであつ

た。然し此一戦氏の面目躍如沈着剛膽其指揮機宜に適し孤軍奮敵の心膽を寒からしめ皇軍の威武を宣揚して玉碎せる其赫々の武勳は千載に輝き不滅の英魂は護國の神となり後世永遠に萬民に仰がれ神靈尙も皇國を守護し遺族に佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵大尉に進級し次で正七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 池澤 豊 治

卓越せる戦闘指揮を以て難局を打開し偉功を奏す

氏は兵庫縣美囊郡奥吉川郡の人にして父を長吉母をなつと云ひ明治三十三年二月十日に生れ妻まつ江との間に忠、昌史、佐巴の三愛子を擧げた。資性豪氣恬淡にして一面極めて麗はしき人情に富み諸事熱誠上下一般の愛敬を受けて居た。大正三年三月奥吉川小學校卒業後家庭に在りて農業に従事し大正十年十二月現役兵として歩兵第八十聯隊に入營し下士官候補者に採用せられ同十二年十二月伍長に任官し其の後陸軍戸山學校體操科學生として體操劍術を修得し伎倆優秀教育技能亦卓越にして自隊兵員の教育に裨益せる所甚大であつた。氏は又書道に堪能にして曾つて營庭に馬蹄形に芝生を植えそこに一碑を建て氏の揮毫に依り「忠節」と刻み隊員一同の朝禮場となしたが今は思出の種となつて居る。昭和八年八月累進して歩兵准尉に進んだ。氏の執務するや着眼良好にして其の熱誠着實なる努力は各職務に歴任して常に優秀なる成績を擧げて居た。

支那事變起るや昭和十二年七月鈴木部隊に屬し門松機關銃中隊の小隊長として勇躍征途に就き九月一日を以て歩兵少尉

に任官した。

北支到着後團河村の戦闘開始せらるゝや氏の小隊は第十一中隊長早川大尉の指揮下に右第一線部隊として奮戦し續いて南苑兵營を攻撃するに方りては七月二十八日午前五時半行動を起し敵彈雨飛而かも行動困難なる高粱畑を率先陣頭に立ちて奮進午前十時頃兵營東南角より二百米の線に進出して陣地を占領し敵の重要據點に設けある銃眼の守兵を瞬間にして撲滅し更に東南角の側防機關銃に猛射を加へて之を制壓し以て早川中隊の突撃動機を作つた。而して同中隊が突撃に移るや氏は躍進中布設地雷を發見して其電線を切斷し以て第三大隊主力の突入を安全ならしめ次で團壁の一角に躍進し敗退する敵に猛射を浴びせて之を潰亂に陥らしめた。



八月初よりは長辛店附近の集中行動掩護の目的を以て陣地構築及警戒勤務に服し次で九月中旬にかけての琉璃河々畔の戦闘には豫備隊或は追撃部隊に配屬して活躍し九月二十二日石板山附近の戦闘には右第二線たりし第十二中隊に配屬せられ。同日午後三時半頃より戦闘を開始したが石板山右方高地よりの敵火猛烈を極め同中隊の前進困難なりと見たる氏は彈雨を冒し機敏に該敵の位置を確認し最も有効適切なる射撃を以て瞬間に之を制壓し午後四時半頃には敵陣地を突破し追撃に移るを得しめ翌二十三日には望都南側地區の戦闘に参加し克く重機關銃の威力を發揚し戦勝の端緒を拓いた。

爾後十月下旬にかけ靈壽縣粟里附近の遭遇戰滹沱河畔の敵前渡河戰鬪東石門及七亘村附近の戦闘を経て十月二十五日水

嵐附近の戦闘に参加するに至つた。所屬部隊は同日午後三時行動を開始したが氏の小隊は早川中隊に配屬せられ水嵐西側高地及標高一、三六七高地を確保し歩兵部隊主力の北方への轉進を掩護すべき特別命令を受けた。氏は敵彈雨飛の中を物ともせず率先最前線に出で最も適切なる射撃陣地を占め敵の側方より不意且猛烈に射撃を開始し敵線に大動搖を起さしめ協力すべき配屬中隊をして速に要點を占領せしむるを得た。同夜氏の小隊は敵前二百米の重要地點を占領して徹宵之を確保し更に敵彈下に進んで敵情を搜索し配屬中隊長に適切なる意見を具申して翌拂曉迄に敵の集中地域の側方に射撃陣地を推進し天明と共に敵主力の側面及背後より不意に猛射を加へ殆ど殲滅的の大打撃を與へた。次いで歩兵中隊の突撃に最も密接なる協力を與へ敵陣地へ突入の際は殆ど第一線歩兵と共に敵陣地線に我が陣地を變換し適切なる射撃指揮に依り敵に多大なる損害を與へたと共に中隊長に對し極めて適切なる意見を具申し以つて同中隊が兵團長より與へられたる重大特別任務を完遂せしむるを得た。同日午後三時過水嵐西南高地に於て固有中隊に復歸するや當面の敵は反撃の企圖を以つて頑強に抵抗し且我が陣地に猛射を加へて來た。氏は之に怯まず的確且迅速なる射撃を以つて之を制壓した。氏等の占領しある陣地は極めて重要な地點にして敵砲兵の目標となりし爲猛烈なる砲撃を受け氏の身邊にも盛んに砲彈の落下炸裂する状態であつたに拘はらず氏は尙も敗退中の敵歩兵に猛射を浴びせて居た。然るに午後三時半頃飛來せる敵砲彈は氏の身邊咫尺の位置に落下し爲に氏は頭部頸部左肩胛部左手に砲彈破片を受け後方の急坂を約七十米も突き落され脊髄損傷の重傷を負ふた。豪氣の氏は軍刀を杖に立ち上らんとしたが力及はず出難き聲を絞りて尙も射撃指揮を執らんとして居た。後に野戰病院に收容手當を受けたが愛子等に對し「父は北支の柱として戦死し永久に護國の鬼となるぞ、父の意志を繼いで忠良な國民となつてくれよ、母を大切にし孝行してくれよ何事も母の教へに従へよ、父は草葉の蔭から見守つてやるぞ」との要旨を認めて絶筆となし十一月七日竟に華北の華と散つた。

氏や資性高邁戦機を察するや明敏指揮亦的確部下を視る事我が子の如く一隊將兵の敬愛自づから一身に集まつて居た。一度び戰場に起つや屢々偉功を奏し所屬又は配屬部隊をして赫々たる戦勝を獲得せしめた。寔に是れ皇軍指揮官の本領を發揮し又一般軍人の龜鑑たるものであつた。あゝ前途有爲の材幹を此一戦に喪ふ洵に痛嘆哀惜禁じ難き所である。さり乍ら氏の功績たるや其芳名と共に千載皇軍戦史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族殊に愛子等の將來には遺書の如く限りなき加護佑助を與ふることであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し次で従七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉従七位勳六等功五級

岩崎利夫

難局に處し沈着剛膽克く滄州堅陣の一角を突破す

氏は兵庫縣揖保郡譽田村の人にして父を榮太郎母をしずと云ひ明治四十二年四月一日に生れ妻千鶴子との間に長女英子を擧げた。資性純真快活にして恬淡孝心極めて厚く又實子に對する愛情特に深く殊に佛教青年會に入りて修養に努め一家の中堅となり家庭の明朗平和を圖つて居た。特に祖父母の身を案じ出征後其最後の通信にも「老人を大切にして下さい」と認めてあつた。大正十年三月譽田尋常小學校を卒業後昭和三年三月縣立龍野中學校を卒業更に同六年三月鳥取高等農業學校を卒業した。在學間陸上競技に興味を有し角力柔道馬術の選手となり又俳句尺八等にも親み豊かなる情操を涵養して居た。氏は眞面目なる學者者にして整然たる計畫の下に孜々として勉學し其成績を擧げ又學友及知己に對しても極めて親切にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和七年二月姫路歩兵聯隊へ幹部候補生として入隊し同十年三月歩兵少尉に任官し次

で正八位に叙せられたが退營後は鳥取高等農業學校農藝化學科副手を経て專賣局水戸試験化學係に就職し熱心職務に精勵して居た。



支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召沼田部隊に屬し藤原中隊第一小隊長として勇躍北支への征途に就いた。斯くて八月下旬天津南方三間房の戦闘には軍旗護衛の任を帯び敵彈雨飛の下泥濘洪水の地帯を勇往邁進して克く其重任を果たし

九月上旬には津浦線に沿ひ南進し獨流鎮靜海縣を経て唐官屯に進出し馬廠陣地帯の一角に對し攻撃を準備した。

九月九日所屬中隊は大隊長山本少佐の指揮下に丁莊の敵陣地に對し夜襲を實施するに至つた。當時所屬中隊は大隊の第二線攻撃部隊として展開したが第一線攻撃部隊の突入を容易ならしむる目的を以て東部丁莊の東南角に突入する如く部署された。丁莊の部落は東部中部西部の三部落に分れ其南部一帯は水深肩に達する池沼にして各部落を區劃する如く池の端末深く灣入し更に敵は東南西部より北部にかけ水濘及び鐵條網を設けて障礙となし水濘線及各部落を利用



し數段の陣地を設け又丁莊部落の南方に大交通壕を築設し以て丁莊に進入する皇軍を側射し得る如く配兵されてあつた。所屬中隊は氏の小隊を先頭とし午後九時行動を起し密生せる高粱の泥畑を漚過しつゝ午前三時十分敵前近く進出した。敵は我中隊の接近を察知し猛烈なる射撃を浴びせて來たが氏は部下を激勵し率先水濘に跳び入り一舉突入を敢行した。此時不幸にして藤原中隊長負傷して立つ能はざるに至るや氏は直に之に代りて中隊を指揮し奮進を續けたが西方よりする敵の

猛烈なる斜射の爲逐次死傷者を出すに至つた。剛膽不敵の氏は之に怯まず大喝一聲敵陣地に斬込めば流石の頑敵も部落北側地區を経て退却を初めた。氏は機を失せず部下を率ゐて部落間に介在せる池を涉り中部部落の敵を驅逐して一旦隊勢を整へ更に其西方の池を渡りて西部丁莊を突破し進路を變換して南進し西部丁莊の南側堆土の線に進出して南方交通壕に蟠居せる敵に對する攻撃を準備した。此の間氏の目覺しき奮戦に依り大隊主力を目がけ猛射しありし敵は一時其火力を牽制され爲に主力の突入は著しく容易となり遂に十日午前七時には完全に西部丁莊の敵陣地をも占領し部落西南に進出する事を得大隊將兵の深き感謝を受けた。

所屬部隊は九月二十一日更に滄州陣地帯の最右翼たる堅壘馬落坡を攻撃する目的を以て同月午後九時豆店より行動を開始し氏は右第一線中隊長として率先陣頭に先ち膝を没する泥濘の高梁畑を踏みわけて敵前五百米迄進出せる時敵の發覺する所となり猛烈なる十字火を受けた。併し中隊は氏の勇壯なる行動に依り他隊よりもぐんぐん先んじて突撃陣地の線にとりつき突撃の諸準備に着手した。敵は水濼及鐵條網を以て其陣地を取圍み少しでも頭を上ぐれば壓倒的の猛射を浴びせて来る。此處は敵散兵壕より二十五米鐵條網から約九米水濼端末から二米と云ふ至近の位置であつた。二十二日は終に突撃決行の機會もなく敵は益々我が前面に兵力を増加し來り戰鬪は膠着状態となり二十三日の晝間に及んだ。沼田部隊長よりは「部隊主力は本夜馬落坡の西方部落張新庄の敵陣地を奪取する。其隊は晝間敵を牽制したる後薄暮を利用し其戰場より離脱し主力に追及せよ」との命令があつた。氏は薄暮を待ち巧に戰場を離脱せしめ深夜に至り殘餘をまとめ先行部隊の後を追ふた。先行部隊は其後何處を突破せるか疾風迅雷の勢を以て張新庄方面へ影を没して居た。氏は四邊の殘敵より猛射を浴びつゝ二十四日朝張新庄に進出し高梁畑の朝霧の中に眼鏡を取つて彼我の情況を偵察中憎くや敵彈飛來頭部を貫通されて壯烈なる戦死を遂げた。

氏は平素より修養を積み其温情は戰場の到る處に發露され部下皆悦服して居た。而かも自身は既に生死を超越し剛膽機敏よく常に戦局を明察し靜かなること林の如く疾き事風の如く適切なる指揮に依り赫々たる武勳を奏した。寔に是れ皇軍將校の龜鑑たるものであつたが聖戰の半ばにして此有爲精悍なる指揮官を喪へるは眞に痛惜に堪へない。然れども氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝き其名は千載に芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がるべく其の神靈は尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として一家殊に愛子の將來に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し次で従七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉従七位勳六等功五級 林 安 男

部下殆ど全滅に類するも自ら銃を執り敵重火器を制壓して戦勝の端を拓ける機銃小隊長

氏は長野縣諏訪郡川岸村の人にして父を謙吾母をけさのと云ひ明治四十四年四月二十一日生で妻ふみゑとの間に一子禮子がある。資性温順沈毅、人格高潔にして事に臨み勇猛、責任觀念強く率先難局に當り斃れて尙已まざる風があつた。従つて上官の信頼厚く部下に對しては懇切爲に部下悦服し其信望を一身に集めてゐた。又青年學校在勤中登山に際し生徒の崖より顛落せるを見るや身の危険を顧みず之を救ひたる美談もある。大正十三年三月川岸尋常高等小學校を卒業し在校中は成績優秀常に級長に推されてゐた。續いて諏訪中學に入り昭和四年三月卒業直に川岸村役場吏員となり同六年十二月幹部候補生として松本歩兵聯隊に入營し翌七年十一月滿期除隊し其後片倉合名會社私立青年訓練所指導員となり同八年九月

下諏訪青年學校指導員に任ぜられ同年三月歩兵少尉に任官正八位に叙せられた。昭和十一年九月特別志願士官に採用せられ松本歩兵聯隊機關銃隊附となり同年九月歩兵學校に派遣せられ翌十二年一月原隊に復歸し將來有爲の將校として囑望せられてゐた。更に同年五月歩兵第一聯隊に配屬を令ぜられ七月原隊に復歸した。

支那事變起るや獨立機關銃温井部隊に配屬桶中隊第二小隊長として昭和十二年八月二十六日勇躍征途に就いた。其出陣に當り父宛に「志氣益々旺盛御期待に副はんことを期す」と又妻に

宛「男子國家の爲劍を執る、生還を期せず、國家の爲強き母たれ」との電報を以て烈々たる武人の意氣を示した。



北支戦線に到着するや九月六日より二十一日に亘る永定河附近の戰鬪及其追撃に際し氏は克く中隊長を輔佐して其任務達成に遺憾なからしめ殊に九月十六日午後五時二十五分南台に於て敵騎兵と遭遇するや獨斷機を逸せず銃を卸下し殊に其一分隊を以て迅速に右側方墓地の要點を占領せしめ道路に沿ひ其兩側を前進し來る敵を猛射せしめ以て敵に多大の損害を與へ其の前進を阻止し其間後方小隊及第二中隊に陣地進入の餘裕を與へ聽て此等部隊をして其射撃威力を發揮せしめ敵をして竟に狼狽潰走せしむるに至つた。之れ偏に當初に於ける氏の機敏的確なる指揮に基因せる所であつた。九月二十三日月光の下大隊が大劉莊を急襲するに際しは氏の隊は大隊の中間地區に在りて前進したが途中敵に發見せられ其射撃を受くるや氏は速かに銃を卸下して陣地に進入し射撃を開始し其的確なる射撃指揮は大隊の攻撃と相俟つて速かに敵を制壓し遂に優勢なる敵を潰走せしむるに至つた。

た。

九月二十四日氏は部下四名を率ひ保定陣地の偵察を命ぜられた。氏は巧に地形を利用して敵陣地近く潜行し大隊の攻撃前進路及敵陣地の状況を偵察し具さに之を報告し大隊の保定攻撃に貢獻せる所多大であつた。次いで午前六時三十分所屬部隊は保定城攻撃の爲朝霧を衝きて行動を開始するや氏は第一線小隊長として敵前至近の距離に迫り適時火力急襲を行ひ堅固なる陣地に據る敵を震駭狼狽せしめた。然れ共更に近接せざれば猛威を逞うしつゝある掩蓋機關銃の位置見へざる爲至近距離に前進せんと欲したるも當時小隊は敵機關銃火の爲第一第二分隊長共に負傷し殊に第二分隊の如きは二三四七番銃手共に既に負傷したるを以て一五六八番銃手が銃を掲げ弾藥を擔ひ幾度か躍進に躍進を重ねて勇進し最後の一人まで頑張れと激勵鼓舞しつゝ敵前百九十米に近迫して遂に陣地に進入することを得直に猛烈なる射撃を敵に加へしが此頃敵彈も亦益々熾烈となり彈藥を銃側に運びし六番銃手斃れ次いで五番銃手倒れ彈藥も既に三箱を射盡して後僅かに一箱を餘すのみとなつた。氏はかくの如く殘彈僅少となりしに拘はらず敵掩蓋機關銃が我目視困難なるに乗じ尙も猛威を逞うしつゝあのみならず最早戰機は一刻の猶豫をも許さざるに鑑み猛火の下自ら射手に代りて銃を執り此の目視困難なる敵の掩蓋機關銃眼に對し自ら射撃して正しく射撃を導き其彈着を以て射手に的確且實物に依る照準點を示し以て爾後の射撃をして愈々制壓的效果を發揚せしめつゝあつた其の際無念胸部に貫通銃創を受け午前九時過ぎ壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。聽て八番銃手も傷つき次で射手も傷つき此分隊は全滅し銃側に銃手なきまで悲惨の状況を呈するに至り大隊亦戦死十八戦傷四十四名を出すに至りしも氏等の勇戦奮闘に依り午前九時五十分遂に保定城を奪取するに至つた。

氏や東亞に妖雲漲るの秋軍旅に志を立て現役の班に列し技を磨くこと正に一年偶々時運に際會し其戰場に臨むや電文披露の如く素より身命を君國に献げて任に斃るゝの覺悟牢固たるものがあつた。其決意其忠誠の迸る所毎戦勇敢活躍殊に保

定城の攻撃に於ては部下相次で斃るゝも屈せず沈着剛膽自ら銃を執り敵を震駭せしめ其重責を遂行す。噫天時を借さず征戰中途にして有爲氏の如き將校を表ふ痛恨盡きずと雖も氏が毎戦樹てたる赫々の武勳は千載の下青史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈出でゝは皇國を守護し入りては愛兒の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し次で従七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉従七位勳六等功五級 富岡 孝

卓越なる指揮を以て難局を打開せる機關銃小隊長

氏は兵庫縣保部石海村の人にして父を清太母を藤枝と云ひ明治四十三年六月十二日に生れ妻美代子との間に長男大を擧げた。資性快活恬淡にして氣宇闊達中等學校在學時代より運動家として活躍し就中柔道は講道館初段を免許され又昭和八年には日本體育會體操學校を卒業したが特に陸上競技球技を得意とし自然明朗なる性格を長成するに至つた。昭和六年十二月幹部候補生として姫路歩兵聯隊へ入營し同年の秋季演習には大に活躍して時の聯隊長より賞状を與へられた。昭和九年三月歩兵少尉に任官し次で正八位に叙せられ同十二年三月尼ヶ崎市高等女學校教諭を奉職同僚並に生徒等より厚き信頼を受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召沼田部隊に屬し機關銃小隊長として勇躍北支方面へ向け征途に就いた。斯くて八月二十五日三間房附近の戦鬪に於ては中隊長山本中尉の指揮下に馬廠河堤防上に占據しありし敵を攻撃し水深胸部に達し又泥濘膝を没する高粱畑を物ともせず第一中隊の攻撃に協力し敵に多大なる損害を與へ忽にして之を撃退した。爾來所屬部

隊は四黨口を突破し陳官屯に集結したが氏は其間常に部下を確實に掌握して戦力を維持し連日の難行路を突破した。

九月九日所屬大隊は丁莊を夜襲せんが爲午後十一時行動を起し丁莊の側背に進出し其先頭部隊たりし第一中隊が將に突入せんとするや敵の發覺する所となり各種銃砲の猛射を浴びるに至つた。附近は汎濫地帯にて水深六十珊に達し加ふるに高粱密生の如地であつた。我が第一線の進出に伴ひ敵前至近の地域は所在に地雷の爆煙濛々たる有様、氏は斯かる中を勇



躍第一線中隊に跟随し一舉東部丁莊の西北角に進出し次で西部丁莊を奪取せんとしたる時偶々西部丁莊に敵の自動火器健在しありて我が前進部隊を猛射しあるを知るや氏は敵火を冒して射撃陣地を占め此敵に鐵槌的の打撃を加へて之を撲滅し以て大隊の丁莊占領を容易ならしめた。九月二十一日所屬大隊は馬落坡攻撃の目的を以て午後九時中秋の月を仰ぎつゝ豆店を出發したが氏の小隊は尖兵中隊たりし第二中隊に配屬せられ敵前五六十米に近迫せしが敵の發覺する處となりその猛射を受くるに至つた。氏は此時彈雨を冒して速に射撃陣地を占め我尖兵に最も危害を與へつゝありし堆土上の敵を求めて

之に熾烈なる火力を集中し隣く間に之を沈黙せしめ以て尖兵中隊に突撃の機を與へて其一角を占領せしめ以て大隊主力の展開を容易ならしむるを得た。爾後第二中隊は大隊の左第一線中隊となり敵主陣地前約二百米に進出し氏の小隊は依然第二中隊に配屬して戦鬪を續行した。此時敵の掩蓋機關銃は突風の如き猛射を以て第二中隊の正面を側射し來り爲に同中隊の前進は至難となつた。氏は憤然として速に所望の射撃陣地を占め此敵に壓倒的の猛火を浴びせて多大なる損害を與へ同

中隊の攻撃前進を促進した。氏は更に射撃陣地を推進すべく起上つた一刹那無念なるかな敵彈三發の貫通銃創を受け息も絶え々々に「天皇陛下……」と叫び壯烈なる戦死を遂げた。

因に氏は四黨口南方の南開大學に滞在間五六名の敵兵が自轉車にて逃走するを發見し約五百米を單身追跡して之を捕虜として連れ歸へつたが其脚力と剛膽には一隊將兵の驚嘆する所であつた。又夜十一時接敵行動の爲多數の兵を傳馬船に乗せ渡河せんとしたが重さの爲船は動かかなかつた。其時氏は誰か水に入つて船を押し出せと命じたが増水と寒冷の爲一同は躊躇しあるを見て「よし俺が入らう」と素早く軍服を脱ぎ棄て河中に飛び込んだ。兵等は此勇敢さに感激して之に續きて河の中に入り船を押し出す事が出来た。九月十九日の戦闘間部下の中川伍長負傷するや氏は自ら戸板を持來りて伍長を乗せ民家に連れ行き「確かりして居れ、また夜に來るぞ」と慰めその後も部下の容態を氣にして居たとの事で氏は眞の部下思ひで自己の食物さへ空腹の部下へ與へた事も屢々であつた。

氏の剛膽、温情は既に記述せる所に依つても明かであるが氏は亦戦機を察するに慧敏にして指揮能力も極めて優秀であつた。眞に是れ智仁勇兼備の良指揮官であつたが前途有爲の才幹にして忠誠勇武の士を聖戰の半ばに喪へるは痛恨哀悼禁じ得ざる處である。然れども士の戰場に臨むや素より生還を期せざる所氏の芳名は其赫々たる武勳と共に皇軍戦史に輝き其英靈は永世に生きて護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族殊に愛子の將來に限りなき加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 茅野 幸一

温情部下に臨み剛膽機敏敵を壓倒し戦勝の途を拓く

氏は岡山縣勝田郡大崎村の人にして父を兼藏亡母を澤野と云ひ明治四十三年二月二十一日に生れ妻靜子との間に芳朗、雅枝の二愛子を擧げた。性温和にして義務心厚く又極めて同情心に富んで居た。昭和二年三月岡山縣立勝間田農林學校を卒業し勝田郡古野尋常高等小學校に教職を奉じ同五年十二月幹部候補生として岡山歩兵聯隊へ入隊し退營後は久米郡佐良山尋常高等小學校に約四年間又同十一年四月よりは苦田郡高倉青年學校に教員として奉職し地方育英事業の爲心血を注ぎ手腕を發揚して居た氏は昭和九年三月を以て歩兵少尉に任官し次で正八位に叙せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月三十日應召赤柴部隊に屬し栗岡機關銃隊の第一小隊長として勇躍北支戦線へ出征した。北支到着以來連日の猛雨に道路泥濘且連續三日間晝夜兼行の強行軍に諸隊は輓駄馬の斃死するもの多く又食なく水なく疲勞困憊其極に達し落伍者續出する有様であつたが氏の小隊のみは一名の落伍者もなく前進を續けた。是れ全く日頃氏が指導適切殊に部下に優しくかつた徳望の然らしむる所にして小隊の團結は鐵石の如く堅かつた。氏は休止の度毎に爲し得る限り附近より西瓜果物類を買求めては兵に分配し體力の維持に努めて居た。斯くて難行軍を續け八月二十日良王莊に到着した。而かも降雨依然として歇まず夜に入るも附近の銃聲絶えさる中に馬廠方面を撃破すべく諸準備に着手した。翌くれば二十一日良王莊を出發し靜海南方の東邊庄畢庄子の線に向ひ前進し午後三時半部隊命令に依り先づ畢庄子を攻撃する爲鐵道線を中央とし右に第一大隊左に第二大隊を展開し氏の所屬大隊は右大隊の中央後を前進し逐次敵陣地に向ひ近迫した。二十二日午前八時前後果然正面の敵陣地より猛烈なる射撃を浴びせて來た。歩騎兵の斥候傳令は逐次往復頻繁となり大

隊砲前へ！の命令が響き渡る。間もなく我が大隊砲は猛然として火蓋を切つた。續いて尖兵たりし歩兵第三中隊と氏の小隊が敵の猛火を冒して敵前三百米の線に進出して射撃を開始した。彼我銃砲戦は刻一刻激烈を極め全く耳を聳せん許りであつた。氏は此際冷靜沉着克く敵の活動状態を觀察し我に最も損害を與ふる敵機關銃側防機能を求めて猛火を浴びせ壓倒的の穿貫的威力を發揚せしめ突撃の動機を作り激戰數時間の後遂に之を撃破し敵を南方に敗走せしむるに至つた。



所屬部隊は息つく間もなく直ちに東邊庄の敵陣地に對し攻撃を開始した。所屬中隊は依然第一大隊の中央に氏の小隊は中隊の中央に展開し泥濘膝を没する泥畑に於て敵陣地目かけて猛射したが地形困難なる上に敵の熾烈なる斜射側射を受けて死傷者續出するに至つたが氏は部下を叱咤激勵一意攻撃前進して敵前百五十米の線に到達し敵偵察中敵彈飛來胸部に貫通銃創を受けて打倒れ「ヤラレタ」と無念の齒がみをなしつつ軍刀を杖に立上り二三歩前進したが力盡き再び打倒れ 天皇陛下萬歳と息も絶え絶えに奉唱した。傍らに在りし二三の部下は駆け寄つて手當を施し力づけたが幽かに「後を頼む」と唯一言を名残とし悲壯の戦死を遂げた。所屬部隊は氏等の尊き犠牲に依り攻撃前進容易となり二十三日午前七時五十分東邊庄の陣地を奪取するを得た。

氏は温情以て部下を率ゐて其の間克く戦機を看破して勇猛果敢機宜に適する射撃陣地を占領せしめ射撃目標の選定並に射弾觀測共に適切にして至大なる威力を以て敵を壓倒震駭し以て戰勝獲得の素因を與へた。寔に是れ皇軍機關銃指揮官の模範にして克く歩兵大隊戰鬪の骨幹たる重任を全うしたるものである。然るに聖戰の初期に早くも此良指揮官を喪へるは痛惜哀悼禁ずる能はずと雖氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝き芳名は千古に語り傳へらるべく英靈亦永世に生きて護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇運を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族殊に二愛子の前途に限りなき佑助を垂るることであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳五等功五級 中村 徳次

至誠一貫責任觀念旺盛なる擔架中隊長

氏は佐賀縣佐賀郡北川副村の人にして亡父を嘉七亡母をマサと云ひ明治二十六年十月五日生れで妻アサとの間に正俊、文子、宏行、保の四愛兒がある。資性温順謹嚴能く人を容るゝの雅量あり。明治四十一年三月川副高等小學校を卒業し爾後農業に従事し大正元年十二月現役志願兵として歩兵第五十五聯隊に入營し熱心軍務に精勵翌年十二月歩兵上等兵に進み大正三年八月日獨戰爭に出征青島攻撃に参加し此の間歩兵伍長に任ぜられ青島攻略後は同地守備獨立歩兵第六大隊附となり大正五年五月凱旋歩兵第五十五聯隊に復歸し功に依り勳七等に叙せられ青色桐葉章を賜はつた爾後累進して大正十四年五月歩兵特務曹長に任ぜられ歩兵第七十三聯隊附に轉じ同年十一月勳六等に次いで昭和四年十月從七位に叙せられ昭和七年五月歩兵少尉に任官豫備役となつたが歸郷後は泰星中學校教諭教師となり生徒の教養心身鍛錬に従事した。氏の學校に服務するや規律嚴正諸事悉く自ら實踐範を示し指導懇切宛も嚴父慈母の如く緩嚴宜を得上下の信望を一身に集めて居た。

支那事變起るや昭和十二年九月應召し牛島部隊官地部隊中村衛生隊に編入せられ擔架中隊長として勇躍中支方面への征途に就いた。而して十一月五日杭州灣に敵前上陸を敢行し爾後金山嘉善嘉興湖州杭州の各戦に擔架中隊長として連日連夜危険困苦を排し部下を激勵して傷者の收容に任じ以つて所屬部隊の迅速果敢なる轉戦追撃に支障なからしめた。十二月二十日氏の中隊は桑名支隊に配屬せられ黃湖（木朝豆）及富陽攻撃の爲前進した。支隊の前進路は急峻なる山岳地帯にして其の行軍の困難は名狀し難きものがあり二十三日黃湖附近戦闘の際は衛生隊は人馬共に疲勞困憊して居たが戦闘開始せらるゝや氏は部下を激勵し山岳地帯敵火の間を勇敢機敏に活躍して傷者を收容し而して所屬支隊は息つく暇もなく敵を急追するや氏は傷者を敏速處理して支隊に追及し支隊は續いて二十五日富陽附近の敵を攻撃した。此の攻撃には氏は傷者の大を豫想し支隊が攻撃を開始するや氏は敵火を冒して馬を走らし地形を偵察して適時綱帶所を開設せしめ自ら擔架隊を指揮して第一線に進出機を失せず忽ち七十餘名の傷者を收容し其の加療に遺憾なからしめた。斯くて敵を撃攘した



支隊長は更に富陽北方千米附近に於て錢塘江を敵前渡河して攻撃すべく決心し氏に衛生隊爾後の行動に付指示を與へた。氏は此の渡河作戦に於ける衛生隊の活動甚だ困難を伴ひ錢塘江畔鹿山附近に至り親しく自身地形殊に渡河點並に前岸敵情を偵察して居た。然るに午後一時三十分頃對岸の敵より狙撃せられ惜しくも頸部に貫通銃創を受け名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏軍隊に在つて心身を鍛鍊修養する事二十有餘年、歸郷するや多年修養したる軍人精神を以つて率先垂範子弟の教養に努め其の至誠は上下の信頼を一身に集め。出で、聖戦に従ふや其の責務の重大なる事を憂慮し杭州灣上陸以來殆ど不眠不休あらゆる困苦缺乏と戦ひ危険を冒して敏速適切に活躍し其の努力熱誠に依つて救はれたる傷者は蓋し鮮少なるものではなかつた。之が爲氏の戦死の報傳はるや部下將兵は慈母を喪ひたる如く悲み衛生隊長宮地中佐は遺族に衛生隊の至寶を失つたと通信して居る。以つて氏の徳望如何に高かりしかを察知し得る次第である。戰場に於ける衛生隊の活動は第一線將兵の如く華々しきものではない。然かし其の勞苦と危険は決して夫れに劣るものではない。其の責務を思ふ時寧ろ一層の勇氣と忍耐を要するものがある。今や聖戦の中途氏の如き勇士を喪へるは洵に痛恨の極みである。然かし衛生隊中隊長として樹てたる功績は赫々として皇軍衛生史に牢記せられ其の芳名は千古に薫り英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守り又一家の守護神として四人の愛子の奮勵と氏の遺志繼承を照覽し尊き佑助を垂るゝであらう。氏は戦死の日歩兵中尉に進級し次いで勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 村山 太一
剛勇の將校斥候太原城角に一番乗して戦勝の端を拓く

氏は新潟縣刈羽郡柏崎町の人にして父を福次郎亡母をスミ子と稱し明治四十一年六月二十七日に生れ妻文江との間に長女千枝子長男俊雄次男正治の三愛子がある。性寡言にして徳義心に厚く信義を重んじ特に責任觀念強く一面勇氣潑刺たるものがあつた。郷里の小學校を終へて群馬縣立前橋商業學校に學び昭和二年三月卒業したが在學中は或は野球部主將とし

て或は強打選手として地方球界に名聲を博した事もあつた。

昭和二年十二月歩兵第二聯隊へ入營し幹部候補生となり同三年十一月除隊となつた。爾後長男たる氏は家業の酒造業に従事し傍ら在郷軍人分會や青年學校等のため熱心に盡力してゐたので村民一般の風評も良く大いにその前途を期待されてゐた。昭和七年三月歩兵少尉に任官し益々郷黨の信望を集め翌八年一月居村在郷軍人分會副長に、同十年一月には分會長



に推舉せられた。其の間實業補習學校體操科並に青年學校教練科主任指導員を囑託されて居たがその指導振りには熱心且つ厳正にして適確なる半面常に温情を以つて接してゐたので分會員や生徒の敬仰する處となり自然上司にも認められて居た。又郷黨の間に不幸災厄等を生じたる場合には必ずその家族を訪れて之を慰問し或は陰に後援する等の陰徳を施してゐたが之等の陰徳は氏の戦死後それらの家族より公表され、初めて一般の知る所となり氏の人格に一段の光彩を添へたのであつたがその義侠的精神こそは實に氏の人となりを知るに十分である。

昭和十二年支那事變勃發するや間もなく在滿部隊に應召九月同地に到りしが暫くして氏は既に北支に出動中の猪鹿倉部隊森中隊に追及を命ぜられ十月下旬氏が所屬中隊に到着せる時は所屬隊は南庄頭附近に堅固に陣地を占領しある敵を攻撃中にして而かも多數の死傷者を生じ苦戦中であつた。氏は直ちに第一小隊長として第一線に至り苦戦中の部下を激勵し奮戦克く努め部下又新鋭なる氏の到着に志氣愈々昂り連日連夜不眠不休の戦鬪を續けさしも頑強の敵も十一月三日明治節の

佳節拂曉近き頃退却を開始した。此の時氏は將校斥候長として退却する敵に尾し更に迂回して敵中に潜入し貴重なる情報を齎らし所屬隊爾後の行動に資する所大なるものがあつた。之れ實に氏の輝かしき初陣であつたのである。

次で十一月四日太原城攻略の目的を以つて更に行動を起し所在の敵を撃破急追しつゝ前進し愈々十一月八日を期し太原城の攻撃を決行する事となつた。氏は依然森中隊第一小隊長として當日午前中は將校斥候となり太原城西北角望樓前の地形並に破壊口開設の状況を具さに偵察し大隊長の攻撃計畫策定の爲め有益なる資料を提供した。斯くて午後一時友軍飛行機の爆撃と我が砲兵の掩護射撃の下に愈々攻撃前進を開始した所敵は城壁上より或は望樓より雨霰と銃砲火を浴びせて來た。我が軍は之等猛火を物ともせず躍進亦躍進遂に敵近く迫り城壁前の胸をも没する水濺を強行徒渉し更に地雷地帯を突破し城壁破壊口より突撃を敢行した。當時氏は小隊の先頭に城壁上に駆け上り其の一角を占領して抵抗する敵二名を斬り同地を確保せんとする刹那敵は無數の手榴弾を投じ或は城壁の銃眼より狙撃を行ひ防戦最も努めた。此の時氏は敵の投ぜし手榴弾の爆裂により可惜春秋に富める身を以つて太原城頭の華と散つたのであつた。

本戦鬪に於て氏は斥候長として有利なる情報を部隊長に提供したるのみならず攻撃前進に方つて隣接大隊に先んじて勇猛果敢に突撃し城壁上に達して敵の心膽を奪ひたる豪膽なる動作は敵を此の方面に牽制し爲に隣接部隊の城壁占領を容易ならしめ延て大隊の同地占領の端緒を開きたるものであつて其の奮戦力闘猛烈果敢なる突撃は實に壯烈を極め鬼神をも泣かしむるものがあつた。今や氏の颯爽たる雄姿に接する能はずと雖も七生報國の信念に生ける氏の英靈は不滅に存在して尙も皇國を守護すべく又最早や其の温容を以つて愛子に接する能はずと雖も慈父の愛は愛子の心に將た身に生きて尙も其の前途に尊き加護を垂るべきは勿論父祖に對して大なる孝行を完成したものと謂ふべきである。氏の功績は正に皇軍戦史に輝き其の名は永遠に語り傳へて軍民の鑑と仰がるゝであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し次で従七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉従七位勳六等功五級 安達 正三

敵側防機關銃陣地を夜襲奪取し保定城攻略の端緒を拓く

氏は茨城縣西茨城郡笠間町の人にして實父を鈴木常吉實母をあきと云ひ大正元年九月三日に生れ後安達安尾同せいの養子となり未だ獨身であつた。資性濃厚篤實にして明朗人に親まれた。大正十四年三月兩引尋常高等小學校を卒業し續いて下館商業學校に入り昭和五年三月卒業直ちに東京市川崎貯蓄銀行に入り孜々として精勵遂に擧げられて同銀行寄宿舎々監を命ぜられ衆望を擔つて居た。昭和七年十二月幹部候補生として歩兵第二聯隊に入營し熱心軍務に精勵して翌八年十一月除隊し次いで歩兵少尉に任ぜられ除隊後再び銀行に勤めて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召し石黒部隊小隊長として北支へ向け征途に就いた。北支に上陸するや該地方は稀なる豪雨の直後にして各地氾濫出水し道路は泥濘膝を沒し軍行動の困難は言語に絶する狀況であつた。所屬部隊は上陸直ちに其の難行軍を續け平漢線に沿ひ大黃堡に集結し以て保定攻撃の爲行動を開始した。此の時氏の所屬大隊は同日夜所屬兵團司令部を護衛しつゝ拒馬河の線に向つて前進し氏の中隊は所屬大隊と離れ機關銃中隊及大小行李を掩護しつゝ永定河を渡河し比公田に至り大隊に合すべく前進した。當時我が軍の前進は急速にして而かも泥濘膝を沒する難路は終に後方補給機關の追隨を困難ならしめ爲に第一線部隊は途上甘藷と粟粥とに飢餓を忍びつゝ前進する有様であつた。此行軍間氏は困苦と缺乏に堪へ部下を激勵し小隊長として克く其の任を全うした。斯くて十六日氏の中隊は機關銃一小隊を附せられ前衛

の右側衛となり拒馬河の線を出發し琢州南方松林居に向ひ急進し途中深海塘附近に一部の敵を驅逐し次で二屯附近に於て敵迫撃砲の集中火を受けしも遂に翌十七日午前二時松林居驛に進出し息つく暇もなく續いて大册河の線に向ひ連日不眠不休敵を急追し特に二十日姥村への追撃には氏は尖兵長として疲勞困憊其の極に達せるに拘らず克く部下を掌握激勵し尖兵として其の重任を完遂した。明くれば九月二十一日保定攻撃は開始せられた。氏の所屬石黒部隊は此の石頭村西南方高地



を攻撃したが敵陣地は頗る堅固頑強にして遂に晝間攻撃を断念し夜襲を以て奪取すべく其の夜正子行動を開始した。氏の中隊は第一線となり全員決死白禪を肩にし肅々として前進した。其の攻撃前進地區は濕地にて行進頗る困難動々もすれば敵に發見せられんとする狀況であつたが將兵一同黙々として潜行遂に午前二時三十分全身ずぶ濡れとなり大册河を渡渉し右岸に取りついた。右岸に取りつくと敵陣地は目前である。夢から醒めた敵は一齊に猛射を浴びせて來た。

就中中隊の左前方にある敵の掩蓋機關銃は我が大隊を側射し爲に我が大隊は死傷相次いで生じ前進頗る困難に陥つた。此の時氏は中隊長より該側防機關銃を奪取すべき命令を受けた。氏は直ちに部下小隊を率ひ敵機關銃目がけて前進した。然るに敵陣地直前には幅五米深さ三米半の水濠を廻らし要所には鐵條網を設け小隊は直ちに突入する能はず。斯くするうちに小隊内死傷續出する有様であつた。氏は夜暗と地形を巧に利用して敵の左側背に廻り遂に濠を越へ茲に突撃を準備した。當時氏の小隊は二十名に足らざる狀況であつた。此の時敵の榴彈は氏の近くに落下炸裂し氏は左大腿部に又傍にありし長谷川伍

長は右腕に其の破片創を受けたが氏は自ら纏帯し直ちに突撃せんとせし瞬間一部の敵は逆襲して来た。氏は軍刀を振り翳し忽ち敵二名を斬斃したが敵の一弾は氏の頭部を貫通し竟に其場に打倒れた。長谷川伍長は直ちに看護兵々と叫ぶや氏は之を聞き「カマワズ進メヤ」と連呼し終に壯烈なる戦死を遂げた。氏の戦死に小隊は其の仇討にと猛然敵機關銃陣地に突入遂に之を奪取し正面所屬隊又突撃を敢行し二十二日午前六時敵の據點たる石頭村西南高地を奪取し之を動機に敵は逐次崩潰遂に二十四日我軍は保定城を奪取之に入城するに至つた。

噫氏戦線に立つて尙三旬に滿たず竟に保定攻略の華と散る。洵に聖戦の初期斯る勇士を喪へるは痛惜の極みである。然かし士は百戦功なき輒全を耻ぢ一戦功を奏して名を遺すに如かず。氏が其の初陣に一身を犠牲にして敵の側防機關銃を奪取潰滅したる事は所屬石黒部隊の石頭村附近夜襲成功の一大要因を爲したるものにして其の赫々たる武勳は皇軍戦史に牢記せられ其の勇名は千古に語り傳へられ又其の英靈は不滅に生き護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族に尊き光と佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進められ次いで從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級 笠原萬治

指揮技能優秀にして克く戦勝の途を拓く

氏は兵庫縣揖保郡神岡村の人にして亡父を豊治母をてつと云ひ明治三十九年三月二十三日に生れ妻コトエとの間には未だ愛子は授からなかつた。資性剛健質實にして責任觀念に富み又同情心厚く部下を遇するや眞に骨肉の情を以てし上下の

厚き信頼を受けて居た。大正八年三月神岡小學校尋常科を卒業し昭和二年一月現役兵として姫路歩兵聯隊へ入隊し間もなく滿洲警備の爲遼陽に派遣せられ同年七月下士官候補者として熊本陸軍教導學校へ分遣となり同校卒業歸隊後伍長に任官した。斯くて昭和六年十二月有線通信隊員として再び滿洲に派遣せられ翌七年九月には選拔せられて關東軍無線通信教習所に入所したが氏は頭腦明晰にして優秀なる成績を収め所屬兵團の活躍に貢献する所甚だ多かつた。昭和九年三月定期叙

勳に依り勳八等瑞寶章を賜はつたが次で戦功を以て勳七等青色桐葉章をも賜はり引續き精勵恪勤累進して歩兵准尉に任ぜられた。

支那事變起るや沼田部隊米澤中隊に屬し勇躍征途に就いた。而して其北支到着後は中隊指揮班長として三間房四党口附近の戦闘に参加し次で陳官屯の守備勤務に就いたが克く中隊長を輔佐し連日連夜に亘り奮勵努力中隊の任務遂行に寄與する所多大であつた。

九月七日より馬廠附近の戦闘に於ては所屬中隊は大隊の右第一線となり九月九日午後十一時行動を開始し十日午前四時四十分より丁莊及び滕莊子の敵陣地に向ひ攻撃を開始した。氏は依然中隊指揮班長として周到なる着意を以て部下人員を指揮掌握し適時適切に中隊長の戦闘指揮を輔佐し遂に第一線陣地たりし丁莊を奪取するを得た。此時右第一線たりし第三小隊長負傷するや氏は同小隊長代理を命ぜられたが間髪をも容れざる機敏さを以て同小隊を指揮掌握し何等戦闘遂行に支障なからしめ斜左前方の高梁畑に敗走せる敵より猛烈なる側射を浴びつゝ泥濘地城を巧に部下を誘導して第二線陣地を奪取し更に勇躍獨斷第三陣地たる滕莊子北側に向ひ進出しつゝ敵の左側背を衝き大



なる脅威を與へ以て中隊主力をして最も損害を少からしめ之れが占領の目的を達成せしめた。

九月十九日豆店附近の戦闘に於ては中隊右第一線小隊長として午後四時三十分より攻撃を開始し敵前三百米に進出せる時中隊長より敵の左側面より攻撃すべき任務を與へられた。氏は欣然として敵前至近の距離に於て障礙物を構築しある高粱畑而かも泥濘膝を没する困難なる地區加ふるに敵彈雨飛の下に巧に地形を利用し迅速果敢に所期の地點に到着し中隊主力と相俟ちて猛射を加へた。敵は意表を衝かれて動搖し乍らも勇敢に應射し概ね正確なる射撃を浴びせて來たが氏は克く部下を掌握し中隊主力に先んじ胸迄浸る水濠を渡河し敢然豆店の敵陣地に突撃して主力の攻撃を容易ならしめ遂に攻撃前進開始以來僅かに一時間にして該陣地を攻略するに至つた。當時氏の小隊の攻撃たるや頗る猛烈果敢なりし爲遁げ遅れたる敗殘兵は小隊正面のみにても數十名を算し或は家屋内或は屋上に於て頑強なる抵抗をなし其亂射亂撃の爲危険甚しかりしも氏は極めて沈着適切なる部署に依り一名の損傷者をも出さず完全に之を掃蕩するを得た。

九月二十一日滄縣附近の戦闘に於て所屬中隊は午後十一時展開直ちに攻撃前進に移つたが氏の小隊は中隊の豫備隊となり左翼後を前進中であつた。時恰も敵の正面射及び斜射猛烈にして第一線小隊の死傷者續出せるも氏は克く地形を利用し第一線近く跟随し突撃の機迫るや氏の小隊は左第一線に増加を命ぜられた。氏は直に第一線に増加し敵前三十米に前進し中隊に最も危害を與へありし斜左前方の敵の重機銃に對し猛射を加へ之れを制壓中右前膊部に貫通銃創を受けた。爾されど氏は之に屈せず將に突撃に移らんとする時第二彈の爲再び右前膊部に貫通銃創及胸部に擦過銃創を受け打倒れた。爾後野戰病院に收容されたが志氣頗る旺盛にして實兄宛に左手を以て「前略奮戰奮闘の後負傷す本日右腕を切り落す豫定なり生命別條なし軍人として奉公を盡せり本懷ならずや元氣旺盛安心せよ」との書面を認めたほどなりしが惜しい哉容態急變し九月二十九日聖戰の人柱となつた。

氏や夙に盡忠報國の志に厚く温情部下に徹し慧眼克く戰機を看破し剛勇果敢必勝を期す斯くの如きを以て上官並に部下の全信頼を受け各戰偉功を奏した。寔に是れ皇軍指揮官の鑑とすべきである。然るに此一戰に氏の如き有爲の幹部を喪ひたるは眞に痛恨に堪へざる所である。さり乍ら氏の功績たるや滿洲事變に將た今次の聖戰に皇軍戰史を飾り其の芳名は百世に語り傳へらるべく其英靈や亦不滅に生きて護國の神と仰がれ其靈徳は尙も皇國の前途並に一家の將來に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵少尉に進級し正八位に叙せられ次で勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級 田 伏 精 治

敵逆襲部隊を引寄せ反撃して中隊突撃の動機を作る

氏は和歌山縣那賀郡東野上町の人にして父を織之助母をタミと云ひ明治三十九年五月十七日生れて妻久子との間には未だ愛兒に恵まれなかつた。資性剛毅誠實人に接し親切にして堅忍不撓の精神に富み一度決心すれば必ず遂行せざればやまざる概があつた。大正八年三月東野上尋常高等小學校を卒へて更に和歌山縣立那賀農藝學校に學び大正十一年三月卒業爾後家にありて父を助け養蠶に従事し尙青年學校に學び在學間一日として缺席せし事なく熱心精勵であつた。

昭和二年一月徴兵として朝鮮歩兵第七十七聯隊に入營し下士官を志願し採用せられ下士候補者として豊橋陸軍教導學校に入校翌三年七月卒業歸隊し歩兵伍長に任ぜられた。昭和六年滿洲事變勃發するや氏は所屬隊と共に出勤し各地の討伐警備に任じ功により勳七等に叙せられ青色桐葉章を賜はつた。氏は平素部下の指導懇切にして寛嚴宜を得上下の信望厚く昭

和十年十二月には下士官勳功章を授與せられた。氏は又射撃術に長し射撃徽章を授與せられ逐次果進して歩兵准尉に任ぜられた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや間もなく鯉登部隊羽島部隊黒岩中隊に屬して出征し北支に到着するや七月二十六日郎坊にありし我が軍は突如敵の攻撃を受け乃ち氏の所屬隊は直ちに之が救援を命ぜられた。當時氏は中隊の指揮班長として雨下する敵火を冒し大隊長並に中小隊長間の連絡に任じ熱心中隊長を輔佐して其の指揮を圓滑容易ならしめ其の戦勝に大なる貢獻を爲した。



七月二十七日所屬隊は更に南苑の敵を攻撃する爲め北進し黄村より三合莊に向け前進した。然るに途中行宮に於て敵と衝突し中隊は直ちに之れを攻撃した。此時氏は依然指揮班長として常に中隊長の傍にありて其の命令を各小隊長に傳へ又時々刻々變化する敵情に注意し適時之を中隊長に報告し其の指揮を容易ならしめて居たが逐次前進して敵前五六百米突に至るや敵火愈々猛烈となり我軍の死傷は續出し前進頗る困難となり苦戦の情態に陥つた。而して午後六時三十分頃第一線第二小隊長服部准尉が重傷を受けて倒るゝや氏は直ちに第一小隊長代理を命ぜられ第一線に立ち小隊の指揮を取つた。斯くして日没に至るも敵の銃砲火は益々激烈となり凄惨を極め敵の一部は小隊の正面に向ひ逆襲に轉じて來た。勇敢剛毅なる氏は泰然として此の時とばかり敵を引き寄せ小隊をして一舉猛射を加へ殆ど敵を潰滅した。然るに敵は健氣にも更に新鋭の部隊を以て再び逆襲して來た。氏は

益々部下を激勵し敵を一層近距離に引き寄せ猛射を加へたる上突撃して敵を蹂躙すべく待構へ敵の近接と共に急襲的猛射を加へ敵の斃るゝ者算なく其の機に氏は奮然立ちて敵を潰滅すべく小隊に突撃を命じた。然るに其の一瞬敵の一弾は無念氏の胸部を貫き壯烈なる戦死を遂げた。然れ共氏の突撃號令と共に小隊は勇敢に敵中に突入し中隊又突撃に轉じ遂に敵を潰滅して再學を斷念せしむるに至つた。

噫氏内にありては慈母の如く出でて戦線に立つや鬼神の如く殊に再度の敵逆襲に沈着勇敢適切なる指揮を以て之を潰滅し中隊突撃の動機を作りし事は洵に偉大なる殊勳である。此の如き幹部を聖戦の初期に表へるは痛惜の極みであるが士は百戦功なき瓦全を耻ぢ一戦功を遂げて名を遺すに如かず。氏華北の華と散りしも其の赫々の武勳は青史に輝き其の勇名は永へに語り傳へられ忠魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守護し遺族に尊き加護照覽を垂るゝであらう。氏は戦死の日歩兵少尉に任ぜられ正八位勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功五級 武 舍 正 利

勇敢機を見るに敏なる機關銃小隊長

氏は長野縣北佐久郡布施村の人にして父を宇三郎母をむらじと云ひ明治三十三年五月十日生れで妻ハツヨとの間に和芳、珠恵、眞の三兒がある。性温順にして誠實義務心に厚かつた。大正四年三月布施尋常高等小學校を卒業し爾後家業に精勵して居たが大正七年十二月徴兵として歩兵第五十聯隊に入營し熱心軍務に精勵して八年十二月上等兵に進み翌九年四月西伯利亞事變に出動し折柄の嚴寒を冒して重要な任務を果し十年四月衛戍地に凱旋した。此の間下士志願を爲し果進し

て昭和二年三月には曹長に任ぜられた。斯くて同年四月所屬師團は滿洲に派遣せられ氏も亦之れに屬して南滿の守備に服したが間もなく同年七月撰ばれて仙臺陸軍教導學校附に轉じ下士候補者の教育に當り昭和六年二月には歩兵特務曹長に任ぜられ爾來三年有餘學生教育に盡瘁し昭和九年五月豫備役となつた。

氏郷に歸るや帝國在郷軍人會分會長に推され又青年學校の指導員を委囑せられて分會員青年の指導に献身的努力を爲し

殊に氏の高潔なる人格と終始一貫せる至誠とは郷黨一般に淳良なる感化を與へて一村敬愛の的となり。昭和十一年四月には更に村收入役に推され公共の爲益々盡す所があつた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召し遠山部隊に編入せられ機關銃隊附となり勇躍北支に出征した。時正に盛夏酷熱灼くが如く加ふるに當時該地方は未曾有の豪雨に到る所氾濫し道路は泥濘車軸を没し部隊の行動は名狀し難き困難を極めたるも氏は彈藥小隊長として部下を激勵し困苦と缺乏とを克服して支障なく行軍を續け九月十六日よりは塙頭嶺附近二十一日よりは大冊河畔黃村附近の攻撃に参加し連日連夜殆ど不眠不休敵火を冒して適時彈藥を補給し中隊の戰鬪を遺憾なく遂行せしめ更に敵を追撃して九月二十三、二十四日には保定附近の殘敵を掃蕩し次で所屬大隊が列車に依り敵を追撃するや氏は大隊の馬匹及車輛指揮官として連日連夜の強行軍を以て故障なく李家坡に於て所屬隊に追及した。此の強行軍に於ける氏の苦心と努力とは蓋し容易ならざるものであつた。

十一月四日氏の所屬部隊は西八里庄附近の敵陣地を攻撃した。此の時氏は左大隊の機關銃隊第二小隊長として参加し左大隊に協力し三分庄の敵第一線陣地攻撃に當つた。敵は頑強に抵抗せしも我が神速果敢の攻撃にさしもの第一線陣地は遂に我が軍の占領する所となつた。大隊は息つく暇もなく續いて敵の第二線陣地たる寺溝村に向つて攻撃した。我が砲兵は猛烈に敵第二陣地に向つて砲撃を開始し大隊は此の砲兵火力を利用して包圍的に攻撃前進した。氏の小隊は殆ど第一線歩兵と同線に前進し我が大隊の前進を妨害する敵重火器を求めて之を制壓し爲に大隊は敵陣近く肉薄し遂に部落に突入した。大隊が突撃するや氏は之を支援したる後續いて小隊を率ゐて部落に突撃せしに敵は部落内家屋等に據り尙も抵抗を續け其の後方には敵の大部隊あり動々もすれば逆襲に轉ぜんとする状況であつた。之を知つた氏は直ちに部落内空地に陣地を占領して尙抵抗する敵に猛射を浴びせ次いで其の後方敵の大部隊にも亦急襲的猛射を加へ頗る混亂に陥らしめ將に馱載して退却せんとする敵の重機關銃二迫撃砲一門を潰滅に歸せしめた。然るに敵の一部は小隊の左方二十米にある民家の銃眼より小銃機關銃を以て我が小隊を猛射し來りし爲我が方に於ても亦死傷相次いで生じた。是に於て氏は寧ろ此の際正面の退却する敵を潰滅するにしかずと部下を激勵して歩兵部隊と共に突撃前進し軍刀を揮つて眞先に突入し忽ち一人を斬殺し敵兵擾亂退却を始むるや氏は小隊に射撃陣地を指定して愈々射撃を命ぜんとせし利那惜しくも下腹部に貫通銃創を受け倒れた。氏は尙も屈せず匍匐して數尺を前進せしが無念敵の第二弾は再び腹部を貫通し氏は幽かに前へ前へと叫びつゝ竟に壯烈なる戦死を遂げた。然かし氏が鬼神の如き其の靈感を受けた部下機關銃小隊は忽ち陣地を占領して群がり退却する敵を猛射し潰滅的損害を與へ所屬大隊は遂に敵の第二陣地を攻略占領するに至つた。

氏郷にありては在郷軍人青年の指導に至誠献身的努力を致し出でゝ軍に従ふや勇戦奮闘殊に機を見るに敏にして毎戦偉功を奏す。就中所屬隊が三分庄寺溝村附近敵陣地を奪取し赫々たる戦勝を博せしは氏の活躍奮闘に俟つ所頗る大なりと謂

はねばならぬ。噓聖戦の初期此の如き忠勇義烈有爲の小隊長を喪へるは洵に痛惜の極みである。然かし士の戦場に臨むや百戦功なき軀全を耻ぢ一戦玉碎名を遺すに如かず。氏新徳城外の華と散りしも其の赫々たる武勳は皇軍戦史に牢記せられて勇名は千載に轟はるべく又其英靈は不滅に生き護國の神と仰がれ尙も皇國を守護し愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に任ぜられ次いで正八位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功五級 松岡國三郎

忠勇義烈の小隊長、死の直前重傷の血を以て 天皇陛下萬歳と誦書す

氏は香川縣三豊郡財田村の人にして父を今八亡母をチヨと云ひ明治三十八年七月十五日生れで妻ヤエとの間に一子きよがある。資性沈着勇敢豪膽にして部下に對しては温威宜敷を得上下の信望厚かつた。大正七年三月財田中等常高等小學校を同十二年三月豊田農業補習學校を卒業し同十五年一月徴兵として大邱歩兵聯隊に入營翌昭和二年歩兵學校教導隊に編入せられ後下士官を志願し採用せられ果進して同十一年十二月歩兵特務曹長に進級した。此の間昭和十年六月勳功章を授與せられ同十一年十一月には勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや鈴木部隊西田隊に屬し昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後七月二十七日團河村附近の戦鬪に際しては第二小隊長として大隊の左第一線中隊の左第一線小隊を率ひ行宮陣地の東北角に向つて攻撃した。此の攻撃間は屢々單身前進して敵情を搜索し有利なる報告を提出し又敵陣地前三百米附近に於て敵騎二百騎現出するや機を

逸せず的確なる射撃指揮に依り之に猛射を如へて敵七、八十騎馬匹四、五十頭を射殺し殲滅的打撃を與へ又愈々突撃に際しては小隊の最先頭に立ち勇敢に敵陣に突入して奮戦克く努め偉大なる戦勝を博した。次いで七月二十八日南苑の戦鬪に際しては當初大隊の豫備隊たりしが我が第一線中隊が敵の第一線攻略後に於て氏の中隊は右第一線となり兵營内の攻撃を實施した。此間氏は第一線小隊長として勇敢に前進し兵營中央に於て西化方に敗退する敵二、三千を認むるや之に急襲的射撃を浴びせて多大の損害を與へた。又七月二十九日より三十一日に



互る間は北平周辺の掃蕩に更に八月一日より十四日に互る間は長辛店附近の集中掩護に任じ八月二十一日の良郷の戦鬪に際しては小隊長として終始奮勵活躍克く其の任を完うした。其の後九月十五日琉璃河々畔の陣地攻撃に際しては中隊は先づ部隊の展開掩護部隊として前進した。此の時氏は尖兵長として活躍し其の戦鬪に際しては兵團の攻撃重點正面の第一線小隊長として冬庄及房山北側の敵陣地に對し終始勇敢積極に活躍し配屬機關銃と密接に協力して堅固なる敵陣地を攻略し中隊及大隊の戦鬪を有利ならしめた。又九月十七日よ

り十月四日に互る琉璃河々畔より保定を経て沙河の線に向ふ追撃に當りては旬餘に互る先遣大隊の尖兵長として飢餓を凌ぎ各種の障碍困難を排除し殆ど不眠不休にて其の任を完うした。十月五日滹沱河の渡河攻撃に際しては氏は將校斥候長となり午前五時朝霧を利用し裸體となりて游泳河川を偵察し或は便衣を着して敵前五十米附近に迄潛行して敵情を詳細に偵察して有利なる報告を提出し其の後渡河攻撃に當りては大隊の渡河掩護部隊たる中隊の第一線小隊長として白晝敵前強行

渡河を敢行し途中三方面よりする敵機關銃及迫撃砲の十字火を受けながら勇敢なる行動と適切なる指揮とにより中隊長所命の地點に進出し中隊主力の渡河を容易ならしめた。

其の後十月十三日より二十二日に亘る娘子關附近の戦闘を経て引續き二十二日より舊關鎮附近の攻撃開始せらるゝや氏は當初中隊指揮班長たりしが第二小隊長負傷すると共に代りて小隊長となり敵の右側背包圍攻撃部隊となりて敵の三方面よりする十字火中を適切なる指揮を以つて躍進し最後の敵陣地の最右翼脚に達した。此の時敵機關銃は我に猛射を浴びせて來たが氏は九名の決死隊員を編成して該機關銃を破壊せしめ其の機に乗じ二十四日午前七時十分突撃を連呼しつゝ最先頭に立ちて勇猛果敢に突撃し敵右翼の重要據點たる該陣地を奪取し以つて前進不能に陥りありし第四中隊正面の敵陣地を猛射した。敵は大に脅威を感じ氏の小隊に機關銃の集中火を浴びせて來た。之が爲め氏は忽ち身に二彈の貫通銃創を蒙り其の場に倒るゝに至つた。然し剛氣の氏は再び起き上り指揮せんとせしが咽喉の負傷の爲め聲出でず鮮血は見る間に軍服を眞紅に染むるに至つた。氏は半紙十數枚を取り出し從容自若端坐して先づ皇居を拜し次で進する血潮を以つて一枚一字宛逐次 天皇陛下萬歳と六枚に謹書し之を終るや最早氣力も盡きて絶命壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し氏の勇敢なる敵陣地奪取は敵の全陣地の瓦解を招來し大隊戦勝の因を爲した。

氏や盡忠至誠、其の進する所毎戦剛勇果敢、かゝる勇將の下素より弱卒なく部下亦舉止一體、或は斥候として重要報告を提出し或は小隊として戦勝の端を作る。其の舊關鎮の一戦に至りては勇猛果敢敵の心膽を寒からしめて遺憾なく。死期迫るも從容自若 畏くも血を以つて萬歳を謹書す。其の忠烈鬼神をも哭かしむるものがあつた。後日時の師團長より「眞に軍人の龜鑑」として表彰状を授與せられたる宜なりと謂ふべきである。噫聖戦中途として得難き忠勇の指揮官を喪ふ痛恨禁せずと雖も其の燦然たる武勳と忠勇義烈の示範とは千載の下青史を飾り又不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も出で

ゝは聖戦を守護し入りては愛兒の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に進級し次で正八位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功五級 青山 滋

積極勇敢模範的小隊長屢々難局を打開す

氏は岡山縣英田郡江見町の人にして父を道上治郎右衛門母をてる養父を春次郎養母をなつと云ひ明治三十八年三月二十日日生れで妻秋子との間に一子馨子がある。資性質實剛健典型的武人氣質の人にして爲めに部下皆克く信服してゐた。郷里の高等小學校卒業後銀行に勤務し入營時に至つた。

大正十四年徴兵として龍山歩兵聯隊に入營し下士官を志願し熱心精勵果進して昭和十二年准尉に進級した。此の間昭和九年十月勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや森本部隊の佐伯隊第一小隊長として昭和十二年七月十六日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後七月二十八日南苑の戦闘には右第一線小隊長として午前五時戦闘を開始するや勇猛果敢指揮適切中隊長の意圖の如く前進して敵陣に近迫し愈々中隊長より突撃の命下るや氏は猛火を冒して小隊の最先頭に立ち午前十時遂に敵陣を占領した。續いて氏は直ちに部下を集結し尖兵長として敵を追撃し更に槐房附近の敵に對し第一線小隊長として奮戦同所陣地を奪取した。其の後九月十五日寶店鎮附近の陣地攻撃に際しては右第一線小隊長として午後五時より行動を起し午後六時戦闘を開始し遂次敵に近迫したが日没に入り敵前近く夜を徹して終夜敵情其の他の偵察に努め翌十六日再び攻撃は開始されたが敵は頑強に

抵抗し午後一時二十分頃には左右大トーチカよりする敵の猛射の爲め氏の小隊は左小隊に比し稍前進遅滞した。氏は左右よりの敵の猛射にも拘らず克く部下を掌握して叱咤激勵しつゝ約三百米に亘る棉花畑を決死の勇を揮ひ匍匐を以つて近迫し辛うじて突撃發起の線に進出した。然れども敵陣地の直前状況不明なりし爲め中隊長も苦慮せる折柄氏は機を失せず斥候を派遣し外濠の幅深、水の有無、障碍物の状況等を偵知し詳細に報告せる爲め中隊長の突撃に關する決心及部署に多大



の貢献を爲し中隊長は午後二時十分突撃命令を下した。氏は此の命令に奮然小隊の前方に躍り出で小隊を率ひ勇猛果敢に敵陣地に突入し自ら敵十數名を斬り而かも機を失せず逃ぐるを急追して約三百米突進し敵潰亂の誘因を爲した。更に十月二十五日水嵐附近の戦闘に際しては再び尖兵長として前進し白沙岩高地を占領し中隊主力の展開を容易ならしめ爾後第一線小隊長として奮戦し次で二十八日石門口附近の戦闘に於ても第一線小隊長として奮戦した。

二十八日午後二時十五分中隊が西郊北端に達するや楡樹園東南方臺地一帯の敵既設陣地而かも三方面より重機關銃迫撃砲等の猛射を受け爲めに小隊の前進意の如くならざるに至つた。當時協力砲兵は勿論協力機關銃も未だ射撃開始に至らず隣接中隊も亦未だ同線上に進出しあらざりし爲め中隊は獨力を以つて此の敵を制壓せざるべからざる状況にあつた。依つて中隊長は豫備隊及左小隊の輕機關銃を部落屋上に集め全火力を以つて敵を射撃せしめ其の掩護に依り氏の小隊をして敵の第一線陣地の高地端に向つて突進を命じた。氏は中隊長の意を體し正面の山脚に向ひ猛火を冒して奮進し逐次死角を利用して階段狀

急斜面の攀登を開始せしが此の陣地奪取の爲には發煙彈使用の必要を認め其の旨意見具申し中隊長亦其の意見を採用して直ちに約十發の發煙彈を敵陣地に發射せしめた。果せる哉敵の狼狽言語に絶し且此の頃協力機關銃も射撃を開始せしを以つて此の好機逸すべからずと中隊長は突撃を令せし所氏は率先々頭に立ちて敵陣に突入し忽ち數名の敵を斬り尙敗走する敵を急追して獨斷第二線陣地に突入した。此の爲めに左小隊の前進は頗る容易となり中隊は午後四時同地を完全に奪取することを得たが敵の第三陣地は意外に近く竟に該陣地よりする敵彈の爲め氏は惜しくも左上胸部に貫通銃創を蒙り茲に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

所謂勇將の下には弱卒なく氏の小隊を指揮するや毎戦常に陣頭に立ち指揮的確掌握確實小隊の全戦力を發揮して餘す所なく或は慧眼戦機の看破となり或は獨斷果敢の突入となり或は積極難局の打開となり或は機宜の意見具申となり悉く中隊戦勝の誘因となる。中隊長の遺族に宛てたる書面中「特に青山小隊長の阿修羅王の如き奮戦は之を浪花節に作り之をレコードに吹込み廣く民衆に傳へる計畫を立て申候」とあり。かくの如きは是れ身命を君國に献げ斃れて後已む決意の發露、軍人精神の顯現とも謂ふべきである。聖戦初期にあたら斯の如き有爲の指揮官を喪ふ洵に痛恨極まりなしと雖も其の燦たる武勳と勇猛果敢の戦績は千載の下青史に輝き其の芳名は萬古に流れて盡きぬであらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に進級し次で正八位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級

姫野龜太郎

立志傳中の老少尉中支戦線に奮戦玉碎す

氏は大分縣別府市大字別府の人にして父を金次郎母をヒナ養父を次九郎養母をカズと云ひ何れも既に死歿した。氏は明治二十三年二月六日生で妻ノブとの間に誠一、純也、純壯、綾子、彌生、須磨子の六子があり家庭圓滿であつた。資性濃厚篤實謹嚴にして剛毅沈着、部下に對しては寛嚴宜しきを得特に温情厚く慈父の如く敬慕せられてゐた。明治三十八年三月大在尋常高等小學校を卒業し其後村役場の給仕となり次で書記に進み入營時に至つた。明治四十三年十二月徴兵として歩兵第七十二聯隊に入營し下士志願を爲し採用せられて熱心精勵大正元年十二月歩兵伍長に任官爾後累進して大正十一年二月歩兵特務曹長に進み同年六月待命となり同年八月豫備役に編入せられた。此間大正八年十二月勳八等に叙し瑞寶章を又大正七年師團司令部附として浦潮派遺軍に従軍せる功に依り勳七等に叙し青色桐葉章を賜はつた。歸郷後は小資本を以て無經驗なる燃料商を營みしが一意奮勵努力遂に成功して一流の商店となり姫野煉炭合資會社を設立するに至り誠に立志傳中の人であつた。其人格識見は内外の信頼篤く燃料商組合長別府市石炭同業組合長別府市行合區役員に推舉せられ又一方帝國在郷軍人會別府市聯合分會野口分會長を二期勤め模範分會長として名聲を博する等社會公共の爲盡瘁し其功績顯著なるものがあつた。

支那事變起るや昭和十二年八月二十七日大分歩兵聯隊補充隊に應召後備歩兵第四大隊第四中隊に編入せられ中隊指揮班長となり愈々其出陣するや愛兒を順次電話口に呼出し將來を論して訣別し心残りもなく九月七日勇躍征途に就いた。中支戦線到着後九月十日より十七日に亘りては獅子林砲臺の警備に又十月七日より十一月十三日に亘る間は羅店鎮附近の守備に任じ粉骨碎身以て中隊の任務達成を容易ならしめ。次で十一月十三、十四日劉河鎮附近の戦闘に際しては克く隊長を輔佐し最も速かに該地を占領せしめ其後十一月十五日より十二月十二日に至るまで軍司令部の警備に任ずるや大場鎮、古里村、常熟、蘇州、無錫、句容、湯水鎮等の各地に於て日夜精勵努力中隊長を輔佐し以て中隊の任務達成に遺憾なからしめた。



十二月十三日所屬大隊は軍司令部の直接警備中午前十時三十分南京方面より敵兵二三千襲來しつゝありとの情報に接した氏は中隊長に従ひ午前十一時三十分湯水鎮を出發河野大隊長指揮下に中隊は大隊の第一線となり午前十一時五十分狼山を占領し時恰も甘家山西南點線路を前進中の敵を攻撃した。午後零時四十分我有効なる射撃に依り敵は算を亂して狼山西方一五五高地北側方面に退却を開始した。午後零時五十分氏は中隊の先頭に立ち指揮班員等を指揮し勇敢にも退却する敵を追撃し狼山北側凹地に於て敵の敗殘兵と交戦之を撃滅し更に攻撃前進した處兩側の茅の中より突如敵重機關銃の猛射を受け惜しくも頭部に貫通銃創を蒙り竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。大敵急襲と聞き氏と共に湯水鎮を出發したる望月伍長は當時を回想して曰く「急遽狼山に向ふ途中氏は聲高らかに此度こそ俺が愛刀を試す時だ支那兵の奴を斬つて斬りまくつて見せるぞと元氣潑刺其勇姿は今尙眼前に髣髴たり」と如何に氏が勇躍戦線に赴きしかを窺ひ知るゝのである。かくの如き氏等の勇戦力闘に依り大隊は戦死十六戦傷三十名を生したるも敵に多大の損害を與へ遂に遺棄死體のみに

ても數百捕虜百餘名兵器彈藥多數を遺して潰亂するに至らしめた。斯くて大隊は十四日午前七時湯水嶺北方高地を確保することを得た。此戰開始るや長くも殿下より御賞詞を賜はり十二月二十一日慰靈祭執行さるゝや十八柱の英靈に對し殿下親しく御參拜あらせられた。

因に氏の妻は戦死の報に接するや「之より亡き主人の遺志を繼ぎ子供達の養育に努め御國の御役に立つ人間をつくる決心です」と述べて居た。

氏は實に立志傳中の人にして其の郷に在るや社會の中堅郷軍の先達たり。出でゝ軍に従ふや素より生還を期せず中隊の指揮班長として一意隊長を輔佐し其戦力を遺憾なく發揮せしめ。偶々大敵の急襲を受くるや敵を見て勇み危を見て赴き常に隊長と一心同體となり勇戦以て中隊の志氣を振作し寡兵克く衆敵を潰走せしめた。かくの如きは是れ滅私盡忠の發露顯現に外ならずと云ふべきである。目指す敵首都を目睫に控へて中途斃れしは長恨盡きずと雖も然し對手として不足なき大軍と戦ひ皇軍の威武を宣揚し而かも殿下の御馬前に於て草むす屍となり長くも光榮枯骨に及ぶ死して尙餘榮ありと謂ふべきである。其赫々の武勳は千載の下青史を飾り不滅の英魂は護國の神となり神靈出でゝは聖業の恢弘を守護し入りては愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に進級し次で正八位勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵准尉勳六等功六級 岩下辰馬

勇敢機敏の指揮班長負傷するも尙活躍偉功を奏す

氏は福岡縣三池郡駛馬町の人にして亡父を辰彦母をワキと云ひ明治四十年十一月二十日生れで妻しづ子との間には長男精と云ふ愛兒がある。資性濃厚篤實にして孝心深く寡言實行の人であつた。大正十年駛馬尋常小學校を卒業し三井三池礦業所従業員となり傍ら青年訓練所に於て修業し昭和三年六月徴兵として龍山歩兵第七十八聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し下士官志願を爲し採用せられて昭和四年六月豊橋陸軍教導學校に入校翌年五月卒業歸隊し六月歩兵伍長に十二月歩兵軍曹に任ぜられた。

昭和六年九月滿洲事變勃發するや滿洲に出動して各地に轉戦し翌七年五月凱旋功に依り勳七等に叙せられ同十一年十二月歩兵曹長に進級した。

昭和十二年七月支那事變起るや間もなく氏は南雲部隊機關銃中隊附として勇躍北支方面に出征した。北支到着後氏の所屬部隊は七月下旬遼唐山附近の警備に任じて居たが愈々二十七日には團河村の敵を攻撃することゝなつた。此の時氏は中隊指揮班長として中隊長と大隊長及び隣接部隊間の連絡主任者であつた。所屬部隊が愈々攻撃前進を起すや敵は一齊に銃砲火を浴びせて來た。氏は其の敵弾下に指揮班員を指揮し刻々變化する敵情を大隊長に報告すると共に中隊長の命令意圖を各小隊長に傳達し熱心中隊を輔佐して中隊の戦力發揮に大なる貢獻を爲した。然るに敵前百五十米附近に達せし時氏は腰部に敵弾を受けた。然かし氏は毫も屈する事なく而かも今や部隊は突撃せんとする危機一髪の狀況に氏は益々指揮班員を激勵指揮し銃隊をして遺憾なく歩兵部隊の突撃援助を遂行せしむるを得た。



續いて翌二十八日所屬隊は南苑の敵兵營を攻撃する爲午前四時三十分より行動を開始した。氏は前日の負傷にも不拘殘留を肯んぜず傷を纏帯に隠して依然指揮班長として戦線に立た。敵は前日にも増して銃砲火を亂射し全く雨や霰の如くに射注いで來た。氏は此の狀勢下に身の負傷も忘れ疾風の如く馳せ廻り中隊長の意圖を各小隊長に傳達し愈々第一線突撃の時期迫ると見るや氏は大隊長の許に至りし所大隊長より突撃支援に關する重要な命令を受けた。此の時我が第一線歩兵は既に敵前八十米に迫つて居た。氏は大隊長より命令を受くるや機逸すべからずと猛烈なる敵火の間を脱兎の如く中隊長の許に歸還して報告し中隊長は直ちに大隊長意圖の如く中隊を部署し其の部署終るや終らざるに第一線は突撃に移つた。然るに敵は雨霰の如く猛射を浴びせ來り竟に氏は頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午前十一時三十分であつた。然かし氏の勇敢なる活動殊に適時に大隊長命令を中隊長に傳達せし結果銃隊は遺憾なく我が第一線部隊の突撃を支援し所屬大隊は遂に突撃功を奏し城壁の一角を占領するに至つた。

氏幼より孝心深く而して不幸十分なる教育を受けずして尋常小學校を終るや三井礦業所に勤務して家計を助け。徴兵として軍隊に入るや日夜勉勵遂に下士官となり滿洲事變に武勳を樹て勳七等に叙せられ而して今事聖戰に従ひては偉勳を奏す之れ實に氏の堅忍奮闘忠勇義烈の致す所として殊に南苑攻撃に氏が前日の負傷をも顧みず勇敢に活躍し機を失せず大隊長の命令を中隊長に傳達せし事は所屬大隊戦勝の一素因を爲したるものと謂ふべきである。今や聖戰の初期此の如き勇士を喪へるは洵に痛惜の極みである。然かし氏は百戰功なき軀全を耻ぢ一戰功を奏して名を遺すに如かず。氏が赫々たる武勳は青史に輝き其の勇名は千古に誦はれ忠魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し其の遺族に尊き佑助を垂れ愛子の立身遺志繼承を照覽加護するであらう。

氏は戦死の日歩兵准尉に進級し勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵准尉勳六等功六級 富永 猛

險峻なる山岳地帯の戦闘に活躍して職に殉す

氏は鳥取縣高都豐實村の人にして母を信子と云ひ明治四十四年五月五日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く氏が滿洲事變の爲め出動せる頃父は大病にて入院中であつたが愛別離苦の悲しみの裡雄々しくも後事を托して出動した。渡滿後父は終に此の世を去つたが氏は心より母を慰め又父に代はり弟妹を慈しみ其の養育に努力し舉村氏の德行に感激して居た。大正十五年三月豐實小學校高等科を卒業し續いて豐實青年學校に入校し現役志願兵として昭和四年一月鳥取歩兵聯隊へ入營の上下士官候補者となり翌五年熊本陸軍教導學校へ入校同年十一月卒業し十二月伍長に任官した。爾來軍務に精勵し研學怠らず昭和十一年十二月果進して曹長に進級した。其の間滿洲事變に参加し功に依り勳七等青色桐葉章を賜はつた。

支那事變勃發するや山崎部隊長谷川中隊に屬し八月中旬より北京附近の掃蕩戰に参加した。即ち所屬中隊は八月十一日以来先づ柘壇寺兵營に位置して西直門、阜成門、東北大學の警備を完うし次で主力を以つて西直門驛に位置し平綏線の警備並に其の沿線の治安維持に任じ八月二十五日に及んだが氏は其の間指揮班員として日夜の危険と勞苦とを歴はす奮勵努力克く上級部隊並に關係諸部隊間の連絡に活躍し以つて中隊の諸任務を完遂せしめた。

八月下旬我が騎兵第〇聯隊は門頭溝西方約二十軒に在る下馬岩附近に於て優勢なる敵の重圍に陥り危殆に瀕しあるの情報に接し所屬大隊は之れが救援の目的を以つて八月二十六日未明出發先づ清水潤迄は汽車輸送に依り急行し清水潤下車後は愈々名だたる山岳地帯の急行軍に入り疲勞困憊其の極に達したが氏は二十七日午後四時葦子水東方約二千米の鞍部に於

て雁翅村北方高地附近の敵情搜索並に伊藤小隊との連絡を命ぜられた。蓋し此の任務は當時の状況として容易ならざる難任務であつたが氏は勇躍欣然兵二名を率ひ峻峰峻坂を踏破し敵火を意とせず完全に任務を遂行し午後十一時所屬隊に歸還したが本偵察の結果は大隊爾後の戦闘計畫に重要な資料となつた。下馬峯は永定河に沿ふ重要地點にして四周山岳に圍まれ遙かに萬里の長城を望見し得べき要害の地である。所屬大隊は八月二十八日難行軍の後下馬峯西北方高地に達した。



敵は我が急進猛攻に抗し得ず數線に亘る前進陣地を棄て下馬峯北方高地帯を固守するに至つた。翌二十九日には所屬中隊は大隊の左第一線中隊となり敵の猛火を浴びつゝ敵陣地に肉薄し以つて翌三十日下馬峯北方高行に對する主攻撃を準備中であつた。氏は此の間命令受領者となり大中隊間を敵彈雨飛の中に往復し之れが連絡を確保し以つて所屬中隊の攻撃準備に遺憾なからしめた。翌三十日も氏は勞苦を厭はず大隊本部へ連絡の爲め山上の中隊指揮所を下山したが間もなく「萬歳」と叫ぶ聲が響きしと思ふ間に續いて富永曹長がやられましたと言ふ兵の聲がするので中隊長は山上より轉ろげ落つるが如くして氏の許に來り見れば敵の迫撃砲彈附近に落下炸裂の爲め頭部に破片創を受け附近に在りし七八名の戦死傷者と共に悼しくも壯烈なる戦死を遂げて居た。中隊長は萬感胸に迫り男泣きに泣いたと通信して居るが左もありし事と察せられる。

氏は剛健にして眞摯、事を處するや思慮周密にして而かも機敏中隊指揮班の中堅として中隊長の戦闘指揮を輔佐し又關

係諸部隊との連絡を確保する等中隊の任務達成に貢献せる所極めて大であつた。氏の最後に於ける歴戦經過の表面觀は必ずしも華かではなかつたが所謂機敏の下力持であり又雁翅村北方高地の敵情偵察の結果は所屬隊戦勝の基礎を成するものであつた。あゝ前途有爲の勇士を此の一戦に喪ふ眞に痛惜に堪へぬが氏の功績は亦皇軍北支戦史に牢記せらるべく其の英靈は護國の神と仰がれて永世に生き尙も皇國を護り又氏が生前念願せる一家の前途に限りなき加護を垂るゝであらう。氏は戦死の日歩兵准尉に進級し次で勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵准尉勳六等功六級 興津 彖 藏

優勢なる伏兵に襲はれ最後迄剛勇機敏奮戦して玉碎す

氏は静岡市中島の人にして父を金右衛門母をきよと云ひ明治四十三年十月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實にして氣慨に富み責任觀念頗る旺盛にして諸人の愛敬を受けて居た。大正十四年三月大里村立西小學校高等科を卒業し續いて製茶荷造業の傍ら同校内補習學校五ヶ年の課程を修め更に昭和五年十一月昭和兵事研究会専修科を修了した。昭和六年一月現役兵として豊橋工兵大隊に入營成績優秀にして同年九月工兵學校教導隊に分遣せられ同年十一月上等兵に進級翌七年十二月工兵伍長に任官した。爾來精勵恪勤果進して曹長に進級し昭和九年四月滿洲警備の部隊に編入せられ工事班支部要員として或は東部國境築城作業に或は濱江省方面の匪賊討伐に従事し昭和十一年一月内地歸還となり同年五月東京工兵聯隊へ編入替へを命ぜられた。

支那事變勃發するや今田部隊に屬し昭和十二年十月中旬勇躍中支方面への征途に就いた。斯くて十一月十八日及十九日

の嘉興攻撃に際しては永興橋と双橋間未航の水路を偵察し且同區間の水上輸送に従事し十一月二十日以降十二月四日に至る間は臨時水上輸送隊に屬し機舟の整備に任ずる外湖州—滬陽間の軍需品輸送作業就中水路偵察及設營給養等日夜繁激なる業務を擔當し敗殘兵隨所に出没する情況下に未航の水路に於て晝夜を問はず或は風雨を冒し或は糧食缺乏の困苦に堪へつゝ職責に邁進し所屬中隊の任務遂行に貢獻せる所頗る大であつた。二月五日乃至八日に於ける長瀟より大中府間の水上輸送に際しては國崎支隊の歩兵一箇大隊の水上輸送に従事し諸連絡及び輸送材料の整備給養等周到機敏に活躍し其の任務を完全に遂行した。又十二月九日より同月十一日に亘り國崎支隊の揚子江渡河に際しては慈湖鎮西北方子母山附近に於て同渡河部隊の誘導掛となり克く中隊長を輔佐し該作業を圓滑迅速に完了せしめた。



爾後第一線部隊に要する彈藥糧食の水上輸送及水路に依る患者輸送業務に従事して居たが十二月十三日午前八時宿營地出發同日正午孫家里附近に到着大休止中國崎支隊の彈藥缺乏に付速かに之れが補給を命ぜられ所屬中隊長藤原大尉は長瀟に集積しありし國崎支隊の

彈藥を浦口に輸送すべく機舟十四隻を以つて七模合の艇舟群を編成し中隊長以下百餘名之に搭乘し一路長瀟に向ひ急航した。氏は其の際水先案内掛として第一舟たる中隊指揮舟に搭乘して今や落陽湖畔大龍口の北端附近にさしかゝるや突如附近に潛伏しありし數百名の敵兵現はれ第一舟目かけて小銃機關銃及手榴彈の猛射を浴びせて來た。こゝ陸岸を距る僅かに四十米而かも此の湖水は水深極めて淺く泥深く恰も其水路は一のクリークたる特色ありて舟の運動は自づから大なる制限

を受くる有様であつた。第二模合舟以下は中隊指揮舟より逐次約十五米の距離を取り單縱陣となり航行中であつたが中隊指揮舟は先づ操縱手敵彈に墮れ次で機關部を射貫せられて運轉全く不能となつた。されど氏は神色自若大聲を以つて中隊長の命令を後續艇舟に對し迅速確實に傳達し以つて直ちに敵岸に上陸攻撃せしめ又自ら敵彈雨飛の中に在りて機敏適切に乗員を部署して中隊長の指揮を輔佐し率先勇敢に奮闘中午後五時十分惜しくも右胸部及右背部貫通の銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。本戦團は午後三時三十分より約四時間に亘れる激戦であつたが敵は將校以下五、六十名の死體を遺棄して敗走するに至つた。あゝ千里を走る猛獸も水に入りては如何にせん中隊指揮舟のみは蜂の巢の如く敵彈に射貫かれ中隊長以下の乗員は最後の一人となる迄死闘を續け大和男子の意氣高く從容として君國の爲めに清く身命を捧げた。

氏は曩に昭和十年六月大綏芬河氾濫の際郭亮船口附近大義橋の橋梁監視を命ぜられたが偶々東瀆より郭亮船口への糧秣輸送隊の渡橋を終りし直後橋梁の維持困難なるを察するや機を失せず歩兵八名を渡橋せしめ尙爾後の橋梁抗力を點檢せんが爲め單身橋長百十米の同橋中央部に達せし時該橋梁は三部に分解し氏は兩脚に受傷せるも之に屈せず中央分離橋床と共に漂流し兩岸何づれにも漂着の見込なきを察するや悠然として流速四米の奔流を物ともせず濁流四百米を泳ぎ左岸に近き中洲に到着した。其の機宜に適せる諸動作は職務に忠實且犠牲的精神の發露として時の工事實施班支部長より表彰せられた。今次事變に參戰するや各種任務に服し克く如上の特色を發揮し慧眼機敏水路偵察の正鵠を得熱誠努力以つて中隊諸業務に敏腕を揮ひ勇猛果敢大敵たりとも懼れず己が武職を完遂して玉碎した。あゝ聖戰の半ばにして斯く有爲精悍而かも前途洋々たる人材を喪ふ定に痛恨に堪へない。然れども氏が不朽の功績は天晴れ軍人の龜鑑として皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神となり尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日工兵准尉に進級し特に勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵准尉勳七等功六級 阿部 文 次

苦戦中敵の迫撃砲を沈黙せしめ戦局を開ける小隊長

氏は長野縣上伊那郡東春近村の人にして父を龍彌亡母をいわと云ひ明治四十三年五月六日に生れ妻うめよとの間に長男師夫を擧げた。資性豪放磊落なる一面責任觀念頗る旺盛にして率先垂範統御の才能に勝れて居た。大正十二年三月東春近小學校を卒業後伊那中學校へ入學し昭和三年三月同校卒業後直に上京し品川區大倉豐典方工業工場に勤務する事となり能く業務に精勵して居た。氏は剣道に堪能にして既に中學校在學間に同校の驍將として名聲高く爾來益々鍛練を重ね剣道三段を免許された。昭和六年一月現役兵として松本歩兵聯隊へ入營し下士官候補者に採用されて仙臺陸軍教導學校へ入校し翌七年十一月卒業歸隊の上歩兵伍長に任官し翌八年十二月には滿洲警備部隊に屬して呼蘭地方の警備に服し翌九年五月内地へ歸還となり累進して曹長に進級した。

支那事變起るや遼山部隊に屬し久保中隊の指揮班員として昭和十二年九月三日勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後九月中旬に於ける南泊附近及大石橋涿洲附近の戦闘には大中隊間の連絡に任じ克く敵彈下に沈着機敏に活躍し積極的に其任務を完遂した。

九月二十一日及同二十二日の大冊河畔黃村の戦闘に於ては所屬中隊は大隊の左第一線となり二十二日午前零時十分大冊河を徒渉し攻撃前進中敵の猛射を浴び且夜暗の事とて指揮連繫極めて困難なりしに拘らず氏は克く所屬大隊との連絡を確保し以て中隊長の戦闘指揮を容易且適切ならしめた。午前零時五十分所屬中隊が第二線陣地に對する突撃頓挫するや速かに機關銃中隊に連絡し其協力に依り遂に中隊をして所望の敵陣地を奪取し其確保に成功せしめた。此時第三小隊長が負傷

せる爲氏は其代理として小隊を指揮するに至つたが氏は速かに戦況の推移を豫察し左前方の敵掩蓋機關銃を部下の一箇分隊をして制壓せしめ敵の逆襲を未然に防止するを得た。次いで午前五時所屬中隊の主力が大隊長の許に移動するに方り中隊長は氏の小隊をして現在地を確保して所屬大隊の左前方を警戒せしめた。然るに午前五時半頃敵兵約三百名は我を少數と見て猛然として逆襲して來た。之が爲め一時は小隊も危険に瀕したが氏の適切なる指揮と機關銃隊の協力とに依り之を

黃村方向に擊退するを得た。されど掩蓋陣地の後方に在りし敵約百名再び逆襲を準備しある氣配を察知し得たる氏は隸下の小銃一箇分隊擲彈筒班及び機關銃分隊を併せ指揮し斷乎之を強襲するに決し遂に突撃を敢行し敗退せる敵を猛射して其數十名を射殺し以て同地を占領し所屬大隊の左側を完全に掩護し以て爾後の戦捷獲得に重大なる素因を與ふるに至つた。

斯くて翌二十三日以後十月初旬にかけて保定附近の殘敵掃蕩並に滹沱河畔に向ふ追撃戦に参加し殊に同河畔小壁村附近に於ける渡河點及び同方面の敵情搜索に方りては屢々貴重なる報告を提出して所屬大隊の戰鬥計畫を適切ならしめ。更に十月中旬光録鎮附近の戦闘に方りては將校斥候を命ぜられしが氏は勇敢機敏に行動し慧眼克く敵情を搜索して有力なる情報を擧げ以て大隊戦勝の端緒を拓いた。

所屬部隊は石家莊入城以後列車追撃隊となり十月二十日漳河の線に到着し同河々畔の戦闘を行ふに至つた。所屬中隊は大隊主力と共に河北省の最南端驛たる雙廟附近に位置し爾後の攻撃を準備中なりしが同日夜に渡河せる第三大隊は對岸西



保障に於て敵の包圍を受け危険状態に陥りし爲所屬中隊は之が救援を命ぜられ二十一日午前三時胸を没する漳河を涉りて西保障村に急進した。午前五時半頃前方部落に銃砲聲激烈を極め敵の迫撃砲弾は前進中の我が中隊附近にも頻りに落下すれど未だ第三大隊との連絡とれず東天白みて漸く前方部落の判明し得る頃多數の敵が退却中なるを知り中隊は西保障南側高地に向ひ駈歩を以て前進中西保障の敵より猛射を受けたが之に怯まず二十餘米の斷崖を攀ち上り更に全く遮蔽物もなき草山を猛進して午前七時半頃頂上前五十米の斷崖線に到着した。此高地は西保障附近に於ける最高の制高地點にして其斜面は數段の斷崖線をなし敵は各斷崖線を頑強に死守して居た。蓋し敵が此高地を失はんか一大打撃を受くべきは火を賭るより明かであつたからである。故に敵は頂上稜線後に迫撃砲機關銃を配置し午前十一時頃より我が中隊に對し猛射を加へ來りし爲現在線に暫く停止するの外はなかつた。此時氏は「小癩な奴め！自分が撃退に行つて來ます」と部下一分隊を率ひ棉畑を匍匐前進し頂上線にありし守兵四五名を射殺して頂上前二十米まで肉薄し迫撃砲陣地らしきものを發見し部下に命じ射撃せしむると共に部下の銃を取りて敵の指揮官らしきものを狙撃した。斯くて敵の迫撃砲を沈黙させたが此時斜左方の棉畑に潛伏せる數名の敵より射撃を受け氏は兩大腿部に貫通銃創を受け又一弾は右内方大腿部を擦過して肉片を削り取られた。氏は之に怯まず更に二三發の射撃を續行せしも出血甚だしく身體思ふに委かせず衛生兵に依り收容されたが「チャンコロの彈で死んでたまるか」と豪語して居た。然かし後途中雙廟驛通過の頃悼ましくも護國の華と散つた。所屬中隊は氏の勇猛なる行動に依り直ちに頂上近く進出し頑敵を撃退し午後零時三十分之を占領した。敵はラツバを吹奏しつゝ逆襲し來り奪回を企てたが直ちに之を撃退して同高地を確保した。

氏や夙に忠君愛國の至誠横溢し克く上官に仕へ又部下を慈しみ自ら中隊團結の中堅となり其卓越せる武道と絶倫の氣力又慧眼俊敏の頭腦は各戰偉功を樹て特に漳河渡河點の偵察の如きは時の兵團長より賞揚されし程にて定に得がたき精神有

爲の中隊幹部であつた。斯かる忠誠勇武の士を喪ひしは眞に痛恨哀悼に堪へずと雖も其功績たるや天晴れ軍人の龜鑑として皇軍戰史に異彩を放ち其名は大和櫻と謳はれて千載に芳ばしく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈は尙も皇國を守護し又一家將に愛子の將來に限なき加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵准尉に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵准尉勳六等功六級 岸 高次郎

指揮班長、戦機に投じて敢然逆襲し突撃の動機を作る

氏は群馬縣群馬郡金島村の人にして父を兵吉亡母をハツと云ひ明治四十二年八月一日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實にして不屈不撓の氣概を有し且同情心に富み諸人の愛敬を受けて居た。大正十三年三月澁川小學校高等科を卒業後印刷業に従事しつゝ同町青年學校へ入校昭和四年三月卒業同五年一月高崎歩兵聯隊へ入營し同年十二月歩兵上等兵に進級同七年三月歩兵伍長に任官し同年六月より約六ヶ月間滿洲事變の爲渡滿し各地に轉戦して功を樹て勳七等を賜はり同十一年曹長に累進した。氏は武技に秀で軍事學に通曉し其内務班長となるや熱誠懇篤骨肉の情を以て班員を教育指導し部下より慈母の如く慕はれ教練就中武技に至つては其教育技能群を抜き簡拔せられて聯隊本部付書記となるや其服務に關し積極且獨創的に改善進歩を圖り隊内模範曹長として名聲を博し其前途を囑目されて居た。

支那事變起るや鯉登部隊に屬し丸岡機關銃中隊指揮班長として昭和十二年七月中旬勇躍征途に就いた。斯くて七月十九日天津着風雲急迫の情況下に周到機敏に業務を處理し克く指揮班員を掌握指揮し以て中隊長を輔佐し愈々郎坊團河村の戦

團に参加するや彈丸雨飛の中に剛勇機敏に命令受領及連絡業務に従事し又班員の行動に關し適切なる指導を與へ中隊長の戦闘指揮を容易ならしめた。

七月二十八日所屬部隊が南苑を攻撃するに方りては所屬中隊は第〇大隊に配屬せられ午前七時行動を起した。南苑は京津地方に於ける敵第二十九軍の牙城にして彼等が最後の金城湯地と恃みし所日夜堡壘の増強に努め守兵亦抗戰意識に燃え



必死の防戦を決意して居た。此日朝來空暗澹として雨雲に鎖され戰場は無氣味なる静けさを保つて居た。午前九時三十分頃砲聲一發、濕氣を帯べる空氣を震はせつゝ轟き渡り南苑上空には黒龍信號が立のぼつた。是れ皇軍の一齊攻撃を始むる合圖であつた。氏は所屬大隊長と中隊長間の連絡を擔任しつゝ丈餘に生ひ茂れる高粱畑をかきわけて前進したが敵は十字の銃砲火を亂射して皇軍の近迫を妨害した。濕氣を帯べる苦熱、際涯もない高粱畑の連續視號通信の如きは皆目用ひることも出來ず唯一の連絡は彈雨に曝されながらの傳令に依る外はなかつた。氏等の危険と勞苦は察するに餘ありと云ふべきであつた。されど責任觀念旺盛にして剛膽機敏の氏は克く指揮班員を掌握し又率先垂範の活動を續け關係諸部隊間の連絡を確保しつゝ突撃陣地の線に進出した。正午頃所屬大隊は突撃の機迫り所屬中隊は堤防突角の敵側防火器を制壓中であつた。此時南苑西北角の一軒家附近より敵兵數十名現はれ我が歩兵砲隊を襲撃し來り其一部は其附近に在りて激戦中なりし大島分隊の左側を目掛けて肉薄して來た。此狀況を目撃せる氏は部下の傳令二名と大島分隊の彈藥手二名を併せ指揮し敢

然として大島分隊方面の敵に向ひ逆襲し先づ最先頭に前進せる敵を斃し續いて敵中に突入して其の數名を斬殺した。敵は此勇敢壯烈なる奮闘に懼れ一目散に敗走した。我が機關銃隊は氏の勇戦に依り全く側方の敵に介意する事なく一意所望の目標に對し最大威力を發揚し所屬大隊の爲突撃の動機を作爲するを得た。爾後氏は大隊本部に在りて服務せしが所屬大隊の突撃に方りては大隊長と共に率先丈餘の堤防を攀ち上り敵壘に突入し奮戦中敵の投げつけたる手榴彈の爲頭部及び足部に重傷を負ひ其場に壯烈なる戦死を遂げた。當時氏が勇壯機敏なる突入動作は眞に一般將兵の感嘆措く能はざりし所にして一隊の志氣を鼓舞せし事甚大であつた。

氏は夙に純忠の至誠に燃え各種職務に歴任して克く其手腕を發揮し往くとして可ならざるはなく上官の信任最も厚かつた。然るに聖戦の初期に方り早くも玉碎し將來有爲の才幹を伸べ得ざりしは痛恨哀悼禁じ得ざる所である。然れども士の戰場に臨むや素より生還は期せざる所である。而して暴慢不遜の支那軍を神速果敢に擊破し京津地方を獲得する事は當時の情勢上緊要無二の要求であつた。皇軍なればこそ其要求を充足し赫々たる武威を中外に宣揚し得たのであるが氏等の尊き犠牲が其礎石をなせるもので其功績たるや天晴れ皇軍戦史に牢記せらるべきである。あゝ今や其人空しと雖も氏の芳名は千載不朽に傳ふべく其英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國を守護し又一家の守護神として尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵准尉に進級し次で勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

下士官之部

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 石原 豊

慧敏剛膽克く敵情を捜索し決死奮闘兵團主力の渡河を容易にす

氏は岡山縣久米郡大倭村の人にして父を儀三郎母を梅野と云ひ明治四十五年一月一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして沈勇又孝心深く友情に厚かつた。大正十五年三月公正小學校高等科を卒業し昭和八年一月格致青年學校を修了し其の間學業に精勵し成績優良であつた。同年同月現役兵として歩兵第十聯隊に入營し間もなく滿洲派遣部隊に屬して渡滿、教化局子街附近の戰闘に参加し功を以つて勳八等白色桐葉章を賜はり昭和九年七月善行證書を附與せられ滿期除隊となつた。氏は在營間射撃銃劍術の成績優秀にして屢々賞状を與へられた。歸郷後は郷里の青年團支部長消防組役員に推舉せられ實踐躬行大に改善進歩を圖り殊に同年秋の水害時には處置適切機敏にして大に村内公衆の爲め盡力し警察署長より表彰せられた。氏は思ふ所ありて再服役を志願し同年十一月現役に編入せられ歩兵伍長に任官し翌十年十二月歩兵軍曹に進級した。

支那事變起るや赤柴部隊に屬し高田中隊の附屬下士官として勇躍北支戰線へ出動した。斯くて八月中旬北支へ到着同月二十日より津浦楊柳青及當城附近の掃蕩戰に参加し中隊指揮班員として中小隊長及關係諸部隊間の連絡勤務に服し以つて其の協同動作に多大なる貢獻を致し次で二十二日午後五時七里堡を出發して敵を急追し徹宵泥濘の惡路と敵の彈雨とを冒して翌二十三日未明西邊庄の敵陣地前に進出し午前五時四十分より之を攻撃した。此の頃より敵の銃砲彈の飛來刻一刻



猛烈となり氏の身邊も十字火の中に包まれた。氏は之を意とせず敵を監視し敵の迫撃砲及び機關銃の位置を發見し之を速かに中隊長及び大隊長に報告し又機關銃中隊及び大隊砲隊へ通報して之を制壓せしめ更に敵前至近の距離に前進して敵情を捜索し中隊を誘導して不意に側背より猛射を加へさせ敵に大なる打撃を與へしめた。而して所屬中隊は午前八時半遂に西邊庄の敵陣地を占領するに至つたが氏の功績に俟つ所頗る大であつた。此の外雙樓、挑家庄、馬辛庄、林庄及び馬集等各地の戰闘に於て氏が敵情地形の捜索に活躍して所屬部隊の戰闘計畫及び指導上に貴重なる資料を提供せる事一再に止まらなかつた。

九月九日午後一時所屬中隊の幹部は所屬大隊長の許に招致せられた。是れ所屬大隊は兵團長の特選に依り決死大隊となり明日薄暮を期し全兵團の爲め馬廠河を渡河して對岸に確乎たる掩護陣地を占領すべき重任を受けたるを以つて氏の所屬第六中隊は其の第一次渡河部隊たるを命課せらるゝ爲めであつた。氏は此の日父親宛に最後の手紙を書いた。『愈々明日當中隊は全兵團の爲め馬廠に於ける敵前渡河の決死行動に移りますので中隊長殿からも訓示がありました。た。中隊の名譽の爲め奮闘努力せよ』と自分達も働く時が來ました。二度と故國の土を踏まぬ覺悟で確つかりやります。何卒皆々様御身を大切に、左様なら、陳庄にて』とあつた。所屬中隊は午後二時四十分曲庄に於て舢舨に乗船氏は第三番艇に乗組みて支流を下り午後三時五十分砲兵支援射撃終了と共に馬廠河本流を一氣に押渡り對岸に上陸した。待構へて居た敵は文字通り十字の猛火を浴びせて來た。氏は之を物ともせず勇猛果敢に敵の第一線陣地

に突入して之を占領し機を失せず敵情を搜索し各小隊長に連絡中午後四時半第三小隊長重傷を負ふや直ちに其の小隊長代理として小隊を指揮して奮闘特に敵の側防機關銃を制壓し敵の後方陣地に突入せんとせる際午後五時敵の迫撃砲彈頭部に命中し壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は氏等の尊き犠牲に依り同日午後七時馬廠の敵陣地を完全に占領するに至つた。

氏や慧敏克く敵狀地形を明察し機に投じて剛勇果斷而かも敬虔以つて上司に事へ明朗以つて同僚部下に接す。誠に一隊將兵の信頼と敬愛とを一身に集めて居た。果然各戦屢々大功を奏したが愈々馬廠攻撃の決死部隊に加はるや恩愛限りなき父に訣別の書信を寄せて子たる者の禮を盡し驟雨の如く射注ぐ彈雨下に唯々一途に己が本分の職務に全靈全身を捧げて活躍し必勝を期して猛攻、堅壘を誇る敵を粉碎して兵團長及び諸上司の知遇に應へた。忠烈悲壯眞に鬼神を泣かしむるものがある。今や其の空しく痛恨愛惜極まりなしと雖も氏の功績や天晴れ皇軍戦史に異彩を放ち其の名は軍民の鑑と譚はれて千載に芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝことであらう。氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 堀内利置

重傷に墮るゝも尚指揮を繼續せる分隊長

氏は長野縣小縣郡青木村の人にして實父を宮澤市郎實母をしげのと云ひ明治三十七年十二月十七日に生れ後ち堀内仁作たま代の養子となり妻なかのとの間には未だ愛兒が無かつた。資性質實剛健にして孝悌の心厚く家庭頗る圓滿明朗であつ

た。大正八年三月南安臺郡堀金小學校高等科を卒業の後更に長野縣南安北部農學校本科第二學年に入り大正十年三月同校を卒業し爾後家に在りて農業に従事して居た。大正十四年一月徴兵として歩兵第五十聯隊に入營し恪勤精勵成績亦優秀にして其の年十二月歩兵上等兵に進み下士官志願を爲し採用せられ十五年十二月歩兵伍長に任ぜられ昭和二年十二月には歩兵軍曹に進級し翌三年十一月善行證書を附與せられ滿期除隊となつたが在隊間射撃術優秀にして第一種射撃徽章を授與せられた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召し松本歩兵聯隊留守隊に編入せられ主として兵員の教育に任じて居たが十月八日遼山部隊の補充員として勇躍征途に上り十一月二日部隊本部に到着關中隊の輕機關銃分隊長を命ぜられた。時恰も所屬隊は彰德附近の敵陣地に對し總攻撃の準備中で氏は着隊後息つく暇もなく第一線に出でて分隊を指揮し翌三日には陣地を推進して敵前近く夜を徹し四日早朝より友軍砲兵の攻撃準備射撃に引續き午前七時一齊に攻撃前進を開始した。氏は分隊長として熾烈なる敵銃砲火を冒し分隊を率ゐて勇敢に前進

し正確機敏なる射撃を以つて敵を壓倒しつゝ頑強に抵抗せる敵の警戒陣地を奪取し續いて機を失せず其の射撃陣地を前進せしめて敗走する敵に猛射を加へ多大の損害を與へ次いで小隊長の指揮により更に寺溝村に據る敵主陣地に向ひ破竹の勢を以つて攻撃を續けた。然るに此の時正而殊に部落西南方突角にある敵の掩蓋機關銃は猛威を振ひ爲めに小隊は死傷續出して前進頗る困難となつた。氏は此の時勇敢にも決然部下を激勵し霞の如き敵弾を物ともせず地形を利用して一進一止正

而の敵に近接し突如輕機銃の熾烈なる射撃を浴びせて遂に敵の機關銃を沈黙せしむるに至つた。斯くして所屬小隊は漸く敵に近迫し銃を熔けよとばかり敵を猛射し將に突撃に移らんとせる時氏は惜しくも腹部に貫銃創を受けて打ち墜れ鮮血サツと絨衣を紅に染めたが意氣更に衰へず尙も部下を激勵して「前へ々々」と大呼して居た。之を見たる小隊長は再三氏に後退を命じたるも聞かず氣息奄々たる中に尙切りに部下を指揮して居たが斯くする内に漸次人事不省となり牧容せられ手當を受け更に野戦病院に送られ厚き治療を受けしも其の甲斐なく翌五日惜しくも彰徳城外の華と散つた。

氏は八月應召し補充隊附を命ぜらるゝや脾肉の嘆に堪へざるものゝ如くであつたが留守隊の任亦頗る重要なりとして熱心勉勵以つて他日に備へて居た。然るに間もなく補充員として出征の命を受くるや好機到れりとして勇躍其の任に赴いた。而して晴れの彰徳攻撃に間に合つた事は氏が本懐として大いに勇奮闘したのであつたが其の初陣に散華せし事は洵に痛惜の極みである。然かし氏は百戦功なき瓦全を恥ぢ一戦功を奏して名を遺すに如かず。氏の赫々たる忠烈武勳は永く青史に傳へられて千古を照らし其の芳名は馥郁として櫻花と其の香を競ふべく其の忠魂は護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し又一家の將來に限りなき加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 尾上 進

勇猛剛膽滿洲事變に拔群の功を樹て今事變に再び殊勲を奏す

氏は鹿兒島縣川邊郡西南方村の人にして父を喜三太母をハツカメと云ひ明治四十四年十一月二十二日生れで未だ獨身で

あつた。資性正直沈着剛膽處事几帳面にして進取積極的であり上下の信望頗る厚かつた。昭和二年三月坊泊尋常高等小學校を卒業し其の後家業たる農業に従事し傍ら清原青年訓練所に入所し同五年十二月其の課程を修了し西南方村清原支部青年團幹部に推され精神修養會を起し率先躬行之が指導に任じ又郷土少年團の指導者として團員の向上發展に貢献せる所尠くなかつた。昭和六年一月現役志願兵として鹿兒島歩兵聯隊に入營し同年六月歩兵學校教導隊に分遣せられ十二月上等兵



に進級翌七年六月原隊に復歸し七月善行證書を附與せられ歸休除隊となつた。然るに滿洲事變勃發し召集せられ第五中隊に編入同月滿洲に出動分隊長として二十五回の討伐並に戦闘に参加し就中四月十日より同月十五日に亘る冷口附近の戦闘に於ては部下六名を率ゐる斥候長となり攻撃開始の十日午前五時命を受け敵陣内部の搜索及び障碍物破壊に任じた。敵は斥候の近接し來るを見るや我に十數倍せる敵は一時に猛射を浴びせ來り前進極めて困難なりしが素人同様の匪賊何するものぞ部下を激勵しつゝ一進一止して遂に敵前二十米にまで近迫し散兵壕内に蟄集せる敵に對し突如手榴彈を投擲して多數の敵を斃し暫くして敵の動搖を見るや機を失せず氏自ら先頭に立ちて突入他の斥候も遅れじと之に續き群がる敵を縦横に刺突して奮戦し敵は我が猛烈なる突撃に周章狼狽退却を開始するに至つた。氏等尙も手榴彈を投擲して退却する敵に多大の損害を與へ敵は數十の屍體を遺棄して潰走するに至つた。かくして氏は道路上に障碍物として敷設せる電氣點火に依る地雷埋没地域の爆破を敢行せしに此の爆音轟然黒煙天に沖し爲めに遙か後方に數線の陣地を構築して之に據れる敵は竟に抵

抗を断念して退却を始めた。かくして友軍の前進路を開拓し續いて敵を急追し敵が萬里の長城に據らんとするや氏の斥候は先廻りして長城線上を占領し以つて友軍の該地進出を容易ならしめ敵をして之に據らしむる餘裕を與へず中華民國内に散を亂して潰走するに至らしめた。以上の外氏は熱河作戦間各所に於て赫々たる武功を樹て其の功に依り勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はり又滿洲國皇帝より勳七位景雲章を授與せられた。而して昭和八年十月内地に歸還し同月歩兵伍長に任官の上召集解隊となつたが同年十二月現役を志願し平壤歩兵聯隊に入隊翌九年十二月歩兵軍曹に進級し同十一年十二月第二大隊本部附を命ぜられた。

支那事變起るや鯉登部隊重藤大隊に屬し大隊本部書記として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後所屬大隊は天津海光寺に駐屯しありしが該地警備中其の手薄なるに乗じ七月二十九日午前一時三十分頃支那軍及び支那保安隊は突如我が兵營及び軍司令部を襲撃し來り迫撃砲機銃小銃等を以つて射撃して來た。依つて大隊は直ちに緊急集合を命じ第一線に増加し奮戦大いに努めしが氏は此の間彈雨を冒し第一線との連絡或は敵情監視等に任じ適時適切なる情況を報告して大隊長の戰闘指揮を容易ならしめ更に氏は天津警備隊小笠原隊の情況不明なりしを以つて午前七時三十分副官の命を受け之と連絡の爲め出發した間もなく小笠原隊に到着するや恰も同隊は激戦中にして狀況頗る急迫しつゝあり其の際交戦中の分隊長山田伍長の敵弾に倒るゝを見るや氏は彈雨を冒し塹壕を越えて重傷を負へる伍長を救出し爾後伍長に代りて分隊を指揮し奮戦せしが眼前に於て我を猛射しつゝある敵を一撃の下に撃滅せんと決意し手榴彈を携帯して壕より躍り出で前面の圍壁に沿ふて敵前二十米の地點に肉薄し先づ第一彈を投擲して敵を震駭し續いて第二投擲と同時に突入せんとせしが無念敵彈の爲め重傷を負ひ其の場に倒るゝに至つた。分隊長斃されたりと見た部下一同大いに憤怒し猛然突撃を敢行し遂に敵を撃退して氏を收容し天津陸軍病院に入院せしめ厚き手當を爲したるも其の甲斐なく七月三十一日同病院に於

て竟に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦陣に立つや敵を見て勇み危を見て赴き死を見ること歸するが如く實に勇敢剛膽大隊長の輔佐者として其の戦闘指揮を容易ならしめたるのみならず或は適切なる戦局の看破となり或は機宜に適せる獨斷となつた。かくの如きは是れ氏が烈々たる忠誠の發露にして眞に軍人の鑑と謂ふべきである。今次開戦劈頭氏の如き得難き忠勇の士を喪ふ洵に痛恨の極みである。然れども士の戦場に臨むや百戦功なき瓦全を愧ぢ一戦玉碎名を遺すに如かず。氏や曩に滿洲事變に殊勳を樹て今次亦天津の一戦に赫々の武功を奏す其の芳名は萬古に流れて盡きざるべく其の英靈は不滅に生き護國の神と祀られ神靈尙皇猷を扶翼し奉り又遺族に尊き光明佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 大山正男

獨斷重機分隊を指揮し重傷を負ひ尙指揮を續け突撃を誘起す

氏は鹿兒島縣薩摩郡大村の人にして亡父を五兵衛母をスエと云ひ大正三年五月十日生で未だ獨身であつた。資性温厚なるも事に臨み勇敢機敏積極的にして責任觀念頗る旺盛であつた。昭和三年三月郷里の尋常高等小學校を卒業して其後家事の手傳を爲し軍人たらんことを志望せしが父病弱の爲許されず已むなく同四年三月より神戸市に於て自動車運轉手を勤め同五年漸く待望の現役志願兵として平壤歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し下士官候補者に選ばれ同八年陸軍教導學校に入校同九年同校卒業歩兵伍長に任官した。又氏は射撃術に長じ聯隊及師團の競技會に賞狀を附與せられてゐる。

支那事變起るや鯉登部隊第三機關銃中隊に屬し中隊指揮班員として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後七月二十五日より二十六日に亘る郎坊附近の警備及同月二十七日圍河村附近の戰闘に當りては中隊内の連絡に任じ終始積極的に活躍し克く其任を完うした。



七月二十八日南苑附近の戰闘に際し大隊は午前七時行動を開始し敵を攻撃した。機關銃中隊亦逐次陣地を變換推進して敵を制壓し第一線歩兵の攻撃を容易ならしめ漸次敵に近迫するに至つた。此間氏は中隊指揮班員として猛烈なる敵の銃砲火の中に東奔西走以て中隊長と大隊長との間及隣接中隊長及部下小隊長との間の連絡に活躍し中隊長の戰闘指揮を容易ならしめ愈々大隊は突撃に移らんとし所屬機關銃隊は敵と至近距離に於て之に協力するや南苑西北南及其以西堤防上の敵を制壓中の第一分隊長足立軍曹敵彈の爲負傷し倒るゝに至つた。之を目撃したる氏は戰機一刻の猶豫も許さざるに鑑み獨斷直に走り寄りて該分隊を指揮し銃身も熔けんばかり敵に猛火を浴びせて制壓せしが此頃敵彈は一層熾烈となり機關銃分隊の附近に猛烈に落下し爲に氏も亦竟に右臀部に貫通銃創を蒙りしが重要な時機に於て分隊の志氣を阻喪せしむることを恐れ傷の痛手を怯へて兵に之を知らしめず益々勇を鼓し兵を激勵しつゝ其志氣を鼓舞し沈着剛膽的確なる射彈觀測を爲しつゝ一々彈着を修正し精確良好なる射撃を以て重機關銃の最大威力を發揚し遂に頑強なる敵機關銃を制壓し時機の到來を待ちつゝありし第一線中隊をして突撃を遂行せしめ敵陣を奪取せしむるに至つた。かくする内出血甚しくして指揮をとる

に勘へざるに至り已むなく收容せられ手當を受け次いで黃村驛より汽車にて天津に後送せられしが汽車途中竟に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。因に氏の長兄は歩兵少尉にして現に出征しあり次兄は海軍三等兵曹又弟は補充兵として現在應召中の輝しき一家である。

氏の戰陣に立つや勇敢剛膽彈雨の下戰線を馳驅し克く中隊長を輔佐し其戰闘指揮を容易ならしめ以て皇軍機關銃の精銳を發揮せしめて遺憾なからしめしのみならず其戰機の看破其機宜の獨斷其指揮的確共に戰捷の因を爲し其傷つくも之を秘して指揮を繼續せる如きは正に幹部の儀表とすべきである。是れ皆氏が盡忠報國の精神の發露せる所唯だ斯る勇士を開戦劈頭北支の華と散らしめしは惜みても尙餘ある所である。然れども士は百戰功なき軀全を耻ぢ一戰功を奏して玉碎名を遺すに如かず氏が南苑攻略に樹てたる赫々の武勳は千載の下青史に輝き其芳名は万古に轟はれ英靈は護國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り遺族に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 小坂橋 正二

優秀なる指揮班員獨斷側防機能撃退し戰勝の途を拓く

氏は群馬縣碓氷郡白井町の人にして父を松吉母をつたと云ひ大正二年一月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實にして而かも澄刺たる氣概を有し孝心深く又弟妹にも優しかつた。大正十五年三月白井小學校高等科を卒業し爾後家庭に在りて農業に従事する傍ら青年學校に通學し熱心勉勵一日の缺席もなく劍道劍舞音樂殊に義太夫に興味を有し夫れ夫れ

相當の進歩を遂げ自然剛毅闊達の裡に豊かなる情操を涵養するに至つた。青年學校卒業後は青年團の幹部となり眞摯快活團樂の美風を作り大に村内青年の指導に努めた。昭和八年十月龍山歩兵聯隊へ入營し成績優良にして下士官候補者として採用され同九年十二月豊橋陸軍教導學校に入校翌十年十一月同校卒業翌月歩兵伍長に任官し翌十一年十二月には軍曹に進級した。



支那事變起るや昭和十二年七月中旬森本部隊に屬し深野中隊の中隊指揮班員となり勇躍北支戦線に出動した。斯くて八月十九日所屬部隊が揚子崗の敵陣地を攻撃するや所屬中隊は部隊豫備隊となりしが氏は敵彈雨飛の中に部隊戰闘司令所との連絡に任じ其任務を積極的に遂行した。

九月中所屬部隊は涿州會戰の端緒をなしたる寶店鎮附近の戰闘に於て赫々たる武勳を奏したが寶店鎮は琉璃河北方に位置し京漢線の一要衝をなして居た。所屬部隊は十四日夜十二時行動を起し十五日午前五時三十分寶店鎮附近の敵警戒陣地前に進出した。敵は既設陣地に據り頗る嚴重に警戒網を張つて居たので我が軍は威力偵察に依り寶店鎮の南方約五百米の線を獲得し陣地を構築して夜に入つた。所屬中隊は此夜再度に互り敵の警戒陣地に對し夜襲を敢行したが氏は此際夜襲と連繫して敵情搜索を命ぜられた。氏は危険を冒し暗夜を利用して豪膽不敵敵陣地深く潜入して敵主陣地の狀況特に障礙物の位置圍壁の狀態等に至るまで細密なる偵察を遂げ以て拂曉攻撃の爲貴重なる情報を提出した。

翌十六日朝來寶店鎮の敵主陣地を攻撃することゝなるや氏は沈着慧敏に中隊長及各小隊長間の連絡に任じ以て中隊長の戰闘指揮を的確容易ならしめ敵陣地前百五十米に進出した。然るに此時右方の小部落より迫撃砲機關銃の側射を受け前進困難となつたが激戦の後之を驅逐して同部落の南方高粱畑に進出せるも午後一時頃南方主陣地の敵山砲の猛射を受け且附近の敵歩兵陣地より十字火を受け死傷續出し愈々前進は困難になつた。已むなく中隊長は散兵壕を掘開せしめ爾後の攻撃を準備するに決した。此際氏は危険を顧みず東奔西走して各小隊長に中隊命令を傳達し又敵情を搜索して中隊長に貴重な敵情を報告し以て敵陣地の一角を占領せしむるの端緒を開いた。やがて所屬中隊は敵陣地の一角を占領するや敵の一部は右側方より猛射を浴びせ來り中隊は再び攻撃の頓挫を見るに至つた。氏は憤然として指揮班員二名を隨へ獨斷之が攻撃に任じ手榴彈及發煙筒を携行し巧に潛行して該敵に接近し之を奇襲して撃退し以て中隊爾後の攻撃を容易ならしめた。不幸其瞬間に咽喉に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。然れども此決死的獨斷勇猛なる行動は本戰闘戰勝の主要素となり將兵一同の感謝と深き哀悼が捧げられた。

氏や至孝在隊間毎年少くも二回は兩親の安否を尋ね自ら節約せる金額を以て弟妹の爲に物品を買求め贈つて居た。而して業務を執るや殆ど寢食を忘れて忠實積極的に努力し模範下士官として信望厚かつた。果然實戰に臨むや忠誠勇武全魂全身を傾倒して難局を打開し以て鏽跡の大節を全うし竟に悼ましくも玉碎した。あゝ前途有爲の良材今や空しと雖も氏の功績たるや其芳名と共に千載皇軍戰史に光彩を放ち其英靈亦不滅に生きて護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國並に一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

因に氏は出征に方り自己の所有書籍は一切を纏めて生家に送付の手續を取つたが留守隊に於ては態々隊内に保管して置いた。又兩親に對し「何卒私は無き子と思ひ心配なさないで下さい、軍隊にも心残りがなく出發する覺悟でも若し私に

不幸がありましたら壹千圓の生命保険と五百圓の郵便保険に加入してありますから其手續を取つて下さい。云々」と通信してあつた。其崇高なる決意と周到なる着意は敬服の至である。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 相川 留春

俊敏敵情監視の任を全うし突撃に方り上官の危急を救ふ

氏は長崎縣彼杵郡崎戸町の人にして父を彌平母をサトと云ひ明治四十五年三月二日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして品行方正諸事熱心にして義務心厚く事に臨みて剛毅果斷であつた。昭和三年崎戸町蠟浦小學校高等科を卒業後直ちに佐世保海軍工廠見習學校へ入學し昭和六年同校を卒業同工廠職工として勤務して居た。同年十一月三十日徴兵として龍山歩兵聯隊へ入營し下士官候補者となり同七年十二月豊橋陸軍教導學校に入校翌八年十一月同校卒業の上歩兵伍長に任官し翌九年軍曹に進級して大隊本部附を命ぜられた。

支那事變起るや昭和十二年七月南雲部隊に屬し第三大隊本部書記として勇躍北支戦線に出征した。當時北支一般の情勢は暗雲低迷物情騒然たるものありしも帝國政府並に出先駐屯軍に於ても不擴大方針を堅持して隱忍自重和平招來に銳意努力して居つた。然れども暴慢頑迷の敵軍は挑戰的行動を放棄せず停戰協定を無視せるを以て終に我軍は堪忍袋の緒を切り氏の所屬部隊も午後零時四十分行動を開始し午後二時三十分より戰鬪を開始するに至つた。氏は此際敵情監視並に第一線部隊との連絡を命ぜられ團河村南側高地一帯の敵陣地を双眼鏡に依り偵察し逐一之を所屬大隊長に報告して居た。氏は敵

精の諸判断正鵠を得適切に搜索重點を定め犀利なる觀察と相俟ちて貴重なる情報を獲得し以て所屬大隊長の戰鬪計畫に寄與する所甚大であつた。爾後第一線諸隊の攻撃前進に移るや氏は益々機敏に彼我態勢の推移を觀察し又大隊本部に集り來る諸情報の整理調査を行ひ命令通報等の骨子となるべき要點を上司に報告し以て所屬大隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。斯くて第一線各中隊の戰機愈々熟し第九中隊は(ト)(ニ)要點に向ひ突撃せんとするや氏は敢然抜刀大隊長に隨ひ勇躍



敵陣地に突入せんとする際敵彈益々猛烈を極めた。此時氏は「隊長 殿危い！ 危険です」と叫ぶや駆出す大隊長の前に立ち塞がり自ら先頭に起たんとした。時しも敵の一彈は氏の左臀部に命中其場に打ち倒れた。氏は啞啞に立ち上らんとしたが出血甚しく再び昏倒した。大隊長は相川！ 相川確かりせよ傷は浅いぞ」と呼べど最早聲はなかつた。已むなく大隊長は傍の部下に處置を命じ降り來る敵陣下を壕を乗り越へ午後七時團河村南側一帯の敵陣地を奪取して敵陣營高く日章旗を樹てた。氏は其後衛生隊に收容され次で天津陸軍病院に後送手厚き看護を受けた。其後所屬大隊長金少佐も南苑の激戦に右足を負傷し同じ病院に收容されたが看護婦に對し「相川の看護は私がするから休むやう」と云ひ不自由な身を厭はず氏の枕邊に寄り添ひ心からなる介抱を續けたが其甲斐もなく八月十六日氏は大隊長の名を呼び續け又槍山看護婦に感謝の言葉を述べつゝ感涙の中に息を引き取つた。大隊長は萬感胸に迫り「相川軍曹は私の身代りとなつて死んで行つた。彼は實直な模範的な下士官であつた」と涙を浮べ浩嘆した。

氏は誠實にして職責の前には水火をも辭せぬ人而かも俊敏慧眼克く戦機を看破し事務の處理正確機敏にして克く戦闘指揮を輔佐し戦勝の端緒を拓いた。而して剣電彈雨の裡部隊長の身邊を氣遣ひ身を以て其危険を免がれしめ全大隊の勝利を祈つて息まなかつた。あゝ眞に是れ皇軍精神を遺憾なく發揚し部隊本部附幹部の龜鑑たるものであつた。聖戦の初期に早くも斯る有爲の材幹を表へるは痛惜極まりなしと雖も士の戦場に臨むや素より生還を期せぬ所今や其人空しと雖も其功績たるや天晴れ皇軍戦史に牢記せられて芳名を千載に傳へ其英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ其神靈や尙も皇國並に一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。因に氏の實父彌平氏は日清戦争に歩兵上等兵として參加し勳八等瑞寶章を賜はり日露戦争に參加して勳七等功六級を賜はれる勇士であり父子相次で皇國に忠誠を致せる名譽の一家である。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵曹長勳七等功六級 奥山泰三

敵彈下に部隊長を護り身代りの忠死

氏は京郷市久世郡御牧村の人にして父を甚之丸母をスエと云ひ明治四十五年七月二十八日に生れ未だ獨身であつた。資性剛毅にして孝心深く克く農村青年としての自覺を以て不屈不撓農事に精勵し農村の生産物は直接需要者に供給するの主義を以て五六里の道も遠しとせず京都市に出かけ直接販賣に従事して居た。昭和二年三月御牧小學校高等科を卒業するの外同村實業補習學校及青年訓練所の課程をも修了したが幼少より頭腦明晰にして學業成績も優良であつた。昭和八年一月現役兵として舞鶴重砲隊大隊に入營し下士官候補者を志願し同年十二月砲兵伍長に任官した。同十年十二月陸軍重砲兵學

校附となり軍曹に進級した。

支那事變勃發するや昭和十二年八月今田砲兵隊に屬し勇躍中支方面への征途に就いた。斯くて九月上旬上海に到着十月初旬にかけ部隊給與掛として活躍せるのみならず觀測小隊長代理として同小隊の觀測手及通信手の教育に任じ部隊の戦力培養に貢献せる所頗る大であつた。

超えて十月五日よりの大場鎮附近の戦闘に於ては部隊附屬下士官として部下附屬機關を指揮し其任務を遂行せるのみならず觀測小隊長代理として克く部隊長を輔佐し射撃諸元の決定敵情搜索射彈觀測等各種の觀測勤務に服し部隊長の射撃指揮を容易ならしめ以て重迫撃砲の射撃威力を遺憾なく發揮し第一線歩兵に突撃の動機を與へた。



十一月一日所屬部隊長は氏等若干の要員を隨へ蘇州河北方一軒の北新涇鎮附近の敵陣地の偵察並に放列陣地觀測所の諸偵察に従事した。氏は其間觀測小隊長代理として周到機敏に行動して部隊長を輔佐し機宜に適する戦闘準備を完了した。所屬部隊の任務は我が軍の蘇州河渡河に際し對岸の敵を制壓して第一線歩兵戦闘に協力するに在つた。同日午後零時五十分より愈々彼我の銃砲聲激烈を極めたが所屬部隊は先づ北新涇鎮附近の敵陣地要點に對し物凄き射撃威力を發揚したが敵亦我が李家屯の砲兵觀測所を目掛けて刻一刻猛烈なる集中火を浴びせて來た。其處には片島隊長と氏の二人きりであつたがやがて氏は「隊長殿！此邊は危険です此處は私が引受けますから退がつて下さ

い」と懇願したが「有難う！ 退がる譯には行かん死は覺悟して居る」と隊長は尙も觀測を續けた。「それでは隊長殿成るべく私の近くにゐて下さい」と氏は隊長の傍に近づき「隊長！ 此處で死んではいけません部下が可哀そうです今まで部下が死を賭して働いてゐた事が水の泡になります宜いですが誓つて下さい」と氏の聲は哀願より絶叫に變はり其形相は隊長を動かさずには置かなかつた。うん自分は決して死なぬと答ふ間もあらばこそ耳を劈さく迫撃砲彈の落下炸裂、思はず身を伏せた隊長の身を庇ふべく氏はいきなり隊長の身に掩ひかぶさつた。幸に無事だつたが間髪を容れず第一彈は二人の身から二尺と離れぬ所にグワーンと炸裂した。哀れや氏は背部左腎左腹等殆ど全身に破片を受けて鮮血にまみれ苦しき息の下より隊長！ 死んではいけませんぞ！ と切々の聲を残して人事不省となつた。氏の身體に取り纏つた隊長は男泣きの泣きつづけ奥山！ お前は俺の代りに死んでくれたのだ！ よし俺は決して死なぬお前の分も働いてきつと仇を取つてやるぞと誓つた。氏は其後衛生兵に收容され擔架で運ばれたが漸く息をふきかへし衛生兵の制止もきかず上半身を起し之から第一線に行つて戦闘する戻してくれと強要した。されど午後六時竟に江南戦線の華と散つた。高橋從軍僧は氏の斃れし場所に建てる墓標に頼きて手厚き讀經を捧げ身代り地藏を貼りつけて供養した。

氏や幼より唯一筋の至誠の道を力強く歩み來り軍隊教育に依り益々之を玉成し其優秀なる才能は觀測術に將た通信術に群を抜き克く將校勤務を代理して其手腕を縦横に發揮し以て所屬隊に赫々たる武功を奏せしむるに至つた。而して其最後に於ける上官に對する至情に至つては眞に皇軍精神の極地を見はして遺憾なかつた。ああ忠勇義烈鬼神を哭かしむる天晴れの勇士今や其人空し痛惜哀悼極まりなしと雖氏の功績芳名は千載の下皇軍戦史に輝き其英靈亦萬世に生きて護國の神と仰がれ其神靈は尙も皇國並に一家の將來に尊き加護を垂るるであらう。

氏は戦死の日砲兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 糸 乘 巖

剛膽俊敏なる鬼分隊長姚官屯激戦の華と散る。(壯烈)

氏は兵庫縣城崎郡清瀧村の人にして亡父を安藏母をくにと云ひ明治四十五年七月一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして着實事を行ふや不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和二年三月清瀧小學校高等科を卒業し續いて農業補習學校及青年訓練所へ通學し約六ヶ年にして各全科を卒業し昭和八年一月現役兵として鳥取歩隊聯隊へ入營間もなく滿洲事變の爲吉林省方面に出動し警備討伐の重任を果し功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり昭和九年四月内地歸還同年七月善行證書並に下士官適任證書を附與せられて歸隊となつた。在隊間の諸成績は優秀にして特に銃劍術及び射撃に熟達し各徽章登個を與へられ同年十一月歩兵伍長に任官した。除隊後は大阪府巡查教習所に入所し昭和十年八月今福警察署詰となり特高課勤務を経て巡查部長に補せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊に屬し森岡中隊の第三小隊第二分隊長として勇躍北支方面への征途に就いた。氏は内地出發の頃より足を痛め歩行困難であつたが北支到着後更に悪化せる爲己むなく野戰病院へ入院した。せめて滄州の會戦には是非参加したいと焦慮して居たが幸に恢復せる爲欣然として退院本隊へ復歸し馬廠の總攻撃に参加するを得た。敵は天然の地形を利用し之に堅固なる陣地を構築し頗る頑強なる抵抗を試みた。氏の所屬第八中隊は長野部隊の中堅となり周到なる準備を整へ疾風迅雷の攻撃を行つた。此際氏は篠つく如き敵の彈雨を物ともせず勇戦奮闘し森岡中隊の勇名を轟かせた。

所屬部隊は更に九月二十一日李家樓より沼田部隊と交代し第一線に立ち滄州攻撃に移つた。敵は名にし負ふ堅壘を數線

に構へ難攻不落を豪語して居た。所屬中隊は又も長野部隊の中堅として午後五時頃興濟鎮附近に展開した。敵は十重二十重の陣地から嵐の如き猛火を浴びせて來た。見渡す限りの平坦地身を寄する地物とてもなく逐次死傷者も出て來たが氏は部下を激勵し午後八時頃電光石火の如く敵第一線に突入して見事に之を撃退した。然るに敵は小癩にも衆を恃みて逆襲して來た。其處には氏等三ヶ分隊のみ進出して居たが氏は率先群がり襲ふ敵の眞只中に突入得意の武術を發揮し瞬く間に之



を撃退した。午後十一時所屬中隊は主力を提げて敵の堅壘人合庄の西北角に向ひ夜襲を敢行した。横は三里縦は一里もある壘々たる堅壘互に側防火を以て到る處に十字の弾の雨。大隊長以下殆んど將校幹部は負傷し戦友も次から次と倒され氏は一時小隊長代理となつた。阿鼻叫喚とも何んとも名状すべからざる慘烈の光景を現出したが氏は率先頭に起ちて敵の左側から突入し以て所屬小隊の突入を誘起した。部落に突入せる氏は家屋内より投げつける手榴弾を物とせず逐次に之を掃蕩して小隊の戦闘を容易ならしめ午後十一時三十分遂に部落を占領した。併し隊は其後三回に亘り逆襲して來た。就中午後十一時四十分及び同夜午前一時の二回は包圍的逆襲に轉じ來り其兵力實に我が十數倍に達したが氏は憤然として部下を激勵し接戦格闘敵數十名を刺殺し中隊戦勝に偉大なる貢獻を與へた。

二十二日午前八時第五中隊の來援を得戦死傷者を始末し更に一里程追撃し二十三日午後六時より姚官屯の敵陣地を攻撃すべく敵前七八百米に散開した。敵の陣地はトーチカ及掩蓋陣地を骨幹とし堅固に構築され周圍は巾約三米深さ二米以上

の水濠を設け更に鐵條網を張りまわし手もつけられぬ堅壘であつた。所屬中隊は暫く攻撃前進の時を待つ間も敵の迫撃砲弾は或は前方に或は後方に落下炸裂して瞬間に闇の夜を照らして居た。午後八時頃靜かに攻撃部隊が動き出した。決死隊が鐵條網破壊の爲前進する、部隊は水濠線に取りつき考へる間もなく皆水中に飛び込んで水中に突撃の機会を窺つた。待つ事八時間寒さと飢を忍びつつ二十四日午前四時遂に煙幕を構成して彈雨の中に突撃を敢行した。氏は今度こそは命はないのだと率先分隊を率ゐて敵彈雨飛の中に敵陣地に突入し縱横無盡に奮戦したが我が軍の將兵も多數尊い犠牲となつた。其後三十分の後系乗伍長戦死との報が傳へられた。分隊長々々と呼ぶ者又系乗伍長と呼ぶ者あちらこちらから聞えたが氏は百數十名の戦死者の横はる最先頭に冷たく横はつて居た。致命傷は右胸部の貫通銃創であつた。所屬隊は氏等の尊き犠牲に依り同日午前五時姚官屯を占領した。

氏や頭腦俊敏にして克く犬牙錯綜の紛戦にも敵情地形を明察し獨斷以て機宜に適し又部下を遇すること骨肉に勝り率先垂範率ゐて以て克く水火の中に飛び込んだ。又幹部將校の重傷に斃るとも志氣愈々旺盛機宜に適して小隊長代理となり冷徹果斷遂に難局を突破して戦勝の基礎を確立した。寔に是れ稀に見る優秀下士官にして又軍人の龜鑑たるものであつた。ああ今や斯の精悍有爲の幹部を喪ひしは痛嘆愛惜の情に堪へないが氏の功績たるや天晴れ其芳名と共に皇軍戦史に異彩を放ち不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國の前途に將た一家の將來に尊き加護佑助を垂るるであらう。氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 橋詰正一

重機關銃分隊長、黃村附近の戦闘に活躍して友軍の危急を救ふ

氏は長野縣小縣郡和田村の人にして父を寅松母をつると云ひ明治四十年二月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性純眞朴直にして恬淡而かも不言實行極めて責任觀念に強かつた。大正八年三月小縣郡和田尋常小學校を卒業の後東京立正中學校に入り昭和二年三月卒業更に東京農業大學專門部農學科に入學し昭和六年同校を卒業爾後下伊那郡大鹿村大河原青年學校の助教諭となつたが創立早々の學校にして前途多難の状態に在つたに拘はらず氏は主として同校の經營を掌り青年子弟の訓導に日夜倦む事なき熱意と努力を捧げ以つて其の基礎事業を確立した。昭和七年一月幹部候補生として歩兵第十五聯隊に入營し同年十一月歩兵伍長に任官し除隊となつた。

支那事變起るや氏は昭和十二年八月應召し遼山部隊に屬し長澤機關銃中隊の分隊長として勇躍征途に就いた。氏は北支到着後間もなく九月十六日南郷附近の敵を攻撃して之を撃破したが翌十七日夜半二時頃大石橋附近に於て敵は折からの豪雨を利用して大舉逆襲して來た。氏は憤然として神速に部下分隊を散開せしめ好機に投じて群がり襲ふ敵部隊に熾烈なる猛射を浴びせ之に殲滅的の大打撃を與へ撃退した。爾後主力機關銃隊或は配屬機關銃隊となり平漢線西側地區に沿ひ降雨泥濘飢渴を忍びて克く部下を勞はり之を激勵して猛追撃を續け所屬部隊の任務遂行に寄與する所甚大であつた。

斯くて馬頭鎮涿州を経て一意大冊河の線に向ひ一日平均約十里の強行軍を續け九月二十一日同河北岸地區に進出するを得た敵は大冊河の大障礙を利用し其の南岸地區に頗る堅固なる陣地を構成し少くも一ヶ月間は皇軍の南進を拒止し得ると豪語して居た。此の時氏の所屬部隊は敵主陣地の重要支據點たりし黃村の堅壘を攻撃すべき目的を以つて夜襲を決行する

事になつた。氏の所屬小隊は第一中隊の戦闘に協力を命ぜられ同中隊の右翼に連繫して攻撃陣地を占領し先づ正亥の敵陣地を攻撃した。敵は我が軍の接近を知るや忽ち全線猛烈なる火蓋を切つて頑強に抵抗し我が軍の前進活潑ならざるを見るや小癡にも正面より猛然と逆襲に轉じ且敵の掩蓋機關銃は熾烈なる側射を浴びせて來た。氏は冷靜沈着先づ逆襲部隊の中央附近を殲射せしめて將棋倒しの如く殲滅的威力を發揮せしめ次で側防機關銃に穿貫的の猛射を浴びせて之を沈黙せしめ



以つて見事に之を撃退した。然れども敵は新手の兵力を此の方面に増加し第一中隊の正面及び兩側より包圍的に逆襲し來り遂に苦戦に陥つた。氏は此の難局に遭遇するも毫も驚かず部下を激勵して先づ迅速に掩蓋機關銃を撲滅し次で逆襲部隊を猛射して之に大打撃を與へ以つて協力中隊の危急を救ひ且其の突撃を誘起した。中隊は之に力を得て間もなく突撃を敢行した。氏は機を失せず之と連繫して所望の地點に射撃陣地を占領せんと前進を起せし其の一刹那敵彈の爲め右肩部及び上膊部に貫通銃創を受け收容手當の上逐次後送終に内地に還送され大阪陸軍病院に於て加療中容態悪化し十月三十日悼ま

しくも聖戰の華と散つた。

氏は郷に在りては有爲の材幹を以つて育英事業に貢獻する所著大。出でて軍に従ふや能く分隊を掌握指揮して常に戦力を維持し一度び難局に遭遇するや俊敏剛膽以て重機關銃の全威力を發揚し協力部隊の危急を救出し且つ赫々たる戦果を収めしめた。寔に是れ皇軍幹部の本領を發揮して遺憾なく又一般軍民の鑑と云ふべきである。今や颯爽たる雄姿に接すべく

もなく痛恨極りなしと雖氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝き其不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國の前途に將た亦一家の將來に尊き加護佐助を垂るゝ事であらう。

氏は戦傷死の日を以て歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級 花園光雄

沈着勇敢なる彈藥分隊長二十里舖の逆襲を粉碎す

氏は鹿兒島市西別府町の人にして父を仁八亡母をキヨと云ひ大正四年六月十日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして志操堅確責任觀念に富み事に臨むや堅忍不拔の氣概を有し人に交はるや温和にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和五年三月鹿兒島市田上代用附屬小學校高等科を卒業し爾後家庭に在りて農業に従事したる後宮崎縣延岡市に於て齒科醫を學びて免狀を受け更に裁判所書記試験を目指して苦學した。小學生時代より劍道に興味を有し技逐年進歩を見劍道選手として名聲を擧げた。昭和十一年一月現役兵として久留米山砲聯隊へ入營し同年五月支那駐屯軍に編入替となり下士官候補者として採用せられ豊橋陸軍教導學校へ分遣を命ぜられた。

支那事變起るや原隊に復歸を命ぜられ小林部隊に屬し豎山中隊の中隊段列彈藥分隊長として聖戰に参加するに至つた。事變突發早々落代山、蘆溝橋附近の戰闘に参加し又豐臺及北京附近の警備に當り爾來津浦線に沿ひ前進を續けた。行けども行けども泥濘と汎濫の大平野にして氏等が部隊の勞苦たるや名狀すべからざるものがあつた。九月十日馬廠陣地を攻撃するに方り所屬中隊は午前六時桃家莊南方約二軒の二つ墓附近に陣地を推進したが氏は克く部下を激勵し彈雨と泥濘を冒

して勇敢機敏に彈藥を砲側に補充し又中隊段列内の彈藥整備に附近の警備に中隊戰闘に寄與せる所多く越へて九月二十日滄州附近の戰闘に於て所屬中隊が興濟鎮より豆店への轉進に方り水深馬腹に達し且水底軟弱の爲駄馬の顛倒するもの瀕發したが氏は率先泥中の人となり彈藥の濕潤を防がなが爲臂力を以て彈藥を高地に搬送する等機宜の行動に依り段列をして中隊主力に追及せしめ爾後前記區間を屢々往復して彈藥を放列陣地附近に集積する等攻撃準備に貢獻せる所甚大であつた。



救援する目的を以て山東方面より汽車輸送に依り北進し二十里舖、徐庄、黄河涯、後倉附近に進出しありし第一線に對し一齊に夜襲して來た。所屬中隊は二十里舖の北側に警急集合場を設けて部落内に宿營し村落の周圍に警戒哨を配置しありしが同月四日午後十一時半突如部落北側下士哨の急射撃に敵の來襲を知り豫定の戰闘配置に就いた。氏は同部落西側地區の警備を擔當中前三時半頃南方及西方の銃聲次第に烈しくなり殊に西方の敵は我西北部に迂回する模様もありし爲第二

小隊長は執銃兵及輕機關銃を統轄して此敵に對し氏は其輕機關銃を指揮して戰鬪準備を整へ又南方の敵に對しては友軍歩兵を以て應戰に當る事となつた。午前六時頃優勢なる敵は全く我を包圍するに至つた。氏は沈著剛膽部下の志氣を鼓舞し陣前僅かに四十米内外に群がり襲ふ敵部隊に俄然猛射を加へて殲滅的の大打撃を與へて之を撃退し又南方より來襲せる敵部隊も我が歩兵部隊の猛撃に依り敗走し東方に近迫せる敵亦動搖を來たし竟に敵の夜襲は完全に失敗に歸し敗走するに至つた。惜いかな氏は此激戰の末期に腹部に貫通銃創を受けて野戰病院に收容せられたが手當の甲斐もなく十月八日午前十一時四十分 陛下の萬歳を唱へ心靜かに戰線の華と散つた。

氏や報國の丹心に燃え奮つて下士官候補者を志願し修業半ばにして聖戰に参加した。而して堅忍不拔の精神は時と處とを問はず自づから垂範示教となり又温情克く部下及馬匹を愛護し分隊は期せずして舉止一體となり戰機に投合して其全力を發揮するを得た。而して二十里舖の苦境に處するも泰然自若克く輕機關銃を指揮して奮闘し敵は三百五十有餘の屍體を遺棄し僅かに身を以て遁走し所屬部隊を危地より脱却せしむるを得たのであつた。斯る忠誠勇武にして前途有爲の士を喪へるは轉た痛惜に堪へずと雖も其赫々たる武勳は其芳名と共に皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は昭和十二年十月一日を以て砲兵伍長に任官したが特に戰死の日を以て更に砲兵軍曹に進められ次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 千代四郎松

勇敢なる戰車長小隊長の危急を救はんとして奮戰玉碎す。(壯烈)

氏は北海道上川郡永山村の人にして父を奉作母をよせと稱し明治四十四年十二月二十九日に生れ未だ獨身であつた。性質溫順にして不屈不撓の氣概を有し責任觀念旺盛であつた。大正十五年三月永山尋常小學校を卒業し昭和七年十二月現役兵として歩兵第二十八聯隊へ入營し間もなく滿洲事變に参加し功に依り勳八等白色桐葉章を賜はり爾來累進して歩兵伍長に任ぜられた。

支那事變勃發するや矢口戰車部隊に應召し勇躍征途に就いた。斯くて北支に上陸するや第一線へ進出するに方り目的地に至る道路皆無の爲子牙河を遡江した。途中圖らずも大暴風雨に遭ひ戰車を積んだ民船が難破しかけたが此時氏は率先必死の奮勵努力に依り同船の顛覆を免かれしめ無事戰車を救出する事を得た。其後間もなく氏の所屬部隊は上海に轉進せられたが當時に於ける氏の献身的勇敢機敏の行動と不眠不休の精勵とは忽ち上下の信望を一身に集むるに至つた。

氏は中隊長矢口少尉の隸下第四小隊長頼本准尉の指揮に屬し第三車長として十一月二十四日西宅に集積しありし彈藥の運搬を命ぜられた。時恰も降雨の爲道路著しく不良となり戰車の運行頗る困難なる狀況であつたが氏は克く操縦手を指導し數日間に互り彈藥輸送の重任を遂行した。氏の責任觀念の旺盛なると不屈不撓の精神は茲にも明白に現はれたのであつた。

十一月二十六日所屬中隊は上海を距る西北方約二十里の無錫市街の敵を攻撃すべき命令に接した。氏は中隊の最後尾車長として小隊長車に續行し庄里を出發し無錫に向ひ奮進した。午前十一時中隊長車を先頭とする我が戰車隊は敵の射注ぐ

各種銃砲彈及手榴彈の雨を浴びながら快速力を利用しつゝ敵の數線陣地へ飛び込んだ。頑強に抵抗する敵を眼下に見おろして輕捷たる車輪下に敵兵を轢殺し周章狼狽して右往左往する敗敵は我が機關銃の猛射に依り打めして仕舞つた。此襲撃は實に勇猛果敢に行はれ素晴らしき戦果であつた。無錫市街を距る約二里の地點では敵歩兵約一ヶ隊の退路を遮断し數百名を斃し更に市内に進入して敵の背後を不意且猛烈に急襲して殆ど之を殲滅した。次で所屬中隊は無錫驛北側道より惠

山鎮方向に向ひ追撃し同部落北側附近迄前進したが其後惠山鎮丁巷道に轉進し梅園迄猛追撃を行つた。其間氏の勇猛果敢なる行動は一きわ目に立ち遺憾なく戦車の大威力を發揮した。

斯くて所屬小隊は更に反轉して中隊長車と共に無錫西門方面より中隊集合位置に通ずる道路に沿ひ敵の背後より急襲する目的を以て午後一時二十分梅園を出發した。所屬小隊は途中丁巷の敵を潰滅し更に敵陣地の背後より急襲して殘敵を掃蕩し前記西門方向に騷進した。折しもあれ西門より約千五百米附近の敵陣地前に差しかゝるや小隊長車は俄然敵の布設地雷に觸れ主要なる電氣裝置を破損し故障の排除困難となつた。氏は此有様を目撃するや速かに自己の車輛を小隊長車に併立せしめ附近敵陣地を猛射して小隊長の身邊を護衛した。斯る間に所屬小隊は中隊長力と連繫を失つたが敵は此際敵陣地の後方四百米に在りし機關銃の掩護射撃の下に喇叭を吹奏しつゝ一齊に逆襲して來た。あわれ小隊の運命は正に尺寸の間に差し迫つた。併し氏は愈々沈着益々剛腹に操縦手を激勵して勇戦し遂に該敵を撃退した。時に午後二時卅分である。然るに午後三時二十分頃城内方向より敗走



し來れる敵は小隊に對し小癩にも機銃射撃の掩護下に肉迫し來り手榴彈を投擲し包圍態勢を以て一齊攻撃に移つた。されど氏は更に動ずる處なく益々機關銃の威力を發揚し此敵をも撃退した。時に午時四時であつた。小隊長は感激の涙を以て氏の奮闘に感謝した。次で當方面の狀況を中隊長に報告すべく氏に之が傳達を命じた。然るに「氏は小隊長殿！ 私は上官を見棄てゝ中隊へは歸へません茲に止まつて群がる敵を猛射し一所に戦死します」と云へば小隊長は「有難う！ お前の心は嬉しいが小隊長を助ける道は中隊へ此狀況を急報するのが一番だ」との言葉に氏は澁々小隊長の許を去り重圍を突破して約千二百米程前進し一橋梁附近にさしかゝれば敵は家屋を破壊せる諸材料を以て我が前進を妨害せるを氏は之を物ともせず通過中城内方向より後退し來れる敵の爲再び重圍に陥り銃砲彈雨飛の間に泰然自若操縦手と協力して忽ち數十名の敵を射殺した。惜しいかな敵の一彈は車體を貫通して油槽に引火した。忽ち車内は火焰に吹かれつゝも氏は尙輕機關銃を以て敵を猛射したが早や氏も操縦手も前後約九時間の苦戦中不幸敵彈に依り致命傷を受け氏は固く銃把を握りしまゝ瞑目し車體附近には約六十名の敵屍體が遺棄されてあつた。

嗚呼氏や參戰以來百折不撓の犠牲的精神を發揮し皇國戰車隊の武威を中外に宣揚した。氏の決死的奮闘の結果は無錫附近の堅壘に據れる數萬の敵をして戰意を失はしめ遂に後退の已むなきに至らしめ殆んど我歩兵部隊をして一戦をも交へず無錫城に入場せしむるに至つた。其功績は正に皇軍江南戦史に異彩を放ち天晴れ軍人の龜鑑であつた。其名は大和櫻と諡はれて千古に芳ばしく其英靈は永世に生き尙も皇國並に一家の守護神となり其將來に加護を與へる事であらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 和田喜一

金鷄勳章を拜受すること二回東花園夜襲に玉碎す

氏は兵庫縣朝來郡和田山町の人にして父を房太郎母をちかと謂ひ明治四十三年四月二十八日の生れで妻すてとの間に一子英雄がある。資性温順にして寡言沈着而かも熱情に富み上下の信望厚かつた。大正十四年三月和田山町牧田小學校を卒業し更に大阪私立關西商業學校に學びて昭和四年三月卒業し爾後大阪化學研究所長鹽見高年氏の筆生として雇はれ入營時に及んだ。昭和六年一月徴兵として歩兵第四十聯隊に入營し熱心軍務に精勵して十二月上等兵に進み同月滿洲事變に出動し當初北滿一西坡附近に駐劄して匪賊討伐治安維持に従事し翌七年七月伍長勤務を命ぜられ昭和八年二月には混成歩兵第三十三旅團に配屬せられ熱河作戰に参加し赫々の殊勳を樹て同年十二月凱旋歩兵伍長に任ぜられて同月滿期除隊し功に依り勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召して長野部隊田巻中隊に編入せられ分隊長として勇躍征途に上つた。北支上陸後は該地方稀なる豪雨に到る所出水し道路は泥濘膝を没し軍隊行動の困難は名狀し難きものがあつたが氏等一同連日連夜夫れ等困苦と缺乏とを克服して難行軍を続け九月七日より馬廠攻撃に参加した。此の攻撃に於て氏の所屬隊は九日夜十時四十分姚家庄を出發し小王莊の敵陣地を夜襲すべく前進した。此の時氏は第一小隊第五分隊長として夜間困難なる地形に克く分隊を掌握し深さ身を没する水濠を涉り敵陣地に近迫し十日午前二時三十分中隊長の突撃の號令に敵の猛火を冒し勇敢に突撃した。然るに暗夜殊に地形錯雜し動々もすれば分隊は小隊長の手裡を脱せんとする狀況であつたが氏は終始小隊長と連絡し其の意圖の如く奮戦活躍して遂に小王莊部落を占領した。然るに敵は健氣にも四周より包圍逆襲し來り此の時も氏

は勇敢に分隊を指揮し敵を猛射して多大の損害を與へ其の撃退に大なる貢獻を爲した。馬廠攻略後續いて我が軍は瀋陽を攻撃した。此の戦闘に於て氏の所屬隊は東花園の敵陣地を夜襲すべく二十三日午後六時半一同決死輕裝して行動を開始した。敵の陣地は長時日を費して構築され陣地前には運河の障礙横はり鐵條網を設け頗る堅固なるものであつた。此の陣地に對しては我が軍は晝間重野砲及飛行機を以て猛撃猛爆を加へたのであつたが敵は我夜襲部隊の近接に小銃機關銃迫撃



砲を亂射し我が近迫に伴ひ愈々猛烈となつた。然かし中隊は之に應戰することなく敵火を冒し黙々として一擧敵第一線陣地の直前に達し運河を越へて突撃を準備した。工兵は勇敢に匍匐前進して鐵條網爆破を決行し夫れと同時に中隊長の號令一下全員敵陣に突入し奮戦格闘を続け小隊長以下多數の死傷を生ぜしが遂に敵陣地の一角を占領した。然るに右翼我が第一中隊正面の敵より背射を受くるに至り氏は直ちに獨斷附近の分隊を指揮して該敵を制壓し陣地の確保に努めありしが此時惜しくも左額部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げたのであつた。時に二十四日午前五時三十分にして其の後所屬

隊は氏等の勇戦奮闘尊き犠牲に敵が難攻不落と誇りし東花園陣地を占領し旭旗を曉風に翻すに至つたのであつた。

氏戰場に立ては沈着剛膽殊に機を見るに敏にして進んで難局に當り屢々偉勳を奏す。果せる哉曩には滿洲事變に殊勳を樹て金鷄勳章を賜はり今次再び聖戦に従ひ功六級金鷄勳章を拜受す。洵に之れ異數の事にして元より氏の剛膽勇武に由ると雖も陛下の御爲皇國の爲には一身一家を顧みず斃れて後止む忠勇義烈の然らしむる所である。此の如き忠誠の士を聖

戦の初期に喪へる事は洵に痛惜の極みである。然し士は百戦功なき軀全を耻づ。氏や華北の華と散りしと雖も其の赫々の武勳は皇軍戦史に牢記せられ其の勇名は共に千載に語り傳へられ忠魂は護國の神と祀られて神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族殊に其の愛子の將來に尊き佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵軍曹勳七等功六級 川村 和夫

決死敵前架橋を完遂し且トーチカを爆破して人柱となる。(壯烈)

氏は静岡縣富士郡鷹岡村の人にして父を和作母をつやと云ひ大正七年七月二十七日を以て生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして村内模範青年として衆望を擔つて居た。昭和五年三月鷹岡小學校高等科を卒業後直ちに縣立大宮農學校へ入學昭和八年三月同校を卒業し爾來家庭に在りて農業に従事して居た。昭和十年一月現役兵として工兵第三大隊へ入營し十一年六月工兵一等兵同十月工兵上等兵に進級し伍長勤務上等兵を命ぜられた。昭和十年十二月滿洲派遣部隊に編入せられ哈爾濱に駐屯して警備に任じ各種業務に寄與せる所大であつたが部隊交代の爲十一年四月内地歸還となつた。

支那事變勃發するや昭和十二年八月支那部隊に屬し工兵伍長に任ぜられ勇躍中支方面への征途に就いた。昭和十二年九月四日よりの張家上附近泗塘「クリーク」對岸の敵に對する渡河攻撃の際氏は中隊指揮班員として各種勤務に従事し常に積極的に任務を遂行し同月十一日第二小隊第三分隊長の遠藤伍長が重傷を負ふや氏は之に代り肉薄攻撃班長として揚行鎮の攻撃に参加した。揚行鎮の陥落するや田上部隊に配屬せられ火葬場小朱宅金家灣の攻撃には敵彈雨注の下に奮戦し九

月二十四日は鈴木少尉と共に架橋點の偵察中敵重砲の集中射撃を受け鈴木少尉は重傷を受けしも氏は瓦や土にて生埋めにはなつたが幸に輕微なる擦過傷に止まり任務を續行し二十七日には無線臺を占領し目指す劉家行の攻撃に移つた。

劉家行東側には萩涇クリークありて其幅約四十米水面の幅のみにても平均二十五米に及び上海街道上の永久橋は既に敵手に依つて破壊されあり而かも敵岸は制高の利を有し堅固なる「トーチカ」式陣地には無数の機關銃を配置し更に縱横に



交通壕を連絡し至嚴なる警戒の眼を光らして居たのであつた。此敵前に架橋せざれば攻撃奏功も覺束なき此場の狀況に中隊長今野大尉の全信賴を受け決死架橋班長を命ぜられしは氏であつた。氏は莽爾として御安心下さい此任務は立派に成功させて御覽に入れますと指揮下に入りし二十二名の決死の勇士を三班に區分し器材爆藥等を整備し終るや氏は嚴かに一同に對しお互は覺悟の決死隊だ、命は俺が預つたぞ、陛下の御爲に捧げてくれ、之が軍人としての本懐と思ふと訓示した。やがて闇に紛れて部署に就いた工兵決死隊、明くれば十月一日午前五時三十分戰場は俄然さわめき出した。友軍の攻撃

準備砲撃は股々として轟き渡り一彈又一彈敵陣地の要點が物凄く破壊されて行く濠々たる煙幕はクリークの水面を這ひのびて一尺先きも見得ぬ状態となつた。突如傳令が飛んで來て攻撃前進開始！ 工兵は直に架橋作業を開始すべしとの命令を傳へた。氏は左右の作業班にも合圖して自ら中央班を指揮し豫め組立てある輕徒橋を河岸に運搬させた。此時迄沈黙を守りし敵は我渡河作業を氣付いてか一齊に火蓋を切つて物凄き火が對岸から吐き初めた。我が砲彈の炸裂する瞬間に敵が

手榴彈を投げつけて居る姿も手に取る如く映つて居た。其間氏の部下は水中に飛び込んで急速な作業が着々と進捗し早くも二名の兵は對岸に泳ぎつき輕徒橋の一端に杭を打込む、橋は完成された。黑影が倒れる。氏の合圖に他の一部が電の如く渡橋して鐵條網が破壊され初めた。決死の歩兵隊が突撃に前進した。間髪を入れず發射器前へ！の號令に發射器手が挺進したが胸部を撃たれて打倒れた。豫備手が代つて之を携行し氏と共に對岸トーチカ前に肉薄したが豫備手の引いた引鐵が如何したのか點火せぬ氏は奪ふが如く之を手に取りて第二回目の引鐵を引けば物凄き火焰は迸りてトーチカ銃眼を完全に制壓するを得た。之を認めた敵は集中射撃に手榴彈の猛射を加へて來た。忽ち殘念の叫び聲が響く是れ氏と磯谷一等兵がどつと倒れた瞬間にして午前六時頃であつた。爆藥！と尙も氏の悲壯の號令が轟く。爆藥手は電光の如く突進して爆藥を該銃眼に押入れて點火して後退した。幾秒かの後一大音響と共にトーチカが潰滅に歸した。續いて歩兵の決死隊により壯烈なる白兵戦は展開され萬歲聲裡に曉霧も晴れて劉家行の堅壘上に日章旗の翻翻たるを認むるを得た。彼我の死屍累々たる中に氏も打倒れて萬歲を唱へて居た。部下の清水上等兵の手を取りて「作業は成功したか」と尋ねた。分隊長！喜んで下さい橋も三本共架けられトーチカも破壊した。更に鐵條網に三個の突撃路を開設完了任務は成功しました。分隊長！あの関の聲を聞いて下さいと答へれば氏は涙と共に萬歲を唱へた。やがて擔架で後送される時清水！後は君に頼むぞ俺はもう駄目だと思ふ吳々も君に頼んだぞと全身血塗磨となりて野戰病院に收容された。氏の致命傷は砲彈の爲右下腿部骨折砲彈破片創であつた。氏は漸次精神朦朧となつたが尙も「作業は完成したか」を繰返へした。立會の軍醫は暗涙に咽びつゝ川村安心せ！君達の作業は完全に成功した」と答ふる語に氏は莞爾として 天皇陛下萬歲と絶叫して永眠した。時正に十月一日夜半であつた。

あゝ氏は一下士官ながら將校勤務に服し指揮適切にして剛膽機敏よく皇軍工兵の本領を發揮し赫々たる武勳を奏し當面

の歩兵部隊の爲戰勝の途を開拓し得たのである。其不朽の功績は天晴れ皇軍江南戰史に燦として輝き其芳名は軍人の鑑として千載に謳歌せらるべく其英靈や万世に生き皇國並に一家の守護神として限りなき加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日工兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 吉田 茂

屢々難局を打開して勇戰奮闘の後職に殉ず

氏は群馬縣佐波郡豐受村の人父を伴吉母をすいと云ひ大正二年二月二十日生れで未だ獨身であつた。性温和にして忠實殊に孝悌の道に厚く人に敬愛せられて居た。今事變の爲め出征するに當つては既に生還を期せず密かに自己の頭髮を切りて姉に托し一死報國の決意を固めて居た。又趣味として園藝飼鳥を好み家業の餘暇之れに親んだが此の優しき心は總て軍隊に入りても上下より愛された。氏は亦日頃身心の鍛鍊を怠らず殊に短距離競走に得意で屢々縣の大會に郡代表として出場し郷黨の名聲を擧げた。昭和二年三月豐受尋常高等小學校を卒業し、昭和九年一月現役兵として歩兵第六聯隊に入隊した。入隊後は熱心殊に眞面目に軍務に精勵し成績良好にして其の年四月には滿洲駐劄隊として派遣せられ穆稜附近に於て北滿の第一線警備に任ずること約二ヶ年此の間酷寒炎暑を冒し一觸即發の形勢にある環境に於て終始緊張克く其の任を完了し殊に同年五月には北街方面に六月には琿春方面に十月には東寧方面に於ける匪賊討伐戰に参加し困苦と缺乏を忍びて常に勇敢に奮闘し優秀なる成績を擧げ上等兵となり昭和十一年一月内地に歸還したが伍長に任ぜられ善行證書を授けられて除隊し更に駐滿間の勳功によりて勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はつた。

昭和十二年七月支那事變起るや八月應召し森田部隊に編入せられ分隊長として勇躍北支方面の征途に上つた。時恰も盛夏にて大陸の暑氣は灼くが如く殊に稀有の大雨に到る所出水し軍隊の行動頗る困難であつたが氏は常に部下を激勵し卒先難に當りて範を示し九月十二日には所屬隊は永定河右岸の敵を攻撃した。此の時氏は中隊の最右翼分隊長として猛烈なる敵弾火に克く部下を掌握し永定河の濁流を涉り勇猛果敢に攻撃前進し遂に敵を撃退して追撃に移り該方面縦隊の尖兵に屬



して門村に向ひ急追した。續いて所屬大隊は十五日拒馬河畔に達し同地にありし一部の敵を攻撃した。此際氏の中隊は豫備隊であつたが氏の小隊は右方一部落の殘敵掃蕩を命ぜられた。氏は分隊を率ゐる殘敵出沒する危険地域に進入し隈なく掃蕩して便衣隊數名を捕獲して歸還した。而して中隊は翌十八日蔣各莊の部落を占領したが敵は終夜に亘り逆襲し來り氏は一睡もせず勇敢に防戦に努め又中隊長の命により側背の搜索警戒に任し其責務を全うした。

所屬隊は翌十七日より澤畔店附近の敵を攻撃した。此際氏の屬する中隊は當初聯隊の豫備隊なりしが戦況の進展に伴ひて第一線に増加せられ南方平安店方向に戦果を擴張し氏の分隊は其難局に當り克く奮闘した。斯くて二十日敵を撃退し澤畔店を占領し引續き同村内の掃蕩を行ひ夜に入りては連續の激戦に綿の如く疲勞せる身を休む暇もなく下士官として終夜全隊の爲め警戒に任じた。然るに翌二十一日東莊附近にて我騎兵部隊が敵の攻撃を受け苦戦中なりとの報に氏の中隊は急進之れに赴いた。此時氏は特に撰ばれて林少尉の指揮する斥候の一員となり西莊附近の敵情搜索に任じ氏は勇敢にも敵中深く潜入

して有利の情報を齎らした。斯くて中隊は騎兵部隊を援助したる後軍旗中隊となり二十一日には大冊河を涉り黃村附近を占領した。然るに敵は數回に亘り猛烈なる逆襲を企て或時は危殆にさへ直面したか氏は克く分隊を指揮して奮闘し次で二十三日黃村附近の殘敵を掃蕩し破竹の勢を以て保定に向ひ追撃に移つた。然るに保定は我が部隊の後方遮斷と主力方面の猛攻により二十四日脆くも陥落したので更に急進し十月十日には石家莊を陥れ十五日には順徳を攻略して氏の部隊は殘敵を驅逐しつゝ追撃に追撃を重ね毎日八九里を踏破し身心の疲勞も極度に達し而かも斯る急進に我が後方補給は追隨するを得ず粟を取り生芋を齎り屢々大根人參等を以て餓を凌いで追撃を續けたのであつた。

十月二十八日氏の屬する大隊は豊安附近に於て洹河の渡河點を確保し中隊は范庄の部落を占領した。而て翌二十九日夜氏は下士官候となり彰徳方面の敵情を搜索すべき命を受け部下を率ゐて困難なる地域を踏破し巧に危機を避けて敵に接近し具に其情況を視察して頗る有力なる情報を中隊長に提出した。然るに三十日拂曉に至るや敵は有力なる部隊を以て突如我が陣地前に攻撃し來り我は一時危殆に瀕したが全員奮闘し氏亦勇戦克く部下を指揮し遂に敵は多大の損害を受けて敗退した。然るに午後二時頃再び敵は猛烈なる砲撃を加へた後全線一齊に攻撃し來り逐次我を包圍する形勢に立至つた。氏は散兵壕内に於て部下を激勵し毅然として射撃の指揮をして居たが偶々飛來せる一砲弾は氏を去る約七米突許りの所に落下炸裂し其破片は氏の兩手と右脚に輕傷を與へた。勇敢なる氏は鮮血絨衣を染むるも意とせず戦闘を續けて居た。而かも此時氏は正面の敵主力が我れに側面を現はしある事を看破し巧みに輕機關銃を移動して之に猛烈なる側射を加へ敵は多大の損害に竟に攻撃を斷念し次で潰亂に陥るに至つた事は氏の此機敏なる側射の結果に俟つ所大なるものあり此の際に於ける氏の適切なる處置は正に拔群の功績と稱すべきである。

次で大隊は西梁村北方を占領して彰徳の前面に對する攻撃を準備して居たが十一月二日より攻撃前進を起し氏は第一線

中央中隊の最右翼分隊長として前進した。然るに正面の敵は若干の抵抗をなしつゝ後退を始めた爲め間もなく西梁村を占領し其南方に進出した。此時梁家邵村南側より猛烈なる敵の側射を受け死傷續出し大隊の前進は著しく困難に陥つた。又同時に左側の中隊は氏の中隊より已に四五百米突も前方に進出して甚だ苦戦の情態にあつた。之を知つた氏の中隊長は右方より敵を包圍する如く攻撃を進捗せしめんとした。氏は中隊長の此の意圖を知るや決然猛烈なる敵弾下を分隊を率ゐ躍進又躍進し阿修羅の如く前進し爲めに敵弾は氏の分隊に集中し來つたが之れが爲め隣接他部隊の前進を容易ならしめ中隊長の意圖の如く攻撃を進捗せしめ竟に敵は後退し潰亂に陥るに至つた然るに惜むべし中隊が小坂部落の北方約二百米突の地點に進出した時先頭にあつた氏は頭部に貫通銃創を受け追がの勇士も此處に壯烈なる戦死を遂げた。

氏は責任觀念旺盛にして義務心に厚く常に難局に當りて直行し又部下に對しては溢るゝ如き温情を以て臨み爲に氏が戦死するや部下一同は悲憤の涙に咽んだとの事である。又部下の一員は「吉田伍長の英靈に捧ぐ」と題して長編の詩文をもつて氏の父に送り敬慕哀悼の情を訴へてゐる。

噫氏今や彰徳城外の華と散り其壯容に接し難きをうらむ。然れども其の赫々たる武勳は皇軍戦史に牢記せられて其勇名は千載に語り傳へられ英靈は不滅に生き護國の神と仰がれ靈徳は更に皇國並に一家を守護するであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進められ次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 高見芳隆

模範的分隊長、豆店馬落坡に偉勳を奏して玉碎す



氏は兵庫縣加西郡多賀野村の人にして父を芳一亡母をちかと云ひ大正三年一月二十一日生れで未だ獨身であつた。資性豪邁奮達にして物に動せず磊落邊幅を飾らず其生活簡素にして常に所信を斷行して憚らざる實踐躬行の人であつた。其分隊長として部下に臨むや骨肉の情を以てし分隊の團結強きこと中隊第一位であつた。大正十五年三月大庄尋常小學校卒業引續き辰馬學院甲陽中學校に入り昭和六年三月同校卒業尙引續き縣立神戸高等商業學校に入校同年三月同校を卒業した。氏は小學校以來一日の缺席もなく學業の成績優良又柔道は二段の技倆を有してゐた。其後關西ベイント株式會社東京支店に入社勤務し同十一年二月補缺として姫路歩兵聯隊に入營幹部候補生に採用せられ歩兵伍長に任官の上同十二年一月除隊した。在隊間特に劍術の技能優秀にして大隊長より賞状を附與せられた。

支那事變起るや間もなく應召し沼田部隊第二中隊に編入第二小隊第一分隊長として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後陣中閑を得て陣中の月と題し作歌せる其の一節に「彈丸雨飛の唯中に生死の境幾そたび。陛下に捧げし此身には親もなければ

家もなし。」茂る高粱押分けて天地も碎くる喊聲に、白刃かざして躍り込む勇士の眞情誰か知る」とあり出陣以來氏が決死奮戦しつゝある状態を想察し得るのである。九月九日の丁莊を中心として陣地を構築せる敵を夜襲する目的を以て所屬中隊は午後十一時陳官屯より行動を起し濁水胸を浸す水中を難行軍すること數里東官莊に着し軍旗に最後の訣別を爲したる後十日午前四時四十分攻撃前進を開始して逐次敵陣地に近迫し愈々陣地前に肉薄し中隊突撃の命令下るや氏は敵彈雨飛の

中を物ともせず克く部下を掌握して敢然第一陣地に突入り續き第二陣地を突破し次で斜左高粱畑に敗退せし敵の猛烈なる側射を受けつゝも決然として分隊の先頭に立ち勇躍第三線陣地たる膝莊子南端に突撃し敵が堅固に防禦工事を施して頑強に抵抗せる數線陣地を午前七時完全に占領することが出来た。本戦闘に於ける氏の指揮せる分隊の活躍は實に目覚しきものがあつた。次いで九月十九日午後三時より所屬中隊は行動を起し午後四時三十分豆店の敵に對し攻撃前進の命令下るや既設陣地よりする敵の猛烈なる射撃を身邊に受けつゝも氏は之を意とせず克く部下を掌握し的確なる射撃指揮を以て敵を制壓し率先々頭に立ちて勇進を重ね其猛攻により迂回隊の前進を容易ならしめ益々敵に接近し敵前百米敵が陣地前の高梁を刈り取りたる射界清掃地帯に達するや敵火益々熾烈となり動もすれば前進遲滞せんとせしを以てかくと見たる氏は奮然自ら先頭に立ち部下の志氣を鼓舞激勵し攻撃を續行して勇躍敵陣地に突入り午後五時三十分堅固に設備して占據せる豆店の敵陣地を占領した。

九月二十一日夜所屬隊は敵の堅陣馬落坡夜襲の爲午後十一時軍旗に最期の訣別を爲し遙かに皇居を遙拜し然る後肅々として前進を開始した。此の時所屬小隊は尖兵となり氏は其路上斥候長となり前進し敵の監視兵を驅逐しつゝ前進すること二千米忽ち二十數名の守備せる展望哨陣地に會するや獨斷一擧突入之を占領し以後後續部隊の前進を容易ならしめ次で中隊展開するや第一線小隊の火線分隊長として攻撃前進した。敵はトーチカ陣地帯より月明を利用して猛烈なる亂射を開始し前後左右に落下する砲彈の炸裂と深き沼地の高粱畑とは益々前進を困難ならしめ戦友相次で斃るゝに至りしが氏は之に屈せず尙前進を續行し宛も鬼神の如く猛虎の如き勢を以て敵陣地前五十米に前進し將に突入せんとせし時氏亦大腿部に負傷して倒れた。然かし剛氣の氏は之にも屈せず起ち上らんとせしが其利那無念又もや頭部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し氏等の勇戦奮闘に依り聯隊は歴史的に比類なき夜襲に成功するに至つた。

氏の出陣するや大君の御爲に決死奮闘せんとせる覺悟牢固たるものがあつた。其盡忠至誠の進る所敵を見て勇み危きを見て赴き死を見ること歸するが如く頗る勇敢率先陣頭に立ち部下を激勵し掌握確實指揮的確其突進振は恰も鬼神の如く猛虎の如しと稱せられ敵の心膽を寒からしめ毎戦拔群の功を奏し將兵一同の推賞措かざる所であつた。實に氏の如きは忠に志して忠に死し義に志して義に斃れし人と云ふべく征戰中途氏の如き得難き分隊長を喪ふ痛恨盡きざるも其赫々の武勳は青史に輝き千載に誦はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇猷を扶翼し奉り遺族の將來に尊き佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 田中榮吉

姚官屯夜襲に分隊殆ど全滅して敵陣地一角を奪取す

氏は鳥取縣八頭郡池田村の人、明治四十四年十一月十三日の生れ昭和六年田中文次郎孫清枝の婿養子となり榮美子、昇、政義の一女二男を擧げた。資性濃厚質實にして克己心に富み責任觀念強く又頭腦明晰果斷の風があつた。大正十四年三月池田尋常高等小學校を優等を以て卒業し爾後農業に従事し昭和七年一月徴兵として歩兵第四十聯隊に入營し熱心軍務に精勵して其の第一期教育を終るや四月滿洲事變に出勤し北滿各地に轉戦して武勳を樹て昭和九年一月歩兵伍長に任ぜられ同年四月凱旋し功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はり除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召し長野部隊篠原隊に編入せられ分隊長として勇躍北支へ向け征途に上つた。北支に

上陸するや該地方一帯は稀なる豪雨の直後にして到る所出水し道路は泥濘膝を没し軍隊の行動頗る困難であつたが氏は克く困苦と戦ひ缺乏に堪へ部下を激勵して連日其の難行軍を続け九月七日より馬廠附近攻撃の際は所屬隊は丁莊に進出し十日流河鎮を十三日興濟鎮を占據した當時氏は分隊長として克く小隊長を輔佐し部下を愛護し又激勵し敵火の下困苦と缺乏を克服しつゝ勇敢に活躍し所屬隊の戦勝に寄與する所大なるものがあつた。續いて滄州の攻撃開始せらるゝや所屬部隊



は二十一日人合庄の敵を攻撃した。然るに敵の陣地は頗る堅固にして竟に夜襲を以て攻略することゝなつた。斯くして所屬隊は午後六時行動を開始し一步一步靜肅行進を以て敵に近接し敵陣地前監視部隊を驅逐し午後十一時其の獨立家屋の線より進出するや敵は其の本陣地より一齊に猛射を浴びせて來た、然かし中隊は敵火の下黙々として尙前進し敵陣地前百米附近に達するや敵火益々猛烈となり且陣地前には幅四米深さ二米以上の水濠横はり其の後方には鐵條網を設け側防機關は巧に設置せられてあつた。所屬隊は直に水濠に飛び込み之を越へ側防機關を制壓すると共に鐵條網破壊班は前進し其の破壊を終るや中隊長以下一擧敵陣に突入した。氏は小隊長の號令と共に克く部下を掌握し之を激勵して勇猛果敢に突撃し遂に敵陣地を奪取した。然るに敵は健氣にも二回に亘り逆襲して來たが氏等克く勇戦奮闘多大の損害を與へて之を撃退し引續き人合庄部落の土壁に據り頑強に抵抗する敵を徹宵掃蕩して二十二日午前九時完全に人合庄を占領した。續いて所屬隊は部隊を整頓し息つく追もなく其夜更に姚官屯の敵を夜襲すべく午後六時人合庄の線を出發した。姚官屯の敵陣地は人合

庄と同様其の前方には幅六、七米深さ二米餘の水濠横はり鐵條網を設け頗る堅固であつたが所屬隊は敵火を冒して水濠の線に達し隊伍を整へ對岸に涉り鐵條網破壊班の突撃路開設を月の没するを待ち午前四時突撃を敢行すべく準備して居た。其の位置は敵前約五十米にして此の時氏は分隊を率ゐ中隊長の右にあり氏の部下北脇光治一等兵は中隊長と相並び敵情視察中頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。氏は之を見るや屍にとりつき「北脇お前一人は殺さんぞ今に仇を討つてやる自分もすぐお前の後から死んで行くぞ」と涙を流しつゝ叫ぶのであつた。之を見た傍の篠原中隊長は「田中分隊長ツ泣くんじやないツ」と怒鳴りながら中隊長の頬には赤熱い涙が流れて居た。斯くして月没するや中隊長以下一同は猛然敵陣に突入し氏は最愛の部下北脇の仇とばかり銳劍を揮つて敵を突きまくり遂に敵陣の一角を占領し更に頑強に抵抗する殘敵を驅逐中惜しくも胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。此の夜襲に於て篠原中隊長亦重傷を負ひ氏の分隊は一名生存一名重傷の外は分隊長以下全員壯烈なる戦死を遂げたのであつた。然かし氏等の犠牲奮闘に午前五時姚官屯を占領し日章旗は翻揚として今や上らんとする東の方旭光に映じて翻るのであつた。

氏は九月十七日陳劉庄に於て愈々滄州攻撃の開始せらるゝ事を知るや身は敵陣に粉碎を期し毛髮及爪を切り之を中隊長重要行李に預け又妻に宛て諄々たる遺書を送くる。遺書は十一ヶ條よりなり如何に氏が用意周到にして決死の覺悟鞏固であつたかゞ偲ばれ涙なしには見る事が出来ない。三人の愛子が生長の後此遺書を讀み本書に依つて其の赫々の武勳と壯烈なる戦死の状を知る時如何に感奮興起するであらうか。洵に氏の行爲は皇國の爲に家を忘れ身を捨てて盡瘁したもので眞に忠勇義烈誠私奉公の士にあらざれば能はざる所である。噫聖戰の初期此の如き忠烈の士を喪ふ洵に痛惜の極みである。然かし氏の赫々の武勳と其の忠勇義烈は軍民の龜鑑として不朽に語り傳へられ其の英靈は不滅に生き護國の神と祀られ神靈は尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として愛する妻子の上に絶えず照覽佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進められ勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 谷田 實

剛勇沈着にして優勢なる敵の逆襲を破砕す



に就いた。

斯くて昭和十二年十一月中旬江南戦線に到着富田隊第二小隊第一分隊長として四里橋附近の戦闘に参加した。十一月十

氏は茨城縣行方郡小高村の人にして明治四十四年九月十日生である。父を義雄母をすせと云ひ妻くらとの間に一子千〇を擧げた。性質寡黙實行の人にして特に剣道を好んで居つた。大正十五年三月郷里の小學校高等科を卒業し爾後家庭にありて父母を扶け農業に精勵し孝養を怠らなかつた。昭和七年一月歩兵第二聯隊に入營し同年六月滿洲事變の爲渡滿同年十二月上等兵に任ぜられ翌八年十二月伍長勤務を命ぜられた。在滿勤務間各地に移動し警備討匪の功に依り勳八等白色桐葉章從軍記章並に建國功勞章を賜はり翌九年五月原隊歸還善行證書及下士適任證書を附與せられ滿期除隊となつた。同年十月千葉縣巡查教習所に入り十年二月卒業八日市場警察署勤務を命ぜられ服務中支那事變に應召し千葉部隊に屬し勇躍征途

五日所屬中隊は歩兵砲隊の掩護を命ぜられ午前三時行動を起し三官堂を経て四里橋を攻撃するに決した。氏は此戦闘に方り勇猛果敢に敵を攻撃中敵亦逆襲に轉じ潮の如く殺到し其勢侮るべからざるものがあつたが氏は毅然として部下を激勵し沈着克く輕機關銃の全威力を發揚して敵に多大なる損害を與へ敵の逆襲を破砕し遂に其企圖を放棄し潰走せしむるに至つた。爾後氏は所屬中隊と共に敵を急追せんが爲追撃前進に移つたが其間敵敗殘兵の狙撃を受け胸部に首貫銃創を受け午前三時三十分惜くも戦場の華と散つた。

氏や剛勇にして沈着、頭腦明敏にして克く戦機を看破し體力旺盛にして武技に習熟し部下の指揮統御亦適確にして所屬部隊の信望厚く聖戦の前途氏の活躍に俟つ所甚だ多かりしに四里橋の一戦に玉碎せるは惜みても尙餘りある次第である。さり乍ら所屬部隊が其初期の参戦に方り氏の勇猛果敢なる攻撃動作を目撃し深き感激と愈々志氣振作の動機を得たるは明かたる處にして右戦闘經過中逆襲撃退の偉大なる功績と共に皇軍戦勝の礎石たるを失はぬ。噫氏や朝顔の命にも似て其参戦經過は短かくとも其功績は不朽のものであつた。今や護國の神として更に皇軍を加護すべきは勿論遺族の守護神として悠久に生き其盡忠報國の一念は末永く子孫の胸に刻みつけるであらう。

氏は應召後直に伍長に任ぜられたが戦死の日を以て更に歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 高根澤時次

誠實勇敢なる分隊長、敵の側防機關を制壓して突撃を容易にす

氏は栃木縣那須郡那須村の人にして父を鍋五郎母をセンと云ひ明治四十三年八月十七日に生れ妻マサとの間に長女弘子を擧げた。性温良素朴にして責任觀念強く事に臨みて剛毅果斷であつた。大正十四年三月那須村大島小學校高等科を卒業し爾後約一ヶ年白河町佐藤氏に就き勉學し同十五年四月より那須村役場書記を奉職して入營時に及んだ。昭和五年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊へ入營し成績優秀にして同年十二月伍長勤務上等兵を命ぜられ昭和七年二月支派遣部隊に屬して上海方面に出動し南翔鎮附近の警備に任じ更に同年五月北滿方面に派遣を命ぜられ各地に轉戦し不逞の匪賊を討伐し又治安の維持に任じ同八年十二月内地歸還の上歩兵伍長に任じ滿期除隊となり再び那須村役場書記として奉職して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊に屬し齋藤中隊の分隊長として勇躍征途に就いた。北支到着以來隆暑泥濘飢渴を克服しつゝ敵を永定河畔に擊破し保定の堅壘を攻略し次で石家莊附近の敵を攻撃する爲十月一日保定を出發し滹沱河畔に向ひ前進した。氏は長途の難行軍を意とせず率先垂範部下を激勵掌握し常に分隊の戦力を維持し又同月三日朝定縣北方の橋梁破壊し其一部が流失せる際は寒冷を意とせず全裸體となつて工兵の作業を援助する等積極的に活躍した。

十月上旬滹沱河附近の戰鬪に於ては所屬中隊は占村を占領し陳村附近の敵情搜索に従事したが氏は其際占村部落内の殘敵掃蕩に或は陳村附近の敵情搜索に將又砲兵隊及戰車隊の爲道路構築に任ずる等渡河戰鬪準備に貢獻せる所甚だ多かつた。

十月十一日石家莊の南方約十五里に在る院家村附近の戰鬪に於ては所屬中隊の左第一線たる第三小隊第一分隊長として熾烈なる敵火を冒し率先攻撃前進し以て常に小隊の前進を誘起し射撃指揮亦極めて適切にして敵に多大なる損害を與へ又絶えず敵情に注意して其變化を機敏に小隊長に報告して其戰鬪指揮を容易ならしめた。小隊が愈々敵に近迫し將に突撃を敢行せんとせし際突如院家村東南角に敵の側防機關銃現はれ我が第一線を猛射せしを以て氏は直に輕機關銃手をして之を

射撃せしめたが其射撃意の如くならず小隊の突撃困難と見たる氏は自ら銃を取りて之を猛射し瞬間にして此敵を制壓した。惜しいかな此際氏は頭部に擦過銃創を受けた。此時氏は小隊長殿心配ありませんとどんどん前進して下さいと極めて元氣であつたが案外の重傷にして腦膜炎を併發し野戰病院に收容され十月十五日惜くも華北戦線の華と散つた。

氏は曩に滿洲事變に赫々たる武勳を奏し又今次聖戰に参加し志氣常に旺盛部下を愛撫し分隊を打つて一丸となし又上司に事へて敬虔にして上下の信頼厚かつた。氏の陣没するや所屬幸村小隊長は悄然として頭を垂れ終日食を採らず「ああ我が片腕の模範分隊長を喪つた」と嘆息したと云ふ事である。斯る有爲忠勇の士を喪ひしは眞に愛惜禁ずる能はずと雖氏の功績たるや皇軍戰史に牢記せられて芳名を不朽に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈尙も皇國並に一家特に愛子の將來に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は曩に滿洲事變の功に依り勳七等旭日章並に功七級金鷄勳章を賜つたが戦死の日歩兵軍曹に進級し功六級金鷄勳章を



賜った。

下士官之部

一二八

陸軍衛生兵軍曹勳七等功六級 武田亮吉

衛生兵、一身を犠牲として多数傷病者の危急を救ふ

氏は京都市上京区上立賣通淨福寺西蛭子町の人にして實父を外村法聲(亡)實母をチカと云ひ明治三十四年十一月二十四日に生れて後亡武田孫一郎及きぬの養子となり亡妻イヨとの間に勝弘、幸枝の二愛子を擧げた。資性温良にして實直、責任觀念極めて旺盛の人であつた。大正十年十二月徴兵として臺灣守備歩兵第二聯隊に入營し撰まれて衛生兵となり成績優秀にして上等兵を命ぜられ大正十二年看護長適任證書を授與せられて除隊した。

支那事變起るや昭和十二年九月應召家原野戰豫備病院に屬し藥劑部勤務員として勇躍中支方面への征途に就いた。上海上陸後所屬隊は黃浦江岸の廢墟の如き地點に病院を開設した。時恰も大場鎮附近の戰鬪最も激烈を極め日々多数の傷病者陸續として入院し氏等の勤務亦愈々繁激となり屢々夜を徹して事務に従事する情況となつた。氏は其間克く献身的に其職を盡して遺漏なかつた。然るに病院の位置は黃浦江の岸壁上に在りて浦東の敵眼に暴露しありし爲病院開設の當夜より屢々敵機關銃の射撃を受け且又敵飛行機は國際法規を無視し屢々赤十字旗を目標として爆撃を敢てし尙時々舉動不審の支那人構内に潛入し來る等不安なる情況に所屬隊は特に夜間の直接警戒を至嚴に行ふ爲衛生兵より成る衛兵を配置した。十月十七日氏は晝間の繁激なる勤務を終り夜に入りて衛生兵二名を指揮し衛兵として病院構内の直接警戒に任じた。午後八時頃より十一時頃に亘る間敵飛行機は再三上空に去來して黃浦江上の我警戒艦と交戦したるが流石に病院を襲ふ事はなくし

て止みたるも氏は尙も部下を激勵して上空並に地上の警戒を續けたのであつた。

然るに同夜午前二時頃浦東方面より病院方面に直進し來る敵飛行機を認め正に病院を襲ふものと判断し氏は在院多数の傷病者の危期迫る事を豫感し敏速に本部及病室に急報して燈火管制の確實を計り又傷病者を警戒の態勢に移すべく懸命の努力を拂ひつゝありしが果然間もなく病院上空に敵機來襲し暴戻無道にも爆弾を投下した。其一弾は不幸氏が身邊に落下

炸裂して弾片四散し爲に氏は頭部に一破片を又其他にも數個の破片を受けて打倒れ直ちに病室に收容せられ手厚き治療看護を受けたが重傷如何ともなし難く翌十九日惜しくも江南の華と散つた。

氏や天性友情に厚く熱誠事に當るの士、郷に在ると軍に従ふとを問はず其生涯を通じて變はることはなかつた。一度聖戰に従ふや克く重責を自覺し晝夜衛生業務に従事し眞に粉骨碎身の誠を致し上下の信頼と傷病將兵一同の深き感謝とを受けて居た。寔に是れ皇軍衛生兵の模範と稱すべきであつた。然るに圖らずも暴戻非道の敵機爆彈の爲玉碎せるは神人共に悲憤痛惜極りなき所なると共に氏が機宜に適する報告と敏活なる行動とに依り多数傷病將兵の危害を免がれしめたる功績に對しては深甚なる感謝と敬意を表せざるを得ない。あゝ今や其人空しと雖も氏が赫々たる功績は天晴れ皇軍衛生戰史に輝き其名は語り傳へて千載に芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國の前途に又一家殊に兩親を喪ひたる二愛子の將來に尊き加護照覽を垂るゝ事であらう。



下士官之部

一二九

氏は十月十七日を以て衛生兵伍長に任官し更に破格にも戦死の日を以て衛生兵軍曹に進められ次で勳七等に叙じ青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 坪倉茂男

沈着剛脆克く戦機を明察し戦勝の端を拓きたる分隊長

氏は鳥取縣日野郡黒坂町の人にして父を川上常太郎母をうめのと云ひ明治四十五年二月二十一日に生れ坪倉家の養子となり亡養父を清作養母をまさと云ひ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして酒煙草を嗜まず孝心も深くして世人に對しても極めて親切で一般より愛敬を受けて居た。昭和四年三月鳥取縣立日野農林學校を又昭和八年三月鳥取高等農業學校農學科を卒業し農林省農事試験場に就職したが研究心極めて旺盛職務に忠實にして上司の信頼を受け同年十二月幹部候補生として松江歩兵聯隊へ入隊し間もなく滿洲事變の爲渡滿し依蘭佳木斯地方の匪賊討伐に従事し翌九年五月歩兵伍長に任じ除隊となり功を以て勳八等瑞寶章を賜はつた。除隊後は宮崎縣農林技手となり益々雄腕を發揮して居た。

支那事變起るや福榮部隊に屬し村山中隊の分隊長として勇躍征途に就いた。八月中旬北支到着以來降雨泥濘の難行軍を續け八月二十四日先遣部隊に屬し獨流鎮附近に進出せしが同地に守備しありし他部隊の小隊が敗殘兵の包圍攻路を受け連絡が絶えて居た。所屬中隊は之れが救援の爲直に展開し攻撃を開始した。所屬小隊は左翼第一線となりしが氏は克く分隊を掌握指揮し風雨を冒し膝を溲する泥濘を踏破し水濠を超え雨と降り來る敵彈を物ともせず敵の右側背に肉薄し果敢なる攻撃に依り機滅的の大打撃を加へ之を潰走せしめ見事に救援の目的を達成した。

續いて八月下旬には二堡及び王口鎮附近の戦闘に参加し衛生隊の掩護及側方警戒に任じ積極的に任務を完遂した。

九月上旬に於ける東子牙鎮の戦闘に於ては氏の所屬中隊は左縱隊の前衛に屬し三日大遼舖を攻撃した。當時敵は子牙河北岸に於て數線より成る堅固なる防禦陣地を占領して居た。即ち其第一陣地として大遼舖小遼舖の線第二陣地として東子牙鎮西子牙鎮の線第三陣地として劉莊の線を選定し相互陣地はトーチカ相關連して頗る頑強なる抵抗を試みたのである。



されば大遼舖の攻撃時には正面は勿論小遼舖東側の側防機關銃より猛烈なる側射を受け攻撃前進は甚だ困難であつた。氏は第一線火線分隊長として一進一止巧に分隊を誘導し射撃指揮亦極めて適切にして敵に多大なる損害を與へ以て大遼舖の堅壘を奪取し所屬兵團爾後に於ける戦闘に重大なる影響を與ふるに至つた。六日には最も堅固なりし劉莊を攻撃した。當日所屬中隊は當初部隊豫備隊たりしが戦況の進展に伴ひ大隊の左第一線に増加せられた。附近の地形は水濠泥濘に依り皇軍の行動を妨害し又土壁内より交通壕を設けて土壁外の掩壕に通じ二段の抵抗線を以て猛火力に依り我が攻撃を阻止した。迫撃砲擲彈筒チエツコ機銃彈等の飛來は嵐の如く一寸の身動きさへ許さぬ状態であつた。然れども氏は剛勇不撓率先機敏に躍進し正確なる射撃を以て重要目標を逐次に制壓し突撃路を開き遂に敵陣地に突入するや敵數人を刺殺し尙も縱横無盡に激衝粉碎し息つく暇もなく子牙河畔に壓迫して當面の敵を掃蕩した。

九月十日よりの東辛莊附近の戦闘に於ては所屬中隊は十日午前四時行動を起し午前七時二十分より攻撃を開始した。即

ち小河と稱する部落の東南約一軒に在る敵陣地に對し攻撃隊形を取つたが敵は我に數倍し迫撃砲機關銃を以て猛射を加へ來り頑強に抵抗を續けた。所屬小隊は右第一線となり前進を重ね翌十一日午前四時三十日頃中隊主力は左前方小河部落の敵陣地に對し攻撃し戰鬪酣となつたが氏の所屬小隊は敵の最も重要な退路を遮斷すべき重要任務を與へられ小河に通ずる堤防上を前進し辻路附近の頑強なる敵陣地を占領するや辻路附近及後方五十米の高地並に右岸の第二抵抗線より猛烈なる集中火を浴び小隊は一時孤立無援の窮境に陥り死傷續出するに至つた。氏は沈着克く部下を指揮し將來の戰果擴張の爲極めて重要な所以を部下に會得せしめ命を的に率先直前の敵陣地に突撃を敢行したが無念なるかな氏は頭部及胸部に數彈を受け壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は氏等の尊き犠牲に依り十二日午前四時小河を占領するを得た。

氏や幼にして學を好み頭腦明晰常に優秀なる成績を挙げ農事に志して改良進歩を圖り諸人の愛敬と信頼とを受け其將來を矚目され軍に従ふや優秀なる幹部として部下の敬仰を受けて居た。果然聖戰に参加するや慧眼克く戦局を看破し剛勇機敏機宜に適する分隊指揮に依り敵に甚大なる打撃を與へ以て到る所所屬中隊をして赫々たる武動を奏せしめた。あゝ斯か有爲にして精悍なる幹部を此一戦に喪ふ痛嘆愛惜の情に堪へずと雖も氏の功績たるや北支戦線の最堅壘として敵が難攻不落と恃みたる必死の防戦企圖を僅に數日間にして畫餅に歸せしめ皇軍の威力を中外に宣揚せしめたる貴重の礎石であつた。氏の至誠一貫は神人共に認むる所其芳名や千載に芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國並に實家、養家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉彰並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 成瀬 忠 正

孝子、南京城外の激戦に上官の危急を救はんとして殞る

氏は茨城県水戸市蓮池町の人にして亡父を忠恕母をしげと云ひ明治三十二年十月十日に生れ妻タヨとの間に忠行、彌生、千草、忠昭の四愛子を擧げた。資性温良着實にして孝心深く又極めて責任觀念に富んで居つた。大正十年三月茨城県立工業學業を卒業し同十年十二月幹部候補生として水戸歩兵聯隊へ入隊し熱心勉勵學術科を修得し翌十一年十一月除隊となつた。除隊後は仙臺鐵道局經理部用品試験場に勤務し精勵格勤上司同僚の愛敬を受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年十月下旬應召千葉部隊に屬し聯隊砲中隊の觀測班長として勇躍征途に就いた。斯くて十一月初旬中支の一角に敵前上陸を敢行し幾多の艱難辛苦を克服して南京方面に前進し十二月八日秣陵關及び楊山附近の戦鬪に参加するに至つた。氏は此際敵の猛射を意とせず勇敢機敏に敵情を偵察し中隊長を輔佐して適切なる放列陣地並觀測所を選定し愈々射撃を開始するや的確なる射彈觀測をなし有效適切なる射彈を以て敵陣地の要點を制壓し以て克く所屬部隊戦鬪の骨幹をなし戦勝の素因を與へた。翌九日將軍山の敵陣地を攻撃するや氏は彼我の情況を明察して戦況の推移を豫察し常に事前の諸準備を圓滑ならしめ又射彈觀測を援助する等適切機敏に中隊長の戦鬪指揮を輔佐した。

十二月十一日所屬中隊は午前六時より行動を起し南京城の南方約一里に在る花神廟附近に陣地を占領し午前八時より敵陣地に對し砲撃を開始した。敵は堅固なる既設陣地に據り巧に偽装を施し其發見困難なりしが氏は慧眼克く右前方高地に活動中なる敵重火器の位置を確認して速に之を中隊長に報告し瞬間にして之を撲滅し以て友軍歩兵の戦鬪に著大なる支援を與へた。然るに敵は午前九時頃より氏の所屬中隊に必死と猛射を浴びせ來り中隊長は右足を打ぬかれて倒れた。其の瞬

間氏は「隊長やられましたか」と駈寄つて介抱せんとしたる一刹那第二の砲弾が氏の身邊に落下炸裂し悼ましくも其破片に依り氏の左下肢を打碎いた。苦惱のうちより之を眺めた清宮中隊長は鮮血にまみれた足を曳きづり乍らも氏を介抱し約二時間も抱きかゝへて部隊に送りついたが其後衛生隊の手厚き看護の甲斐もなく同日戦場の華と敢り中隊長も其後五日目に部下の後を追ひ護國の神となつた。



氏や母の愛育に育ち孝心深く出征後も暇ある毎に母の安否を尋ね「十一月二日未だ内地を離れません。相變らず元氣です、寒さの折柄母上様には御自愛の程を祈ります」母上様お元氣ですか、愈々戦も三日後に迫りました、準備は既に完了してゐます。立派に働きたいと思つてゐます」本日正午目的地に着きました。ドシ／＼上陸部隊が陸へ陸へと進んで行きます。軍艦からの砲撃が殷々と響いてゐます。〇〇〇城占領の無電が入りました。我々の上陸は明日です。皆張り切つてゐます御安心下さい」と母本位に巨細に己が行動を知らせし氏の心根は孝子の面目躍如たるものがある。而して上官の危

急を救はんが爲自己の危険も眼中になく一目散に駆けつけた氏の決意行動は亦所屬隊將兵の目頭をあつくさせた。あゝ斯る純眞麗朗の心境に慧眼克く的確なる敵情を擧げ勇猛沈着正確なる射撃観測を行ひ以て聯隊砲の威力を遺憾なく發揮せしめ所屬隊をして赫々たる武勳を奏せしめた。眞に是れ精悍有爲の幹部にして軍民の鑑とすべきである。今や其壯容に接すべからずと雖も其芳名は赫々たる武勳と共に皇軍戦史を飾り不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 植月 紀

沈着剛膽にして馬廠攻撃の準備に活躍せる指揮班員

氏は岡山縣津山市總社の人にして亡父を郁二母を喜志恵と云ひ大正元年十月九日に生れ未だ獨身であつた。性温順なるも堅忍不拔の氣概を有し孝心深く友情に富み責任觀念亦旺盛であつた。昭和六年三月岡山縣立津山中學校を卒業したが在學間蹴球の主將として名聲を博し又機械に關する趣味を有しラヂオ、ミシン、時計等も自ら修理し得る特有の技能を有つて居た。昭和八年一月岡山歩兵聯隊に入營したが氏は飽く迄も獨立獨歩の主義より普通の現役兵として服役した。入營後間もなく滿洲派遣部隊に屬し警備の重任に就き小城子局子街草溝等の守備を全うし其間伍長勤務上等兵を命ぜられ同九年五月内地歸還同年七月を以て善行證書下士適任證書を附與せられ滿期除隊となつた。同年十月には秋期演習の爲召集せられ成績優秀に依り伍長に任官せしめられた。除隊後はミシンに關する研究をなし昭和十二年三月より西宮市庭町にて裁縫ミシン商を開業し業務に精勵して居た。

昭和十二年七月中旬演習召集として岡山歩兵聯隊へ應召し速射砲に關する教育を受けたが八年上旬赤柴部隊に屬し杉田中隊の分隊長として勇躍北支方面への征途に就いた。

斯くて八月下旬靜海附近の戦闘には第一線小隊火線分隊長として勇戦し唐官屯附近の戦闘には武器掛下士官として中隊

指揮班内に在りて敏腕を發揮し爾後亦同一職務を以て馬廠附近の戦闘に参加するに至つた。
 唐官屯附近に於て勝利を得たる所屬大隊は敵を追撃して馬廠河の北方曲庄陳庄の線に進出したが敵は馬廠河南岸の既設陣地に據り同河北岸地區を汎濫地帯となし我が軍の近接を妨害した。九月九日所屬中隊は大隊の左第一線中隊を命ぜられ同日午後五時三十分薄暮を利用して第四中隊と交代するに至つたが氏は其間第四中隊との連絡に任じ彈雨を冒し腰を没する濁水を跋涉して所要の連絡を完うすると共に進出地域の地形を周到に偵察し以て所屬中隊交代時の損害を最少限に止め敵をして乗ずる機会なからしむるを得た。翌十日午前三時所屬中隊は大隊命令に基き寺院高地の東方に陣地を占領し爾後の攻撃を準備するに至つたが氏は克く中隊長を輔佐し工事に先立ち自ら敵の遺棄せる工具を使用して工事の經始を行ひ以て中隊の陣地構築を容易ならしめた。



全火力を以て對岸の敵を制壓するに至つたが氏も亦中隊指揮班員を指揮して第二小隊正面に進出して火力を増加し沈着正確なる射撃に依り適切有效に頑敵を制壓した。敵は大なる痛痒を感じたるものゝ如く頻りに猛烈なる迫撃砲の集中火を我が中隊正面に指し向けて來た。氏は更に之に怯まず依然として奮闘を續けて居たが午前十時十六分敵の迫撃砲彈身邊に落下炸裂し爲に氏は頭部に大破片創を受けて其場に打ち倒れた。附近に在りし部下兵員は之が手當を施さんとすれば氏は兵

の力を借りて東方に身向け合掌する事暫時やがて靜かに圖囊を取り外づし之に指さしながら悲壯の戦死を遂げた。所屬大隊主力は氏等の勇戦奮闘に依り行動極めて困難なる濁水地帯を跋涉して河岸に近く進出するを得た。

氏は誠實にして勇往邁進の人、軍に従ふや責任觀念極めて旺盛にして會て不平不満を口にせず上官に事へて敬虔部下に對するや温情を以て誘掖し嚴正軍紀を確立し上下の信頼を一身に蒐めて居た。氏の馬廠河畔に玉碎するや所屬中隊長は得難き部下を喪つたと嘆息した。蓋し氏は人格に於て又技能に於て優秀なる幹部であつた。其臨終に於て最早や言語をも發し得ざる瀕死の重態なるに拘はらず遙かに東天を拜し合掌せるは是れ宮城の遙拜であり又親先祖への挨拶であらうかと察せられる。又圖囊を外づし指さしたるは職務に關する重要書類の始末を依頼せるものと考へられる。忠孝の至誠自ら茲に現はれしもので天晴れ軍民の模範であつた。今や其人空しと雖氏の功績は皇軍戦史を飾り其不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國の前途に將た一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。
 氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 藤田嘉一郎

獨斷擲彈筒射撃を以て敵を制壓し難局を打開す

氏は兵庫縣多可郡野間谷村の人にして父を愛太郎母をしずると云ひ大正三年二月三日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚着實にして業務に勤勉又父母に孝養を盡し弟を勞はり一家和合の中堅となり世人に對し亦親切叮嚀にして郷黨の模範青年として矚目されて居た。昭和三年三月野間谷小學校高等科卒業後農業に従事する傍ら同村青年學校へ通學し同八年五月

卒業成績常に優良にして數回に亘り精勤賞を附與せられ模範生として信望厚かつた。昭和九年十二月近衛歩兵第三聯隊へ入營成績亦優秀にして昭和十一年六月普行證書及下士官適任證書を附與せられ歸休除隊となつた。除隊後は村内青年學校指導員を囑託せられ熱誠克く指導に任じ聲望益々高まつた。



支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召沼田部隊に屬し擲彈筒分隊長として勇躍征途に就いた。北支到着以來降雨泥濘其他幾多の辛酸を克服して強行軍を続け八月二十六日夜半四黨口に前進するや途中夜暗に加ふるに全くの浸水地帯を踏破したが氏は克く分隊を掌握しつゝ四黨口に入り午前九時半敵前三百米の地點に進出するや敵の猛射を浴びたが飽く迄も剛膽なる氏は益々沈着して部下を掌握し勇戦奮闘數時間の後敵を撃退し所屬部隊の集中を終つた。

斯くて九月二日以来津浦線に沿ひ南進し陳官屯馬廠滄州の激戦を経て德州の追撃戦に参加したが其間氏の所屬中隊は各占領地域の掃蕩及び警備に任じて居た。氏は骨肉の歡を啣ちつゝも部下を激勵克く警戒の重任を全うし十月十四日德縣附近に於て所屬大隊長の指揮下に復歸した。

所屬部隊は十月三十日以来黃河北岸の掃蕩戦に移つたが所屬大隊は狼窩攻撃の目的を以て十一月十一日午後十時行動を開始し氏の所屬中隊を第一線となし夜襲を敢行した。氏の分隊は中隊の第一線であつたが氏は勇躍部下を激烈に敵彈雨飛の下に躍進又躍進狼窩の敵陣地に肉迫し機敏に射撃位置を求めて適切有效なる射撃を行ひ遂に突撃の號令と共に率先分隊

の先頭に起ち火線分隊と共に果敢なる突入を行ひ敵を撃破し之を西方に撃退し同日午後十一時四十分陣地を確保した。

翌十二日所屬大隊は更に除孟柳家の敵陣地を攻撃した。友軍野砲兵の援護射撃の下に展開を行ひ直に攻撃前進に移り同日午後五時頃敵前約三百米に達するや敵の猛烈なる射撃を浴びた。之れが爲所屬第三小隊は一時攻撃前進頓挫するの已むなきに至つた。此時氏の擲彈筒分隊は獨斷敵の最も猛威を振りありし自動火器を求めて制壓したが程なく携行彈藥の不足を告ぐる状況を察知せる氏は篠つく如き敵の彈雨下を横行して右第一線第二小隊の許に至り彈藥の頒布を受け再び自己分隊に歸還し鮮やかなる射撃指揮に依り頑敵を壓倒震駭し見事に突撃の動機を作爲した。然るに所屬中隊が將に突撃に移らんとする一刹那氏は敵彈の爲右腕並に右肩より左大腿部に貫通銃創を受け 天皇陛下萬歳とかすかにも奉唱して壯烈なる戦死を遂げた。

氏は郷に在つては忠良なる臣民であり軍に従ひては指揮適切武技亦精到攻撃精神極めて旺盛であつた。宜なるかな聖戦に従ふや特に選ばれて擲彈筒分隊長を命ぜられ難局に當りて慧敏克く戦局を打開し突撃の動機を作爲したるや。而かも熾烈なる彈雨下に敵前百米を横行して隣接部隊より彈藥を補給せしが如きは眞に一死報國の念に燃ゆる者ならでは實行不能の事であつた。嗚呼前途有爲の材幹にして且忠勇義烈の此勇士を喪ふ痛嘆禁ずる能はずと雖も人生限あり名盡くるなし氏の功績芳名は天晴れ皇軍戦史に輝き其不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國並に遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は昭和十二年十月一日を以て歩兵伍長に任官したが戦死の日更に歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級 小山 保

瀕死の重傷を負ひ尙部下を叱咤して砲戦を繼續せしむ

氏は長崎縣北松浦郡大島村の人にして父を林重母をセノと云ひ大正四年八月四日に生れ未だ獨身であつた。資性剛毅果斷にして義侠心に富み業務に熱心であつた。又柔道に堪能にして武段を免許され郡聯合青年團體育大會に選手として出場し八名を倒し全勝者として表彰され游泳術にも長じて居た。昭和五年三月郷里の高等小學校を卒業長崎縣立農學校へ入學し同九年三月同校卒業同十一年一月久留米獨立山砲隊へ入營し成績優秀特に照準手の技術検査に於て優秀なる成績を挙げ聯隊長より賞状を附與せられた。同年十一月下士官候補者として豊橋陸軍教導學校へ分遣せられ翌十二年九月同校卒業の上砲兵伍長に任官した。

支那事變起るや原田部隊に屬し片山中隊の分隊長を命ぜられ昭和十二年十月下旬勇躍中支方面への征途に就いた。斯くて江南の一角へ上陸以來は道もなき山河稻田を踏破して幾々百五十里の間或る時は全く食なく或る時は寝ぬるに所なき辛酸を嘗めたが氏は難局に處し益々勇を鼓し克く分隊員を掌握激勵し所在に敵を撃破して十二月八日遂に南京の本防禦たる東善橋北方將軍山牛首山の前面に到着した。此日所屬中隊は前衛砲兵中隊として午前五時行動を起し前兵大隊の後方を續行し正午頃東善橋を通過したが午後二時頃前兵大隊が司徒庄東北高地附近に於て敵の前進陣地を攻撃するや所屬中隊は前兵大隊の戦鬪に協力する爲速かに高家村北方高地に陣地を占領し前面の敵陣地の火點に對し猛射を加へた。氏は其間小隊長の指示に従ひ積極的に活躍し克く戦機に投合して射撃諸準備を完了し以て基準砲車たるの責務を完遂した。斯くて午後二時五十七分より射撃開始となるや最も有効適切なる射弾を送り忽ちにして敵機關銃三銃を撲滅し友軍歩兵に至大なる協

力を與へた。然るに敵は我が有効砲撃に一大苦痛を感じてか我が放列陣地に對し迫撃砲及機關銃の集中射を浴びせ來りて彈巢と化し更に午後三時四十分頃より右前方約五百米附近に在りし敵の機關銃より熾烈なる射撃を受けた。されど所屬中隊は全力を擧げて敵の迫撃砲に對する制壓射撃を續行し氏は克く毅然として彈雨の中に精度良好なる射弾を送つた。午後三時五十七分前記敵機關銃の猛射に依り氏は咽喉部に貫通銃創を受け其場に打倒れた。部下砲手は直ちに之が手當をなさ



んとせるに「馬鹿！ 大切な戦鬪を續ける俺にかゝわるな」と部下を激勵し苦しき息の下より「天皇陛下萬歳」と奉唱し微笑さへ浮べて従容として絶命した。我が第一線歩兵は氏等の尊き協力に依り遂に同日午後十一時頃高家庄高地を占領するを得た。

氏は夙に忠君愛國の至誠横溢し武道並に軍隊教育に依り益々之を玉成し潑刺たる指揮と骨肉に勝るとも劣らざる温情を以て部下分隊の團結を鞏固に俊敏克く基準分隊として各種の重責を全うし一隊將兵の信任厚かつた。果然南京郊外の激戦に於ては壯烈魂神を泣かしむる奮戦を續け皇軍砲兵の本領を發揮して遺憾なかつた。而して其

臨終の際に於ける意氣と態度たるや正に武人の最期を飾り光彩陸離たるものであつた。噫斯かる忠勇義烈にして有爲なる幹部を喪へるは痛惜極まりなしと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に光彩を放ち千載に芳名を傳へられ其不滅の英靈は護國の神と祀られ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵軍曹勳七等功六級 安藤 久男

敵彈下に沈勇剛膽克く工兵の性能を發揚す

氏は岡山縣上道郡高島村の人にして父を猪之吉母をさだと云ひ明治四十四年二月十二日に生れ妻英子との間に長女幸子がある。性質温厚極めて正直にして義務心厚く郷土友人間の交際敦厚諸人の愛敬を受けて居た。大正十五年三月高島小學校高等科を卒業後家事を手傳ひ乍ら同村青年訓練所へ通學し昭和六年十一月修了同七年一月現役兵として岡山工兵大隊へ入營し翌八年二月滿洲派遣部隊に屬し哈爾濱に到着爾來各地に轉戦して戦功を樹て同年十二月には伍長勤務上等兵を命ぜられ翌九年四月戦功に依り勳八等に叙せられ從軍記章及一時賜金を賜はり翌五月内地歸還の上工兵伍長に任官し滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年七月岡山工兵隊へ應召某工兵隊の分隊長として勇躍北支方面への征途に就いた。北支到着後八月下旬迄は各種部隊の集中に關し道路補修に或は砲兵隊の前進掩護等に寧日なき活躍を續け又同月下旬より九月上旬にかけ所屬小隊は中井支隊に協力せんが爲天津—獨流鎮—王口鎮間の道路補修に歩兵砲或は砲兵陣地の構築に或は運河渡河の爲架橋作業を實施する等氏は小隊内の先任分隊長として克く小隊長を輔佐し又部下を激勵し同支隊の作戰行動に至大なる協力を與へた。

九月七日中井支隊が東子牙鎮附近を攻撃するや氏の所屬小隊は同支隊長の直轄となり先づ支隊の劉莊に於ける敵前渡河に協力した。此時氏は部下八名を率ひ折疊舟を以て歩兵部隊を東子牙鎮より水路を利用して劉莊に廻漕中右岸堤防劉莊附近より俄然優勢なる敵の猛射を受けたし。併氏は毫も之に動ぜず作業手を激勵し自ら漕手となり午後四時五十分劉莊に上

陸せしめ支隊作戰成功の第一歩を獲得せしめた。尙敵は退却に當り東子牙鎮南方一軒の堤防を決潰せる爲附近一帯は氾濫地帯と化した氏が決潰地點に短橋を架設する爲危険を冒して材料を蒐集し不十分なる材料ながらも猛烈なる敵火に怯まず作業を敢行し支隊の追撃前進を容易ならしめた。



九月中旬南趙扶鎮附近の攻撃に際しては所屬小隊は東辛莊附近に於て彈雨中に道路補修及砲兵隊の進出に援助を與へ九月十二日には同地北側水濠に突撃路を開設し以て突撃部隊の突入を容易ならしめた。續いて姚馬渡に於ては敵が退却に方りて爆破せる鐵橋及木橋の補修に任じ支隊の攻撃前進に貢献し九月十五日支隊の南趙扶鎮攻撃に際しては獨立分隊を指揮して敵彈下に砲兵陣地進入を援助し翌十六日支隊の滄縣攻撃の轉進に方りては南趙扶鎮に架橋作業を完了し以て支隊の轉進を容易ならしめた。次で王口鎮—獨流鎮—靜海縣道を青縣に向ひ前進し其間野砲大隊其他車輛部隊轉進の爲の道路補修を行ひ實に不眠不休の努力を以て其任務を完了した。

九月二十四日東花園の敵陣地奪取後輕裝甲車並に砲兵隊は迅速なる追撃前進を必要としたが道路泥濘にして其快速性を發揮し得ざるに方り氏は之れが援助の重任を受け敗殘部隊出沒狙撃する中に部下を激勵して迅速なる補修作業を完了し以て軍の企圖遂行に甚大なる貢献を致し爾後德縣に向ふ追撃並に同地附近の戦鬪に於ては困難なる状況下に分隊長として娘々河に架橋作業を完成し又東泊頭に於ては暗夜に歩兵一箇大隊機關銃中隊及大行李を漕渡に依り敵岸に渡河せしめ諸隊の行動を容易ならしめた。

十月十七日所屬中隊長は所屬兵團轉進の爲兵團長より德縣—大營間の道路偵察を命ぜられた。依て所屬中隊長は部下四名を随へ歩兵一箇大隊と共に十九日德縣を出發し德縣—鄭家口—饒揚店間約十六里の偵察を終り翌二十日は饒揚店—大營間の道路偵察の爲同一任務を有する歩兵一箇中隊と協力し午前六時鄭家口を出發した。當時饒揚店に至る道路は悉く浸水地帯と化せるを以て民船に依り午後一時半漸く饒揚店へ到着した。茲に於て歩兵中隊長は小野山將校斥候を以て清洋河及大營に至る道路を偵察せしむべく氏及通譯を附し派遣した。氏は連續三日間の偵察に服し疲労困憊其極に達しありしに拘らず勇躍小野山斥候と共に饒揚店を出發した。清洋河は決潰の爲附近汎濫し幅約六百米水深四、四米にして船に據らざれば偵察は全く不可能であつた。氏は民船を徴し同河の景況を偵察し午後三時頃大營東南二百米に達するや俄然敵の猛射を受けたが氏は毫も之に動ぜず斥候長を輔佐し技術的に偵察を續行した。然れども敵は我が兵力の寡弱なるを知るや包圍隊形を以て攻撃して來た。氏は敵の前進を阻止しつゝ清洋河迄後退した。敵の追撃は猛烈にして辛うじて乗船せるも責任觀念旺盛なる氏は尙も道路の細部を偵察せんと欲し船を繰り所望點にて下船偵察中敵彈熾烈を加へ來り竟に乗船不可能となつた。氏は意を決して河中に飛入り中央部決潰箇所まで泳ぎついたが午後四時頃頭部に貫通銃創を受け終に壯烈なる戦死を遂げた。然かし將校斥候は氏の勇敢積極的の行動に依り偵察の目的を達し中隊の任務達成に大なる貢獻を提供するを得た。

氏は曩に滿洲事變に参加して赫々たる武勳を奏し更に今次聖戰に参加するや大小幾多の戰鬪を經常に一死報國の至誠に燃えつゝ難局に當り黙々として他兵種の行動に協力し隠れたる偉勳を樹てた。定に是れ皇軍工兵の精華にして一般軍人の模範であつた。斯る勇士を褒へるは轉た哀悼痛惜に堪へずと雖も其功績は天晴れ皇軍戰史に牢記せられて不朽の芳名を留むべく其英靈亦護國の神と仰がれ其神靈は尙も皇國の前途に又一家殊に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日工兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵軍曹勳七等功六級 天羽三郎 輜重の模範太原戦に補給斥候に活躍して殞る

氏は兵庫縣津名郡洲本町山下町の人にして父を治平母をみつと稱し明治四十一年八月七日を以て生れ妻かず枝との間に一男二女の愛子を授けられて居る。資性濃厚篤實にして大正十一年三月洲本尋常高等小學校を卒業し鐘ヶ淵紡績會社洲本工場に入り模範工として表彰され現役滿期後再び同工場に就職し工場内在郷軍人會の役員に推擧されて居た。

昭和四年一月大阪輜重兵第四聯隊に入營し同年十一月輜重兵上等兵に進級し同五年十一月二十九日下士適任證書を授與せられて滿期除隊となつた。

斯くて支那事變勃發するや昭和十二年八月上旬應召し輜重兵伍長に進級高垣部隊に屬して北支方面の征途に上つた。

氏の初陣は九月十五日より二十七日に亘る涿州保定會戰に際しての補給勤務で當時氏は第一小隊の第一分隊長であつたが小隊長は九月十四日より二十七日迄坨里附近に於て彈藥の補給並に輸送の任務を以て小隊と分離したる爲め此の間氏は小隊長代理として高垣大尉の指揮に屬し第一線部隊への補給業務に服し克く其任務を遂行した。當時道路不良にして泥濘輓馬の膝を没し殊に易縣以南は行進意の如くならず竟に輓曳を止め輓鞍駄載輸送としたるも炎暑酷烈を極はめ馬匹の疲労甚しく行軍中に斃るゝもの數知れず而も第一線の急進に伴ひ交付所は推進に推進を重ね攜帶糧秣は既に消費し兵員の疲

勞は極度に達した。此の時小隊長代理の重任を擔へる氏は率先涙ぐましく奮勵を以て克く部下を指揮掌握し彈藥糧秣の補給任務を完全に遂行したるのみならず連絡或は自衛隊長を命ぜられたる際にも眞に犠牲的精神を以て剛膽機敏克く其責任を完うした。

次で九月二十八日より十月十二日に亘る石莊滎陽河附近の會戰に於ても所屬小隊長は曩に中隊が易縣に於て輓鞍駄載の爲め残置せる人馬車輛彈藥を前送するの任務を以て小隊と分離したる爲氏は再び十月十二日に至るまで小隊長代理として中隊長高垣大尉の指揮に屬し補給補充の任務を完うした。當時中隊は左追撃隊に配屬せられ第一線の急追撃に伴ひ不眠不休の難路行軍を續け加ふるに行動不自由なる輓鞍駄載にも拘らず敗殘兵を撃退しつゝ晝夜の別なき強行軍を餘儀なくされしも小隊は氏の熱誠努力と適切なる指揮により彈藥糧秣補給の重任を見事に達成した。

更に十月十三日より十一月十日に至る太原攻略の際も氏は復又小隊長代理として中隊長高垣大尉の指揮下に重疊たる山岳地帯に萬難を克服突破して彈藥糧秣の補給に任じ第一線部隊の戰鬪に支障なからしめ殊に十月十八日舊關附近にありし鯉登部隊に對し被服を駄載急進の途上に於ては同日午後零時頃板橋附近に於て突如敵より猛烈なる射撃を受けたが氏は沈着巧に地形を利用して前進し毫も損害を蒙ることなく完全に任務を達成した。

其後中隊は右追撃隊配屬の儘第一線部隊に追隨し太原攻略戰に参加し克く山嶮の難路を突破し晝夜の別なき強行軍を以



て前進し小隊長としての任務を立派に遂行した。而かも氏は此間屢々自衛隊分隊長として警戒自衛の勤務に當り其の旺盛なる責任觀念を以て見事に之等の任務をも果たした。所屬中隊が此太原攻略後軍司令官より名譽の感狀を授與されたのも實に氏等奮闘の結果である。

越えて十一月十一日より十二月四日に亘る間は榆次附近に於て連日連夜警戒搜索の任に服し克く困苦缺乏に堪へ其の任を全うしたが十二月五日山西省北田鎮附近殘敵掃蕩の際氏は斥候長として部下十三名を卒む敵情偵察に出發した。然るに途中數百の敵と遭遇し氏は直ちに傳令を走らし中隊長高垣大尉に報告せしめたが氏以下斥候は數十倍の敵に今は一人にても多く敵を斃して死せんものと我は小數ながらも此大敵と激戰を交へ敵に多數の死傷を與へたが氏亦胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

以上氏の戰場に於ける行動を觀察するに如何なる艱難辛苦をも克服し如來なる危險慘烈なる情況にも毅然として部下を激勵掌握して其任務を完うした。是れ全く氏の崇高なる犠牲的精神旺盛なる責任觀念等優逸せる精神威力の外戰機を看破し適切なる指揮技能に卓越せる賜であつて第一線諸隊の戦力培養に致せる功績は定に甚大であつた。あゝ有爲氏の如き村幹を喪へるは皇軍の爲に痛惜に堪へないが天晴れ軍人の龜鑑として其名は千載に芳ばしく其英靈亦永世に生き護國の神又一家の守護神として尊き加護を垂るべく就中愛子等の將來に絶間なき擁護を加ふる事であらう。

氏は戦死の日勳重兵軍曹に進められ次で勳七等に叙し青色桐葉章及功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 佐藤 秀雄

悲壯萬死に敵情搜索を完了し報告終りて瞑目す

氏は島根縣大原郡斐伊村の人にして父は榮助母はセキと云ひ大正三年四月二十七日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實父母に孝養を盡し職務に精勵世人の信賴厚かつた。昭和二年五月斐伊尋常高等小學校高等科一年にて中途退學し村役場に入り書記補となり次で小學校實業學校給與部主任となり模範青年として自治協會長より表彰せられた。昭和十年一月徵兵として松江歩兵聯隊に入營し同年七月精勤章を附與せられ其の年十二月には伍長勤務上等兵を命ぜられた此間劍術優秀に村賞狀及劍術徽章を附與せられ翌十一年五月下士官候補者となり同年十二月伍長に任官した。

支那事變起るや昭和十二年八月福榮部隊松本隊に屬し勇躍征途に就いた。北支上陸後九月三日先づ夏庄攻撃に参加し六日郝庄攻撃に方つては午前五時頃中隊が展開するや濃霧且濕地加ふるに彈丸雨飛の間氏は先頭に中隊の進路を偵察して誘導し午前十時頃中隊長より第三小隊に其の小隊は敵の左側背に進出して攻撃すべき旨の命令を傳達すべく命ぜらるゝや敵の直前百米にて巧に地形を利用しつゝ勇敢に行動し當時千米も離隔せる第三小隊に迅速に之を傳達して其の任を完うし第三小隊をして適時有利なる地點に進出せしめ以て中隊の攻撃を成功せしめた。尙も六日は郝庄の防禦戰鬪及大十八戸に於ける遭遇戰に。九月十一日は馬廠附近の戰鬪及至維屯附近の追撃に。九月十三日乃至二十六日に亘る滄縣附近の戰鬪に於ては周庄子及李家碼頭の攻撃に。九月二十七日より十月五日に亘りては四窩頭より德縣に向ふ追撃に。十月六、七日は李家橋附近の攻撃に。何れも参加して此間中隊指揮機關として彈雨の下東奔西走戰場を馳驅し克く其使命を完うした。

十月十三日平原附近の戰鬪に於て所屬隊が平原西方約二吉の正莊附近の敵を攻撃し其第一線が敵前約百五十米に達せし

際氏の所屬中隊は第一線に増加を命ぜられた。時恰も午後六時にして第一線に加入せるも日没の爲隣接中隊の位置不明であつた。氏は友軍攻撃の危険ありと認むるや獨斷敵前至近距離に於て剛膽にも隣接第四中隊に至り之と確實に連絡を保ちて歸つて來た。正莊の部落は四圍の土壁に銃眼を設備してあつた。午後六時二十分頃中隊長は一舉突撃を欲せしも夕闇の爲敵陣地の状態は以上の外突撃成功の確信を得る程度にまで判明せなかつた。氏は中隊長に意見具申し單身にて突撃路の



十米の地點であつた。此尊き犠牲に依り所屬中隊は午後七時當面の頑敵を屠り同陣地を占領した。

氏や郷に在りては青年の模範。軍に入りては精勤優秀。其戰場に立ち選ばれて指揮機關となるや中隊の勝敗を双肩に荷ふて立つの概があつた。即ち其熱意の迸る所獨斷となり意見具申となり進んで死地に入り難局に向ふ殊に武技は自ら恃む所あり常に剛毅夜間單身敵前を馳驅し或は敵地に潛入す而かも負傷するも屈せず死期迫るも戰勝を托して已まず。眞に天